
ARMORED CORE 0 Moonlight Familiar

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE 0 Moonlight Family
liar

【Nコード】

N6788P

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

ルイズが召喚したのは、ACという異世界の戦闘兵器だった。そして11年前にあったもう一つの物語が今、明かされる。

※ゼロ魔とACLRのクロスです。

原作設定崩壊が嫌な方にはお薦め出来ません。他のフロム作品もクロス有り。他二次作品キャラの登場もあり。

第1章 取得データ ライブラリ（前書き）

第1章の中で出た情報を纏めたものです。

第1章を読み終えた後や、久々に見る時の情報整理にどうぞ。

第1章 取得データ ライブラリ

誤って読まないように、下記記載

AC情報

AP（耐久力） 8413

ブースターの未接続により、機動力が不完全

・CR－WR69R

右腕に装備するライフル銃。

大きさもあって大砲の弾を発射しているようにも見える。
これでも性能の悪い安物。

射程 455マイル
弾速 300〜400マイル／秒
連射性 112発／分
装弾数 120発
弾薬費 22エキュール

・CR-WL69LB
左手に装着するレーザーブレード。
威力が異常なまでに大きく、斬った相手が蒸発する程。
使用時以外はACの胸部に格納可。
刃渡り 8マイル

・CR-WB69M
肩に装着している、小型誘導ミサイルの発射装置。
弾薬費と威力がとても高い。
射程 500マイル
弾速 約200マイル／秒
装弾数 不明
弾薬費 205エキュール

・CR-F69
学院の宝物庫に『始祖竜の眼帯』という名前で保存されていたFC
S。
オールドオスマンに成功報酬として、そのまま譲ってもらった。
これがあると目標に自動で照準をあわせたり、ミサイルを撃てたり
する。

ロック射程 平均300マイル

射角 広大

收支履歷

[illegible]

時系列

58年前
ササキ商会発足

30年前 經濟制裁事件

29年前 オールドオスマン、月光竜と接触

11年前 エレオノール、ダンケを召喚（無印）

10年前 ガリア大噴火事件

『雲を砕く者』 活躍&故障

ダンケ、漫遊旅行同行中のアルビオンで英雄に（無印）

・ ・

召喚初日 ルイズ、A Cを召喚

(1～3話)

告発資料輸送、成功

(4～6話)

2日目 決闘代行、成功

(7～9話)

7日目 フーケ襲撃

盗品奪取、成功

(10～13話)

主な世界情報

ハルケギニア

魔法が使える『貴族』が、魔法を使えない『平民』の上に立つ社会で、

5つの大国と1つの小国から成り立つ地方。

元々、平民軽視の貴族至上主義社会で、魔法が社会基板だったらしく、

当時はロマリアという宗教国のブリミル教に支配されていた。

30年前に経済制裁を受け、食料や嗜好品の不足どころか、

国家の経済破綻、属国の離脱等の未曾有の大危機に追いやられて以来、ブリミル教の支配を無くし、名前に囚われない実力社会になりつつある。

現在は意識改革が行われ、技術力の進歩に意欲的になっている。

トリステイン国家

土地面積は大国の中ではもっとも小さく、大小の真ん中である中規模国家。

主人公であるルイズの在籍するトリステイン魔法学院がある。

昔は貴族至上主義の度を超えていて、平民を人間として扱っていなかった。

現在、ロマリアの「火のルビー」を保管している。

・ササキ商会

創業58年の、トリステイン内のタルブ市に本拠を構える豪商。ハルケギニアの経済を支配した結果、

30年前に宗教国ロマリアに、異教徒認定を受けた。

反撃として経済に大打撃を与え、ロマリア崩壊という勝利を迎えられたらしい。

既に創業者であるササキ・タケオは死亡。

彼の残したロボット、『天空の守護天使』はガリア大噴火事件で故障。

一族はこの修理を悲願としている。

商会では『天空の守護天使』を『雲を砕く者』と呼んでいる。

・ダングルテールの事件

20年前、ロマリアのヴィットーリオ・セレヴァレが母親暗殺を企てた事件。

母の持つ「火のルビー」という、虚無魔法を発動させる道具が目的。この事件でコルベールは『勇者』の名を得た。

アルビオン

国政に裏から手を回せる程の、大規模な盗賊団がある国。盗賊団は粛清されたモード大公の派閥残党から構成されている。

ロマリア

30年前まで、社会を宗教で支配していた宗教国。

ヴィットーリオ・セレヴァレという虚無使いがいる。

ササキ商会に宗教で攻撃を仕掛けた所、経済で反撃を受け敗北。

現在は隣国のガリアに寄生しているが、事実上の国家崩壊である。

利権故に異教徒認定をしたりと、相当腐敗していたらしい。

ガリア

トリスティンの南にある国。

『自殺王』と呼ばれる現王ジョゼフ1世が虚無使い。

タバサの母国。

・ガリア大噴火事件

10年程前、国土内の火竜山脈が大噴火を起こし、生息する火竜が脱走。

各国に甚大な被害を与えたが、各国の誇る英雄達により討伐されたらしい。

現在、火竜山脈は立ち入り禁止地区で、事実上の保護区となっている。

（各国英雄の情報）

トリステイン ササキ・タケオ（トリステイン以外も討伐）

アルビオン ダンケ（無印）

ロマリア ジュリオ・チェザーレ助祭枢機卿？

ガリア ????

ゲルマニア 位置的に被害無し？

・ゲルマニア

工業技術に優れた国らしい。

前年、コルベールが介入し、技術力に革命を与えた。
キュルケの母国。

・クルデンホルフ

トリステインの属国だったが、
経済制裁事件の騒乱を利用し、独立に成功した。

主な人物情報

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

トリステイン魔法学院の2年生で、『爆殺』のルイズと呼ばれている。

この特殊技能はトリステイン国家から注目されていて、長年、アカデミーから調査協力を要請されていたらしい。

爆発以外の魔法が使えないことに強い劣等感を持っていて、周囲もトゲに触れるのを恐れてか、友好関係はかなり狭い。師であるコルベールから、戦いの愚かさを聞いている。

幼い頃からアカデミーに入り浸り、学院ではコルベールの助手をしている為か、

世間一般よりも思考能力が高く、柔軟性もある。

現在、自分の使い魔の異常戦力に危機感を持ち解決策を模索中。

操縦訓練を続けた結果、AC操縦の基礎をマスターした。

『虚無』という伝説の系統らしいが、本人は覚醒を拒否している。

アーマード・コア（AC）

ルイズが召喚した使い魔で、人が乗り込み操るロボット。

ハルケギニアの常識外の技術力で作られた存在。

ハルケギニアは機械文明を失った社会と考えている（無印のみ流出情報）

相手の名に、リサーチャー（研究者）等の職種名を付ける。
工場出荷直後の状態だったらしく、ルイズが初の対話相手。

戦闘兵器らしいが、何故か戦闘用の装備が一部抜けている。
コンタクト・サーヴァントによっての起動時にウイルス感染し、自立能力を得た。

ウィルスは、『ガンダールヴ』という伝説のルーンが影響しているらしい。

単独でハルケギニア全土を征服出来る程の戦闘能力を持つ。

ササキ・シエスタ

ササキ商会トリステイン魔法学院出張所の店長。

シエスタが名前。

『雲を砕く者』の修理の為に、AC接触を計画していたが、ギーシュから決闘を挑まれるというトラブルの結果、接触に成功。ACの整備契約を成功させた。

タバサ

キュルケの親友で、ルイズの同級生。

ガリアという国で、オルレアンという公家のお嬢様。

タバサという偽名を好んで使っていて、苗字で呼ばれると怒る。

ACに対し、並々ならぬ興味を持っていて、

シミュレーターによって、一夜で操縦をマスターする才能を持つ。

使い魔は風韻竜のシルフィード。

キュルケ

タバサの親友で、ルイズとは名前で呼び合う同級生。

ルイズの実家とキュルケの実家は不倶戴天の敵だが、仲は悪くない。火の魔法を上手に扱える。

使い魔が火竜山脈のサラマンダーという、豪運の持ち主。

シルフィード

絶滅したと言われている風韻竜の子供。

幼いながらも巡航速度100リートを誇る。

ACの戦闘能力に怯え気味。

ジャン・イーヴァルディ・ド・コルベール

トリステイン魔法学院の名誉教師。

魔法の新しい形を求める研究者で、二つ名は『勇者』。

元は暗部の者だったが「ダングルテールの事件」で目の目をみる。

新しい技術に目がなく、公務を放って出張する42才児。

戦争反対を訴える団体『ムラクモ』の代表者でもある。

アニエスという女性騎士に頭があらがない様子。

ACの整備を自ら進んで行っている。

マチルダ・オブ・サウスゴータ

アルビオンの没落貴族で、大規模な盗賊団の一員。

学院ではロングビルと名乗り、オールドオスマンの秘書をしている。

盗賊団解散の為にトリステインで「土くれのフーケ」を名乗り盗みをしていた。

現在は素性を知ったルイズに、ACの修理要員として雇われた。

モンモランシー

ルイズの同級生。

水魔法に長けていて魔法による治療が得意。

治療知識の為か人体構造にも理解がある。

貧乏貴族で、お金にうるさい。

ギーシュとは破局したが、まだ気になる様子。

ギーシュ・ド・グラモン

ルイズの同級生、その2。

土魔法で青銅ゴーレム『ワルキューレ』を操る。

実家のグラモン家はササキ商会から融資を受けている。

二股をかけた結果、AC相手に戦う事になり酷い目に会う。

オールドオスマン

トリステイン魔法学院の学院長。

経費をケチろうとして思わぬしっぺ返しを受ける、運の悪い老人。

ルイズに『始祖竜の眼帯』を渡す。

『始祖竜の爪』はカリーンに送った。

ミス・シュヴルーズ

トリステイン魔法学院の講師。

土魔法の講師である為、対フーケの知恵袋としてフーケ捜索に加わった。

最近、家を買ったらしく金銭面に余裕が無い。

普段は大人しく弱気だが、やる時はやる人情家。

ゼツサール

トリステイン魔法衛士、マンティコア隊の隊長。

前隊長であり、ルイズの母でもあるカリヌを恐れている。

どうやらカリヌとラリカから超スパルタ訓練を受けていた（無印のみ流出情報）

無印、EX共に、どう足掻いてもカリヌから教育指導を受ける事が確定している悲しい人。

サボリ癖があり、興奮すると話を聞かない英雄志願者。

長時間接したにも関わらず、ACを鎧を着込んだ巨人と思い込んでいる。

カリヌ

ルイズの母で、公爵夫人。

更にマンティコア隊の前隊長。

二つ名は『烈風』で、伝説的な生ける英雄。

結婚前後にオールドオスマンから『始祖竜の爪』を受け取った。

現在、『始祖竜の爪』はヴァリエール家の倉庫に封印されている。

ある時期を境に、ACのような巨大ロボットに恐怖心を抱いたらしい。

トラウマの原因は「セラフ」「ナインボール」という名のAC（無印のみ流出情報）

ムーンライトドラゴン

29年前にオールドオスマンを救出した、尋常ではない力を持つ超巨大韻竜。

その際、ACパーツと思われる『始祖竜の爪』を渡す。

異世界から強者を求めてやって来たらしい。

その後の消息は不明。

下記ゲストは全情報公開

ラリカ・ラウクルルウ・ド・ラ・メイルスティア（無印のみゲスト）

カリーヌの親友で、二つ名は『魔弓』。実年齢50才前後だが、肉体年齢は30程。

軍家であるメイルスティア家の一人娘で、魔法だけでなく、弓が異常に上手い。

カリーヌの軍入隊前から親身に接していて、男装がバレた彼女を庇い続けた。

そして王家3部隊の総隊長を影で勤め、隊長時代のカリーヌのサポートをする。

引退後は、国王から隠し子を預かり、厳しくも優しい母だったらしい。

普段は明るく頭の弱そうな口調や態度を気取っているが、彼女を知る者は道化の仮面を被り、他者に慈悲を与える聖女と理解

している。

裏

前世の現実世界でゼロの使い魔を知っている再転生者。前前世は貧乏なメイルスティア家で、

未来も何も無い『絶望』の二つ名が付いたほどの不幸。

再転生した際、何故かメイルスティア家は裕福な伯爵家になっていて、本人は大変気を良くしていたが、カリーヌの正体に気づかず接触。気付いたときは軍に志願入隊され、必死になって訓練した結果スクエアメイジに。

弓と魔法の混合技術で戦い続け、『烈風』と並ぶ伝説に。

落ち着いて余生を過ごすつもりが王家から養子を出されパニックに。義理の息子も成人し、領地を引き継ぎ、ようやくと・・・と思った

今度はアンリエッタ姫殿下が息子を気に入ってるよ！

ヴェールズはどうしたよ、このロイヤルビッチ！親近相姦やべえ！と、のた打ち回る所に、ゼッサールの訪問の知らせが届いた・・・。

※『幸福な結末を求めて』の主人公をお借りしました。

めり夫様、ありがとうございます。

ダンケ（無印のみゲスト）

ルイズの上姉であるエレオノールに召喚された使い魔、人間である。東のロバ・アル・カリイエの、更に東にある国から来たらしい。

魔王に国を狙われる度に戦ってきた総大将。

現在の王を部下に任せるといふ、その国の王家以上の権限を持つ。異常なまでの戦闘能力を振るい、エレオノールの護衛を務める。

10年程前、ヴァリエール家一同で諸国漫遊をしていた際、アルビオン滞在中にガリア大噴火事件が発生。

最前線で火竜討伐を行った結果、『アルビオンの英雄』と呼ばれる

事に。

アルビオン王家にはとても懇意にされていて、アルビオンに招待されているが、エレオノールの護衛を優先し断っている。

真の二つ名は『聖十字の騎士』で、十字に組んだ双剣で敵を倒してきた。

裏

11年前日本からドイツに移住してしまった青年。

顔の筋肉の弱さ、目付きの悪さ、人見知り、口下手で誤解されやすい。

ハルケギニアはドイツの一部で、エレオノールをドイツの技術研究者と知る。

自分が誤ってエレオノールの転送装置に紛れ込んでしまい、

拉致と誤解しかねない状況で、彼女等は穏便に済ます和平交渉を行っていた。

ふとした事で、喋る日本刀型AⅠのデルフリンガーをプレゼントされる。

拉致問題解決までエレオノールの護衛と偽装して過ごしていたが、出張先の生体兵器実験区に紛れ込み、戦うことに。

そして、「るくん♪」というナノマシンの力で戦闘能力と知力を上げ、

神に祈りながら戦い、生体兵器を撃破。

それが問題となって、拉致交渉どころではなくなってしまった。

日本に帰れなくなってしまった自分に対し、ヴァリエール公爵は、原因であるエレオノールの人生を好きにして良いと言われたが、

自分はそこまで怒っていないし、人を物扱いしてはいけなさと説得それから10年後、行く先々で暴走した生体兵器や強盗を倒している日々で、

カリィヌにエレオノールは罰を待ち続けている事を説明され、

自分は彼女が傷つかない罰を考えに夜風に当たりに行った・・・。

・・・と、本人は思っている。

※『後悔すべき毎日』の『零の使い魔。』主人公をお借りしました。

ネクオ口様、ありがとうございます。

第1章 取得データ ライブラリ（後書き）

※

1／16

タイトル変更

1／19

タイトル変更、章分けにより追記終了

第1話 未確認機を確認（前書き）

初めまして猫目石と申します。

ここでは初めての執筆なのでミスが多いと思いますが生温かい目で見守ってくださいと幸いです。

1話目の時点でフロム他作品が絡みますが、大丈夫な方はどうぞ。

第1話 未確認機を確認

ハルケギニアの昼下がり・・・。

ここは、トリステイン魔法学院内にあるササキ商会出張所。
学生・教師・衛兵・使用人と全ての人員を対象とした日用品店で、
店長を任されているササキ・シエスタは睡魔と戦っていた。

「・・・あふう・・・ねむいわ・・・〔バゴォーン!〕・・・
時々、爆発音がするけど・・・コルベール先生・・・かしら・・・
?」

「シエスタ、眠そうだな」

「はれ?・・・マルトー・・・さん・・・ンッ!

『何時でも何処でも困ったときのササキ商会』へようこそ!
こんにちわ、マルトーさん。何か『相談事』でしょうか?」

「よだれ出て〔ドガァーン!〕・・・出てるぞ。

今日もゲルマニア製の鍋に穴が空いてな、本当に『相談事』なんだ」

いかにもキリッという効果音が付きそうな態度でシエスタは商人の
顔をする。

学院の料理長マルトーは呆れた表情をしながら、カウンターの
招かれる。

「ああ、今年度の備品は学院長が安値で買い叩いたんでしたね」

「そうなんだよ、10個中4個も壊れやがった。

この調子だと来月まで持ちそうになくてな「ボギヤーン」……。学院長から許可は貰ったぞ、コレだ」

「・・・オールドオスマンからの調理品仕入れ委託、確かに承りました。

で、マルトーさんが、今案件の学院側の最高権力者だそうです。鍋は何個必要でしょうか？ 大き「メメタア」・・・大きさによってはオーダーメイドになりますよ」

「どうしても大きな物ばかりになるからなあ・・・元から俺に任せてりゃ良かったのによ」

二人はあーだこーだ言いながら、羊皮紙から移行しつつある新たな紙『ペーパー』に書き込み続けた。

マルトーは必要な物を思い出しながら喋り、シエスタは聞きながら業務用販売書のページを捲る。

時折、遠くから聞こえる爆発音をアクセントに時間は過ぎていった。

「マルトーさん、予算ギリギリです。

これ以上はちょっと私では難しいですよ。

ち「ドーン」・・・直接、本社と学院長で話を付ける必要があります」

「もうちょっとで欲しい物全部買えたんだがなあ。あんな粗悪品を買って無ければ・・・」

「それが無かったら更に予算は少なかったでしょうね。
コレ、絶対に侘びでのポケットマネーですよ。

今年の『被害額』を考えれば500エキュ―「チュドーン」・・・
なんて出せませんもの」

「諸悪の根源はあの嬢ちゃんなんだよなあ。

英雄の子供と言っても限度があるだろ。

学院長もヴァリエール家に請求しろよ・・・」

「まあまあ・・・それが出来ないからこうやって自腹切ってるんですよ」

「はあ・・・だよなあ」

「そ、それよりも、さっきから客が少ないんですよ。

何か「ドンガラガッシャーン！」・・・あったんでしょうか？」

落ち込みながら溜息をつくマルトーを見て、シエスタは話題変更を試みる。

「ああ・・・ソレな。

2年は今日、使い魔召喚の儀だろ」

「「ドゴーン！」・・・ああ、ミス「ズガーン！」・・・ヴァリエールの。

も「ドゴォ！」・・・もしか「ドガンッ！」・・・もしかしてコレ？」

「あ「ボンッ！」・・・ああ、コレ「バンッ！」・・・」「いい加減にしてー！！！」」

「・・・今の、ミス・ツエルプストーですかね？」

「いや、多分縦ロールの・・・モンモンランシーだったか？」

「ミス・モンモランシーですよ。」

「コルベール先生だと思ったら、ミス・ヴァリエールでしたか」

「そういうこった。」

折角の午後休みなのに、『爆殺』が怖くて出歩けないんだよ」

シエスタは頭を押さえて溜息をついた。

爆殺のルイズが暴れていては、商売上がったりだ。

最強の烈風カリンの娘に恥じない、最凶の爆殺ルイズ。

欠点はソレが魔法の失敗で、全ての魔法が爆発になるぐらいか。

しかも、その爆発魔法を本人は劣等感に思っているせいでフォローのしようがない。

去年、『何時でも何処でも困ったときのササキ商会』の売り文句を盾に殴り込み、

「困ってるから何とかしろ」とヤケになっていた彼女の叫びを思い出す。

ちなみにマルトーは既に悟りの境地に達したのか無表情だ。

「じゃあ、今日は夕方まではお客は期待できませんね。
早いでしょうけど、今からメイドします」

「おう、そりゃ助かる。」

今年から入ったメイドが2人も寝こんでな、メイド長が困っていたんだよ」

「今朝は全員いましたよね？」

何かあったんですか？」

「昼食の時、食堂で1年が『爆殺』されてな・・・現場に居合わせ
てたらしい」

「・・・うわぁ」

マルトーが語る詳細を聞きながら他の店員に引継ぎをするシエスタ。
なんでも、トライアングルクラスで1年生のリーダーを気取っていた
男子が挑発したらしい。

彼が決闘に持ち込む前に、『爆殺』お得意のコモン抜き撃ちで秒殺
だったとか。

ただでさえ中範囲&高威力の爆発を一言で発動・・・そりゃ相手は
何も出来ないだろう。

そんな感想を抱きながら話を聞いている内に件の『爆殺』のいる中
庭に差し掛かった。

「で、それからメイドはぶっ倒れるわ、昼食はおジャンだわ、備品
壊れて学院長が泣くわ・・・」

「うわぁ・・・死人が出なかったのが救いですね・・・ん？」

「ラスト！これがラストであってくれ！」

「先生、もう嫌です！中止して下さい！」

「ルイズ、いい加減に成功させて！日が暮れるわよ！？」

「貯めてなくね！？精神力集中してなくね！？俺等、死ぬんじゃね
！？」

「止めろ！誰か爆殺を止めてく「ボンッ！」グヘッー！？」

「ヴェリエー！！傷は浅いぞ、しっかりしろー！！」

「気絶しているから言っても無駄だ。本人を目の前に爆殺なんて呼ぶから・・・」

「レイナール、冷静に言っていないでなんとかしようぜ！？」

シエスタ視点

・・・なんだろう、この阿鼻叫喚地獄。

シエスタは見なかった事にして歩調を早める。

マルトーさんも同じように急いで離れようとしている。

「・・・マルトーさん。その倒れた人は何の受け持ちだったんですか？」

「あ、ああそれな。確か食堂の給仕と女子寮のメイクだったな」

「そうですか、じゃあ・・・」

「ミス・ヴァリエール、もう時間がありません。
次を最後にしましょう。」

全神経を集中しなさい！」

「ハッ、ハイ！集中ですね！？・・・集中、集中・・・」

「・・・。」

「・・・。」

コルベール先生と、ミス・ヴァリエールのやりとりに時が止まる。
普通の集中ですら講堂が吹き飛ぶ威力なのだ。

それを全力で集中すればどうなるのか・・・考えたくもない。

隣のマルトーさんを見る。・・・ああ、始祖ブリミルをクソツタレ
とかなじってる。

確かに、魔法なんて無ければ私達はここで死なずに済んだだろう。
でも、私としてはコルベール先生を罵倒するのが筋だと思う。

あの人は善人で、一族の悲願に役立ちそうな研究者なので好印象だ
が、これは頂けない。

生徒達も同じ心境だろう。コルベール先生を何とも言えない顔で見
ている。

あ、ミス・オル・・・ン！ ミス・タバサは涙を流す余裕がある
みたいだけど。

逃げれば爆殺、このままだと2年生もろとも爆発心中、
望みはミス・ヴァリエールの初めての魔法の成功だけ。
どう見ても絶望です、本当にありがたいと思いました。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！」

ああ、詠唱を始めたした。

お父さん、お母さん、ジェシカ姉さん、スカロン叔父さん、店舗の皆……

先立つ不幸をお許し下さい。

「ドラゴンとかグリフォンとか贅沢言わない！犬猫で良いやとか言わない！」

もう、なんだって構わない！ハルケギニアに居ないなら、違う所だって良い！だから！」

やめて下さい、せめてちゃんと詠唱して下さい。

更に不安要素を増やさないでください。

貴女は本当に召喚する気があるんですか！？

「五つの力を司るペンタゴン！ 我の運命さだめに従いし、使い魔を召還せよ！」

！ へ

へ ツ

ツ

ツ

ツ

ツ

ツ

ツ

ツ

ン

ン

ン

！

！

声が出なかった

まるで 世界が壊れるような轟音だった

目を開けなかった

まるで 世界を飲み込む閃光だった

・ ・
・ ・
・ ・

・・・？

「・・・生き、てる？」

「・・・生きてる・・・生きて、生きてるぞ！俺達！？」

いつの間に倒れていたのか、私達は地面に横たわっていた。隣のマルトーさんは生きている事に泣きながら喜んでいる。何か言ってるが耳がキーンと鳴り続けて聞こえない。立ち上がろうとするも、腰が抜けているせいで立ち上がれない。そして、広場のザワつきに気付いた。

「・・・！！」

「・・・！？」

「・・・！！・・・？」

広場に巨大なゴーレムがある。

ミス・ヴァリエールの召喚は失敗だろうか。

・・・いや、これってもしかして？

そう思っている間に耳が少し聞こえてきた。

「爆殺ルイズはどこに行ったんだ？」

「ゴーレムの中だよ。ミスタ・コルベールが抱えて胸の中に入って行った」

「先生、またアレに戻って行ったんだけど・・・？」

「ふむ・・・タルブ市の『天空の守護天使』を小さくサッパリとしたイメージだね」

「なんだよこの金属？また、ササキ一族か？」

「手に持つてる大きな物・・・もしかして銃じゃないか？」

「そこにササキ商会の店長さん居るけど・・・聞いてみる？」

「綺麗・・・わざわざ青と白で色付けしてるわ」

「ああ、モンモランシー。僕はまだドットだけど、いつかあのよう
な美しい・・・」

生徒達がアレに対しての疑問を持って話している。

青と白を基準とした色合いのゴー・・・いや、やっぱりロボットだ！
曾祖父様の『雲を砕く者』じゃないけど、ロボットだ！

あの銃は何だろう？肩に付いている物は何だろう？

というか、ウチの制作物じゃありません、こっち見ないで下さい。

更にあのロボットは『天空の守護天使』なんて大層な名じゃありません。

あ、コルベール先生が胸から出てきた。

『雲を砕く者』と違って背中がコクピットなんだ？

ミス・ヴァリエールは出てこないみたいだけど・・・？

「コルベール先生！無事ですか！？」

「このゴーレムはなんなのですか！」

「ルイズは！？ルイズはどうしたの！？？」

「うおっ！？何かゴーレムから音がするぞ！」

「皆さん！大丈夫です！」

ミス・ヴァリエールが今からこの『あーまーど・こあ』を動かすので離れていなさい！」

コルベール先生が喋り終え、皆さんが指示に従って距離を取る。

・・・まだ、動かないの？

しばらく待ってみるとロボットの目が光りだした。

そして、腰を捻ったり顔を動かして・・・周囲を見ている。

「こっちですぞー！」と言いなから飛んでいく先生を追うように、ロボットは軽い地響きを起こしながら、ゆっくり歩き始めた。

「あーまーど・・・こあ？」

・・・

・・・ああ、なるほど。

「アーマード・コア・・・かあ。」

調べ上げれば『雲を砕く者』の修理方法が分かるかも？

でも、あんまり目立つと不審がられるからなあ・・・どうしようかな」

「シエスタ？何言ってるんだ？」

どうやら私の午睡は終わらしい。

一族悲願の為に仕事をしよう。

まずは・・・どうやってミス・ヴァリエールに接触しようかな？

第1話 未確認機を確認（後書き）

という訳で、主人公であるハズのルイズを差し置いて、シエスタ視点からの話でした。

とはいえ、現状でのACの理解度は高いので人選は悪くないかと。

『雲を砕く者』はそのままの直訳ですねえ・・・実は未プレイだったりします。

最終話までのプロットは完成していますが、後半に重点が置かれているのが納得いかない・・・。

なので、物語が安定したら、プロットに無いミッションを受けるつもりです。

今のところ、ネタが思いつかないので、

「この国の盗賊退治を・・・」とか「火竜の卵奪取とか・・・」等のアイデアを、

宜しければお願いします。

私のプロットを壊してください。

※12／14 一部書き直し。

シエスタの心情を追加。

ササキ一族についての情報を増やしました。

第3話との時間経過の矛盾の擦り合わせを行いました。

12／25 タバサの家名、書きなおし

1／15 タイトル変更

第2話 ACを召喚しました（前書き）

一日で2人もお気に入りに入ってくれてありがとうございます。

しばらく書き物してなかったせいか、

自分の文章力が想像を絶するメチャクチャになって泣きそうです。

第2話 ACを召喚しました

コルベール視点

『ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。来年からココに通う問題児の一人じゃ。』

王家の血縁であるヴァリエール公爵と、烈風カリンと呼ばれた英雄の娘。

トリステイン国家で考えうる限り、最高のサラブレッドかの。

なのに、魔法がからつきし……いやいやドットとかコモンの次元では無い。

使う魔法は全て爆発、どの系統なのかも不明、アカデミーもお手上げじゃと』

魔法学院の学院長であるオールド・オスマンから最初に受けた説明はこうだった。

たかが教師の一人である私を、わざわざ呼び出した真意は別の所にあった。

『彼女の爆発はとても見事なもんじゃ。』

スクエアメイジが数人がかりで作る固定化を、コモンの詠唱だけで打ち破りおる。

しかし、悲しいことに彼女自身は、魔法の失敗に劣等感を持っておる。

そこで君に……、魔法学院名誉教師でもある、ジャン・イーヴァルディ・ド・コルベールに彼女の意識改革を任

せる。

新しい魔法の形を研究する君なら、彼女に新たな道を見つけさせるかもしれない』

そんな事を言われても困る。

私は『魔法で新たな何かを生み出す事』を研究しているのだ。

名誉教師と言われても、メンヌヴィルの凶行からアニエスを庇っただけだ。

誰でも目の前の子供が殺されそうならそうするだろう。

そう伝えたと、オールド・オスマンは・・・そうだ、確かこう言った。

『ほっほっほ・・・』

それが出来るから、君は『勇者』コルベールと呼ばれるのじゃよ。思う事は出来ても実行は難しい。炎の中に飛び込むとなると更にな。

30年前の経済制裁事件、確かに貴族と平民の溝は変わったと言える。

しかし、平民を庇う貴族というのは今だに考えられん。

ワシの若い頃は少数ながら居たものじゃが・・・まだ、あの頃の思想には遠いか』

確かに、あの事件の後から世界・・・いや、貴族と平民は変わったのだろう。

ロマリアによる、世界経済を牛耳ったササキ商会への異教徒認定。

商会はその報復に、世界中への経済制裁を開始。

未曾有の経済危機が相手ではブリミル教とはいえ、相手が悪すぎた。

ササキ商会に真っ先に付いて被害の無かったアルビオン、少し遅れてガリア。

金銭の需要と供給が崩れ、トリステイン属国から抜け出せたクルデンホルフ大公国。

クルデンホルフに逃げられ、てんやわんやのトリステイン。

最初から「ブリミル教とは無関係」を貫き通したゲルマニア。

逆に孤立無援となったロマリアは散々な目に・・・。

元々、ロマリアはブリミル教だけで維持していたので生産力も無く、現在はガリアに寄生して今日まで消えること無く凌いでいるようだ。今年度の生徒達には、昔のロマリアの影響力を理解する事は出来ないだろう。

『もし、あの事件が無ければ、君もどうなっていたか・・・』

確かにそうだ。

あの事件があったから、疫病という嘘が暴かれた。

ブリミル教が地に落ちたから私も、あの血濡れた道から脱出できた。一つズレていれば既に死んでいただろう。

生き残ったとしても、心を壊しただろうか？

・・・

現実逃避はもう止めよう。

目の前の必死な少女を見守る事に、私の過去は関係ないはずだ。

「せ、先生！」

まだ、まだやらせて下さい！」

「勿論です、ミス・ヴァリエール。

諦めないことには前に進めません」

「ハイ！」

彼女の爆発は既に1つの系統を名乗れそうな域に達しつつある。

アカデミーでは彼女の爆発を、調査ではなく再現しようと研究しているらしい。

しかし、私が思うに彼女の最も賞賛すべきところは、絶対に諦めないという不屈の精神だろう。

「マジかよ！？もう100回は以上は失敗してないか！？」

「ええー、もう待ちくたびれましたよ・・・」

「タバサ、今何回目？・・・そう、99回も待ったのね私達」

「次が100回目かよ・・・」

「いい加減にしてー！！！！！」

「ど、どうしました、ミス・モンモランシー？

急に大声を出すほど耐え切れませんでしたか？」

「ミスタ・コルベール！

私の使い魔が！ロビンが震えているんです！

いい加減に解散すべきではないでしょうか!？」

た、確かに・・・もう、使い魔との交流も取れそうにない程の時間。これ以上、一人の為に時間を掛ければどうなる事か。

彼女に聞かれれば、ミス・ヴァリエールに首ったけと勘違いされ、そして・・・

いや、これは違うぞコルベール!

そう、他の生徒達にこれ以上迷惑をかけれないのだ!

決してアニエスが怖い訳ではない!

戦術を駆使する銃士隊副長とはいえ、私の方がまだ強い・・・はず。そう!勘違いしたアニエスをミス・ヴァリエールの反撃から守る為にだな・・・。

「ラスト!これがラストであってくれ!」

「先生、もう嫌です!中止して下さい!」

「ルイズ、いい加減に成功させて!日が暮れるわよ!」

「貯めてね!?!精神力集中してね!?!俺等、死ぬんじゃない?」

「止めろ!誰か爆殺を止めてく!」ボンッ!」グヘッ!」?

「ヴィリエー!?!傷は浅いぞ、しっかりしろ!」!

「気絶しているから言っても無駄だ。本人を目の前に爆殺なんて呼ぶから・・・」

「レイナール、冷静に言っていないでなんとかしようぜ!」?

うん、生徒達も限界なんだ。仕方ないさ。

ミス・ヴァリエールには悪いが、後日の補修という事で今日は終りにしよう。

「次で最後にしましょう」

ルイズ視点

その言葉を聞いた時、頭が真っ白になった。
入学後からずっと見守っていてくれたミスタ・コルベールに、
『勇者』に見捨てられたような気がした。

最初に学院長から紹介された時は、気弱そうなおっさんという印象だった。

何故、この人が『勇者』の二つ名を持つ名誉教師なのか理解出来なかった。

ちい姉さまとは違う優しさを持った人と理解出来たのはしばらく経ってからだ。

魔法成功率『ゼロ』、『無能』のルイズ等のイジメを受けた時に言われた言葉。

『まだ持っていないのを責められるなら、
逆に彼等が持っていない物を見せつけければ良い』

まあ、何というか・・・その頃の私は気が立っていたのだろう。
イジメのリーダーを威嚇する程度に・・・爆発を放った。
結果、イジメが無くなった変わりに『爆殺』という二つ名が付いた
のよねえ。

そして先生から叱られた。

『何故、攻撃という手段を取ったのか』

悲しそうな目をする先生に私は何も反論出来なかった。

アカデミーでも私の爆発は攻撃手段として見られていた。
それを、攻撃以外の別の手段に使えるはずだと、
見つからないなら作れば良いと、そう説得された。

・・・ス。ミス・ヴァリエール？大丈夫ですか？」

「え、あ・・・はい」

「ミス・ヴァリエール、もう時間がありません。
次を最後にしましょう。」

全神経を集中しなさい！」

「ハッ、ハイ！集中ですね！？・・・集中、集中・・・」

珍しく先生が大声を出した。

よっぽど私は動転していたのだろうか。

その大声は私を見捨てていない証拠なのだろう。

なら・・・これで成功させてみせる！

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！」

成功させるんだ！

色んな文献を読んだり、多くにメイジに召喚の時の心境を聞いた。
秘訣は・・・

「ドラゴンとかグリフォンとか贅沢言わない！犬猫で良いやとか言わない！

もう、なんだって構わない！ハルケギニアに居ないなら、違う所だって良い！だから！」

それは、純粹に願うこと！

「五つの力を司るペンタゴン！ 我の運命さだめに従いし、使い魔を召還せよ！」

目が見えない程の閃光に包まれる

でも 目は視えている

耳が聞こえなくなるほどの轟音

でも 耳は聞こえる

体中から魔法の精神力を失う感覚

でも 魔法が無限に使えそうな感覚

「・・・」

ゆっくりと光を失う暗闇で、目を凝らす。
何か視える。・・・何だろうコレ？

金属で出来た小人の家？

小人の兵士を襲う金属で包まれた3匹の虫達？

反撃も虚しく、口元からの、よく分からない攻撃で蹂躪される小人達。

そして、急に屋根を背中の銃だろうか？

とにかくソレを撃って、高速の銃弾は爆発し、屋根を攻撃する。

崩れる屋根

舞う粉塵

そして・・・

太陽を背に！

連射する銃を撃ちながら落ち！

虫の1匹を破壊する紫色の全身鎧を着た戦士！

着地の衝撃で揺れる小びとの家

手すりに必死でしがみつく小人

残った2匹を無表情に見つめる光る一つ目の戦士

虫は高速の銃弾を放ち反撃する

しかし戦士は滑るように避けながらブレイドで切り裂く！

そのままの姿勢で銃を撃ちながら残りの1匹を威嚇する戦士

虫は負けじと反撃するが簡単に避けられてしまう

そして肩から・・・なによコレ？

10発ぐらいの弾を同時に放ち爆発？

呆気無く倒される虫・・・

・・・

静まり返った家で羽を広げた鳥を見る戦士

戦士が眼光を失い・・・背中が急に開き・・・小人が出てきた！？
変な服装だけど、胸があるって事は女性よね？

さっきまで何も無かったかのように平然としてる・・・
彼女にとっては大した事無かったのかしら

あ・・・目の前が明るくて見えなくなって・・・
助かった小人と何か話してるみたいだけど、何語か全然分からない
わね

小人の女性が戦士の中に戻って行く
戦士が再び目に光を取り戻して壊れた屋根を見つめる
助かった小人達は戦士に手を振っている

戦士は空を飛び去って・・・駄目、明るすぎて視えないでも、なんとなくだけど

あの戦士は次の戦いの場に向かった気がする

「・・・」

光が弱くなってきた。

目の前に物凄く大きな何かが見えてきたけど・・・？

徐々に見えてきた視界の中で、私はソレの全体を捉えようと見上げた。

「・・・何よ、コレ？」

見上げて最初の言葉だけど、誰でもそう言うわよね？

全長10メートルはありそうな、巨大なゴーレムだったんだから。

しかも、さっき見た戦士に似ている。

身に付けている物は全然違うけど。

「ミ・・・ミス・ヴァリエール！

下がちなさい！」

コルベール先生が私の前に躍り出た。
先生には悪いけど、私は安心している。
この戦士は目に光が無い。

ようやく分かった。

小人だと思ってたのは人間で、このゴーレムが大きすぎるんだ。
って事は、このゴーレムは人間が動かす者なの？
あの女性、杖もマントもしてなかったわよね？
・・・うん、全身服を着てただけだったはず。

「先生、お願いがあるのですが・・・」

「ミス・ヴァリエール！？」

早く下がりなさい！

後から何でも聞くから早く！」

「アレの背中にフライで運んで欲しいのです」

コルベール先生は「はあ？」という顔でこっちに振り向く。
何も知らないんだから当然か。
でも、少し落ち込むから止めて欲しい。

第2話 ACを召喚しました（後書き）

ルイズの見た白昼夢はLRニューゲームのムービーそのままです。
最後は推測ですが、レイヴン相手でも、死なずに済んだ感謝はある
でしょうからね。

※ 1／15 タイトル変更

第3話 パイロット登録を行います（前書き）

本当は第2話の後半です。

第1話の倍の長さになったので半分に分ける事にしました。

第3話 パイロット登録を行います

・・・

「・・・つまり、コレはゴーレムでもガーゴイルでも無ければ、人間が動かす巨人・・・という事なのですか？」

「はい。背中の辺りにある場所から中に入り、操作するのです」

「・・・す」

「・・・す？」

「素晴らしいですぞー！！！」

ああ、やっぱり・・・。

先生って未知の技術を目の当たりにすると、人が変わるのよねえ。

「ミス・ヴァリエール！

早速、動かしてみましよう！

さあ、捕まって！」

捕まるっていうか捕まったんだけど。

・・・教えないほうが良かったかな。

そういえば、周囲で倒れてる皆は大丈夫かしら？
あ、呻いてるメガネがいる。名前は確か・・・

「あ、そうだ。ミスタ・レイナール。
体は大丈夫かしら？」

「ミス・ヴァリエール・・・？
これはゴーレム？」

「うむ、無事ですな！？
無事なら宜しい！
さあ、行きますぞ！」

混乱しているミスタ・レイナールを置いて、先生は一人で飛んで行く。
あれ？・・・私、忘れられてる？

「えっと、私達は、これからアレを動かすつもりだから、
皆の介抱をお願いして良いかしら？」

「あ、え？わ、分かった。

ミス・タバサも目を覚ましているし、皆もすぐに起きるだろう」

ほんとだ。ミス・オルレアンがキュルケを介抱してる。
取り敢えず、ミスタ・レイナールに後のことを丸投げし、先生を追う。

先生も忘れ物に気付いたみたいで引き返してきてた。まったく・・・。

「ミス・ヴァリエール。

どうやれば開くのか分かりません」

先生の教え子、辞めようかな？

「ここらへんから出入り出来ると思うんだけど・・・」

「よく見ると繋ぎ目があります。

恐らく、ここが開くのかな。」

「ここにも繋ぎ目みたいなのがあります。

これは文字かしら・・・あ」

隅に隠れてた小さな扉が開いたけど・・・何かしらコレ？
取っ手の付いた・・・あ、コレ回るわね。

書いてある文字は読めないけど、描かれてる小さな絵には、
グルグルまわせ！って指示されてるのが理解できる。

「これは・・・。」

タルブ市で見た『クラック』に似てますね。
これを回すと隠し扉が開くようですね。
僅かに盛り上がりましたよ」

「右回りですね？」

うーん、取っ手が重くなってきた。

・・・あ、何かにぶつかって、これ以上動かない？」

「ミス・ヴァリエール！」

狭くて薄暗いですが、中に入れそうですぞー！」

そんな環境は怖いけど、我慢我慢。

先生に『ライト』で明るくしてもらって探索開始！

・・・としたは良いが、内部は訳が分からない。

椅子の目の前に、妙な木目の横長の薄い金属板。
目の前にはガラスで出来た黒い壁。

「・・・直感で分かりそうな物が何も無いわね」

「そういえば、これは召喚されたものでしたね。

コンタクト・サーヴァントを試してみてもどうでしょう？」

「あ、そういえば・・・でも大丈夫かしら？」

「大丈夫。サモン・サーヴァントが成功したのです。

コンタクト・サーヴァントも同じように成功しますよ」

「ハイ！」

・・・我が名は ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴン。 この者に祝福を与え、 我の使い魔となせ」

・・・どこに口付けすればいいんだろう？

椅子に座ったまんまだから、変な板しか顔が届きそうにないわね。仕方ないからコレにしましょう。

木目の隙間を無視するように刻まれていくルーン。

そして・・・急に光を増す内部！？

い、板が！ガラスも光ってる！

ガラスに文字がすごい勢いで下から上に流れていく。

元々、この字は読めないからどうしようもないんだけど。

「う、動いてますな。ミス・ヴァリエール。

ここに火というか、何かの力が流れているようですぞ」

「え、ええ。

・・・あれ？今、読める文字が通りませんでしたか？」

「読める文字がどんどん増えてってます。

もしかしたらこれは、ミス・ヴァリエールが読めるように、文字を変えている作業なのかもしれませんね」

先生の予想通り、流れる文字は全て知っている文字に変換された。そして、大きな赤文字が誇張するように表示される。えーっと・・・

未知のウイルスを感知。

排除を行いました。失敗。

ウイルスは現在も存在し、OSに同化。

言語処理の追加と、文字表記を改竄しました。

ういるす？OSって？

それよりも、酷く物騒な単語だらけだけど大丈夫なの！？

『クレスト社製、アーマードコア用コアパーツ、

「CR-C69U」をお買い上げ頂き、誠にありがとうございます
す』

「なななあ！？」

「な、何！？

誰が、何処から喋ってるの！？」

いきなり部屋全体に響く平坦な女性の声に、私達は驚いた。

先生は杖をあちこちに向けながら周囲を警戒している。

『初期登録を実行します。
キーボードでパイロットの名前を入力して下さい。
必須です。変更は効きませんので正しく入力して下さい』

あ、ガラスに映る文字と同じ事言ってるみたい。
えっと、名前？どうやって入力するの？きーぼーどって？
この板に知ってる文字が写ってるけど・・・。
ええっと・・・ルはどこ・・・ル、ル・・・あった。

『ル

』

次はイね・・・あった、あった。
ズ・・・ズってどこよ？
見たらないわよ？

『手を離せない状況でしょうか？
音声認識に変更します。

・・・パイロットの名前を口頭でお願いします』

「ちょっとは待ちなさいよ！」

『・・・ちょっとは待ちなさいよ様ですね？
よろしければ「はい」、それ以外では「いいえ」で返事をして下
さい』

「・・・いいえ！」

コイツ、何の嫌がらせよ。

どこの世界にそんな名前があるって言うのよ!?

ああ、また名前を聞いてきた。

今度はちゃんと言わないと。

『ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様
ですね？

よろしければ「はい」、それ以外では「いいえ」で返　「　は
！　い！　」』

『パイロットネーム登録しました。

今後、あなたの許可無しでは他人は操縦出来ません。

偽装を防ぐ為、インカメラによる外見認識、指紋、発声を登録し
ました』

「や、やっと終わった・・・」

「ですな・・・。

しかし、ミス・ヴァリエールしか動かせないとは・・・、

やはり使い魔故に、という事でしょうか」

『次に、あなたが操る機体に名前を付けてください。
変更可、必須ではありません』

まだあるの!？キタイって何?もういいわよ!
変更出来るならあと回しで!

『パーソナルデータ、入力完了。』

今後、あなたはACのパイロットになります。

初めてのAC操作で不慣れな点もあるでしょうが、努力しましょう。』

「終わった。ようやく本当に終わったわ・・・」

「お疲れ様です、ミス・ヴァリエール。」

ここまで融通が効かない相手も稀ですな・・・」

ようやく全部終わったわ。

誕生日とか出身国とか活動本拠地？とか・・・必須事項が多すぎる。しかも、これからコイツを動かすのかあ。

どうやって動かせばいいんだろ？

・・・まさか、この『きーぼーど』で動かすんじゃないわよね？

「ね、ねえ、アンタを動かすのって『きーぼーど』を使うの？」

『はい。通常モードから戦闘モードまで、キーボードの操作が必要となります』

「・・・」

「み、ミス！気を確かに！」

確かに難しいでしょうが、このまま広場には置いておけません」

「・・・あー、そうですねー。」

ねえ、ここから移動させたいんだけど？
出来れば勝手に歩いてくれないかしら。

・・・無理よねーあははは『可能です』はは・・・はい？」

駄目元でも言ってみるもんだ！

何でも、使い方も分からない金持ちの道楽者の為に、軽い歩行程度なら出来るらしい。

金持ちの道楽と一括りにされるのは嫌だけど、今回ばかりは有り難い。

「でも、どこに置こうかしら？

使い魔小屋には間違いなく入らないし、
なにより、成体のドラゴンよりも大きいわよね・・・」

「そうですね。

個人で扱うのは、ミス・タバサの風竜辺りが限界でしょうか。
しかし、落ち着きのない成竜ですから、彼女はこれから大変でしょうな」

「確かにミス・タバサは苦労しそうですね。

偽名で入学するガリア王族だから、周囲も手出ししにくいし・・・。

そーいやキュルケは起きたかしら？」

「そうですね、少し様子を見てきましょう」

先生もようやく冷静になったみたい。

この操縦室をイジるのに飽きたのかもしれないけど。
コイツから出て、フライで下を見下ろしてる。

「いつまでもコイツ呼ばわりじゃ駄目よね。

でも、こんな変わり者じゃ名前のイメージがなかなか・・・。」

『ACネームを変更しますか？』

「いや、無しで・・・ん？

ねえ、その『えーしー』って何よ？」

『ACとはアーマード・コアの略称です。

本機体のように、複数のパーツを変更しながら、
様々な活動を可能とする汎用人型機体を指します』

種族名みたいなもんかしら？

あーまーど・・・アーマード・コアか。

うん、初めての存在だろうからコレがいいだろう。

「アーマード・コア・・・これに何か意味でもあるの？」

『名前の由来には諸説ありますが、

胸部のコックピットに人という魂が入ることで、命を得る巨人。
・・・というのが一般的です』

「ミス・ヴァリエール。

生徒達は皆、目を覚ましたようです。」

あ、先生が戻ってきた。

丁度いいタイミングだ、ここで決定してしまおう！

「そうですか。動かす前に・・・ちょっと聞いている？
アンタに名前を付けてあげるわ」

『ACネームを変更します。
名前を口頭でお願いします』

「名前は アーマード・コア！
アンタがハルケギニアのAC代表よ！」

『ACネームを登録。
・・・アーマード・コアですね？
よろしけれ「は！いい！」・・・決定しました。
本ACの登録データを表示します』

パイロットネーム

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

ACネーム

アーマード・コア

所属 なし

「ほほう、名前は『あーまーど・こあ』ですか。
少し考えたのですが、置き場は私の研究室のそばはどうでしょう？
離れなので、そこなら悪目立ちしないでしょう」

「先生がコレを研究したいだけなんじゃ・・・まあいいけど。
それじゃあ、先導をお願いします。

AC！先生に付いて行って」

『了解。コクピットを閉じるので先導者は脱出して下さい』

先生が慌てて操縦室・・・コクピットだっけ？

から出て行くと、扉が閉まり・・・キーボードとガラスが光るだけの空間に。

音もしないせいで、ちょっと怖いわね。

『ACオートチェック、接続確認します。』

CORE・・・OK GENERATOR・・・OK RADI

ATOR・・・OK LEGS・・・OK HEAD・・・OK

ARMS・・・OK BOOSTER・・・NG

FCS・・・NG

EXTENSION・・・NONE BACK UNIT R・・・

OK BACK UNIT R・・・OK

ARM UNIT R・・・OK ARM UNIT L・・・

OK

・・・ブースターとFCSが存在しません。』

「何かが2つ足りないって事よね？」

・・・そ、それが無いと動けないとか！？

こんな何万リールも有りそうな重さじゃ運べないわよ！」

『ブースターの未接続により、飛行不能。

FCSの未接続により、ターゲットロック不能。

歩行に支障はありませんが、著しい活動制限が加わります。

戦闘に関して、可能な限りの回避を推奨します』

ほっ、と溜め息をつく。

戦えないと言われたが、動けないよりは全然マシだろう。

ACはそんな私を気にせずに次々と体一つ一つを確認してる。

やれ「頭は生物を認知出来る」とか「肩のれーだーは正常」だとか、
「左手のブレイドは胸に収納出来る」って、ブレイド入れて大丈夫なの！？

『・・・オールエンド。

ブースターとFCSの不在以外に異常はありません。

ACチェックは全て終了しました。』

「うん、いい加減に動きましょう。

先生も待ちくたびれてるかも」

『AC、オートモードを起動します』

ACが言うやいなや、ガラスに写っていた文字が急に消え、

何処かの風景を映しだした。

椅子から僅かにA Cの震えが伝わってくる。

・・・ん？もしかして外が見えてるの？

って事は足元に皆がいるんじゃないの？

「A C、足元に人がいるから気をつけて！」

『了解、周囲の生命反応をチェックします』

おお、映像がグリグリと動く。

皆してこっちを見てるわね。

走って逃げてるのが居る。

先生は・・・いた！

こっちが見てる事に気付いたみたい。

フライで飛び去りながらこっちに手を振ってるわ。

「こっちですぞー！」

「よし、先生を追いかけて。」

『目標を設定、追尾します』

「うわわわ！」

ゆ、ゆっくりね！ゆっくりとよ！」

こんなデカブツに踏まれたらドラゴンだって即死だ！

広場の騒ぎが遠ざかっていく。

あ、学院長が院長室からこっち見てる。
手を振ったり出来ないかしら？

『可能です。』

念のため、左手ブレードの格納を提案します』

「じゃあ、それで」

ガゴン！って、結構大きな音がした。

このガラスの向こう側に入れたのね。

で、学院長に手を振るように指示を出す。

あー・・・呆然としてるわ。

水パイプ、落ちましたよー？

第3話 パイロット登録を行います（後書き）

コクピット周辺の情報はまったく無いので、

L Rをニューゲームで始めた時のジナイーダのムービーから推測。

ジナの愛機ファシネイターのコア「C R－C 0 6 U 5」と、

初期機体のコア「C R－C 6 9 U」は、どちらもクレスト社の製品なのでほぼ同じにしました。

A Cって世界観は確立してるのに細かい設定は不鮮明なんですよね。

※1 2・2 5 タバサの名称、一部をオルレアンに変更

1 2／2 9 A Cのブレード装備部を「右↓左」に修正

1／1 5 タイトル変更

第4話 初ミッション、受託しました(前書き)

※タバサの家名ってオルレアンでしたね・・・。
何故かオルレシアンと勘違いしてました。

第4話 初ミッション、受託しました

親愛なるお父様、お母様。

ルイズはとうとう爆発以外の魔法に成功しました。

・・・と言っても、サーヴァントだけです。

呼び出した使い魔は、とても風変わりな巨人ですが、

私は最高の使い魔だと自負しております。

ミスタ・コルベールも使い魔について絶賛です。

それはもう、鬱陶しいぐらいに・・・。

カトレア姉さまの具合は如何でしょうか？

ササキ商会在、来月に新型車椅子を発表するようです。

学院出張所のササキ・シエスタから聞いた極秘情報なのですが、
タイプ・フォンテーヌという名前だそうです。

横車って言うのが付いていて、熊でも載せれるとか・・・。

コレどう見ても、絶対にちい姉様が一枚噛んでますよね！？

去年の横転事故で懲りてないみたいです！

父様は期待できないので、母様、止めてください！

「ルイズ、今日はもう動かさないの？」

「うっさいわね。」

「今、手紙書いてるのが分からないの？」

既に、お分かりかと思われませんが、

この手紙を持ってきたゴーレムが私の使い魔です。

種族名をそのまま取って「アーマード・コア」と名付けました。

体の大きさもあって、走るだけで時速100リーグは余裕で出せるようです。

片道2・・・いえ、3時間以内に学院からヴァリエール家に行けますね。

これを書いている今は夕暮れなので、夜にはそちらに着くハズです。明日、エオールの曜日になる前には魔法学院に戻ってくるでしょう。これからは、虚無の曜日をヴァリエール家で過ごす事も可能です。来週辺りに試してみようと思います

かしこ　　まる

「あら、今からヴァリエール領に向かわせる気？」

確かに早いけど・・・危ないんじゃないかしら？」

「高速で走るゴーレムを襲うなんて・・・余程の物好き」

「ミス・タバサの言う通りですな。

想像するだけで・・・その、何とも言えない爽快感ですぞ」

うん、私もそう思う。

10マイルのゴーレムが異常な速度で軽快に走るの、何か格好いい。

・・・しかし、

「・・・？」

「どうしたのよ？」

「ミス・ヴァリエール？どうされました？」

コルベール先生がココに居るのは分かる。
ACの小屋・・・いや、大部屋だろうか？
それを作ったのは先生だし、当然だろう。
でも、何でキュルケとミス・オルレアンがいるんだろうか？

「・・・タバサ」

あ、つい声に出てたみたい。
メチャクチャ睨まれてる。

実際は無表情なんだけど、是非を言わせない威圧感が醸し出てる。

「私はタバサの付き添いよ。

それに、ヴァリエール家の家紋を作ってあげたからいいじゃない」

そうだった。

敵襲と間違えられると危険だと気付いた時に二人が来て、
物珍しそうにACを見る二人に、出て行かないなら作れと言ったの
だ。

・・・まさか、本当に作るとは思わなかったけどね。
キュルケ、ツエルプストー家よね？

ヴァリエール家の不倶戴天の敵が、何で家紋制作を手伝うのよ？

ミス・タバサも、オルレアン公家の娘よね？

何で他所の家の家紋を作ってくれるのよ？

「しかし、本当に作るとは思わなかったわ……。土メイジがじゃないのに、ここまで頑張られるとはね」

「そうですね。」

ミス・タバサは土は苦手なのに、良く頑張りましたな」

キュルケは、炎の一点集中で家紋彫りを、ミス・タバサは、不慣れな練金で頑張って塗料を、仕上げと固定化は、先生がしてくれた。

肩の所に御誂え向きな場所があったので、そこに家紋を作ってもらったのだ。

見てくれもかなり良いし、目立つ。

これなら夜でもよく見えるだろう。

ACの手に手紙だけじゃ小さすぎるから、鉄の大箱に入れてみた。うん、我ながら完璧だ。

「でも、大丈夫かしら？」

道は本当に分かってるの？

お使いなんて初めてって聞いたけど？」

『念の為の連絡手段の確保を提案します。

クレスト社製コアのサバイバルキットには、

通信手段兼子機であるモバイルが付属しています。

これを目の付く場所に置いておけば危険度は下がるでしょう』

「……行ってくる」

誰も頼んでないのにミス・タバサがコックピットに飛んでいく。
いくら不名誉印押された家でも、小間使いは無いでしょ。

『自殺王』の真相は有名だから、不名誉でもなんでもないんだけど・
・・。

それにしても、コックピットに行く手段が必要ね。

毎回、先生にフライで運んでもらう訳にもいかないし。

この部屋の中に足場を作って貰おうかしら。

「ただいま・・・これが『さばいばるきつ』らしい」

「見た目の割に重そうな鞆ね・・・。
色々と入ってるわ」

「この字は・・・リードランゲージ・・・ふむ。」

この固い樹脂で出来た物が『もばいる』ですな。

『すとーむ社の、こがたつうしんき?』という内容の文字ですぞ。
リードランゲージ、リードランゲージ、リードランゲージ。

これが動かす為の押し込む仕掛けですな。

もう一度押すと機能が途切れるようです」

「ここですね・・・よっ。」

あ、これってACから見た視界かしら？」

この、モバイルって言うのはACの視界が見えるみたい。

使い魔の視野共有が出来なくて困ってたから、丁度いいわ。

じゃあ、そろそろ行ってもらおうかしら？

『先の会話からこの地域の危険度の高さを推測しました。
本AC単独での作戦行動中、パイロットは操縦訓練を行うことで、
早急な技術向上を提案します。』

「え・・・アンタが居ない間に、どうやって訓練しろってのよ?」

「そうね、貴女の使い魔は何処か抜けてるみたい」

「いやいや、何か方法があるのかも知れませんか?」

「楽しみ」

私とキュルケは呆れ顔、

先生とミス・タバサは期待に目を輝かせている。

まあ、ACは何でもありな奴だから、本当に何かあるのかも?

『本コアはAC初心者を想定した機能を設けております。

キーボード製コンピュータは脱着可能で、

格納モニターが内蔵されています、

一般的なパーソナルコンピュータのスペックを持っております』

「えっと・・・キーボードで何か出来る訳ね?」

『はい。

ACに憧れる者が多く、それに目をつけたレイヴンズアーク社が
制作。

レイヴン養成プログラムという名称で制作されたゲームがありま

す。

名称はナインブレイカー。
攻撃、防御、移動、技術、特殊、総合の6つのカテゴリにわけ、
150ものプログラムから構成されるトレーニングモード。
自動生成されるACを相手にランキング1位を目指すアリーナモード・・・』

「・・・ただのゲームじゃなくて、
本腰据えてやらなきゃいけない予感が・・・」

『・・・でしたが、あまりの要求技量の高さに不評が相次ぎ、
熟練者ですら困難な事が証明され回収騒動に。
基本操作に重点を置いたナインブレイカー・オミットが制作されました。

本端末には、そのオミット版がインストールされています』

良かった・・・。

『トレーニングモード』の難しさにヤケを起こして、
『アリーナモード』だけで『ナインブレイカー』になるという、
よく分からない明確な予感は回避されたみたい。

「長々としてて分かりにくいけど、
それを使えばルイズじゃなくても動かせるようになるのかしら？」

「フフン、残念だったわね。
いくら練習しても、起動出来るのは私だけよ」

「私も試してみましたが、

『ぱいろつとでない人物と判断』と拒否されましたぞ」

そうなのだ、私だけのACなのだ。

私を偽って動かそうとしても『認識プロテクト』で動かせないのだ。実際の所は、許可を出せば良いんだけど教えてあげない。

あ、ミス・タバサがうなだれてる。

・・・そこまで落ち込まれると、流石に、ね？

「ま、まあ、私が許可を出せば動かせるのよ。

でも、優先権は当然私ね。

御主人様が動かせないんじゃないや面目立たないし」

「・・・ほっ」

「私のような中年には難しそうですね。

この年で訓練は、飲み込みが悪いでしょうからなあ」

「私もパス。

わざわざ勉強しなきゃいけないのは面倒よ」

キュルケ、そんな事言ってるから筆記試験ボロボロなのよ。

2年進級も実技だけで乗り切ったらしいじゃないの。

私は逆でほぼ筆記だけで乗り切ったんだけどさ・・・。

系統別実技試験なんて、私の系統が不明なせいで、

宝庫の壁を壊せて内容だったっけ。

『始祖流の眼帯』が吹っ飛んで搜索騒ぎになったわね。

・・・うん、私は悪くない。試験内容が悪い。

私の爆発にタカを括った学院院长が悪い。

「つと、そろそろ行かないと、帰るのが更に遅くなるわね。

私は訓練を頑張るから、ACもしっかりやり遂げなさいよ」

『了解。』

不測の事態が発生した場合、通信を行います。

モバイルを手元に保管しておいて下さい』

誰も乗ってなくても、起動すれば目が光るのね。

あっちに着くのは夜中だから、かなり目立つでしょうね。

闇夜に光る赤い一つ目の巨人か・・・想像するだけで怖い！
人目に付かないようにさせましょ。

『AC、オートモードに移行します。』

依頼者 .. ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァ
リエール

作戦領域.. トリステイン東部

作戦内容.. 告発資料輸送

達成条件.. ヴァリエール家に輸送後、帰還

敵対戦力.. 不明

報酬.. なし (情報料の期待有り)

ミッション開始』

「村や集落は迂回して、出来るだけ人目を避けなさい！」

「気をつけてくだされー」

「『もばいる』の絵が変わったわね。

これは・・・地図かしら？」

「えーしーの周囲の情報。

・・・刻々と変化している」

あ、胸に箱を格納した。

持ちにくそうだったし、仕方ないか。

報酬なしとか言ってたけど、やっぱりご褒美が必要かしらね？

でも・・・ACって何をすれば喜ぶのかしら？

あと、告発資料って何よ？

ちい姉様の車椅子の事？

ガシヨン、ガシヨンって歩行音が遠ざかっていく・・・。

「さて・・・どうやってナインブレイカーをすれば良いのかしら？」

「そうですねあ。

まず『格納もにたー』を出さなければなりません」

「あ、コレを押すと『えーしー』の視野に変わるのね」

「左右を見て、道を調べている。

・・・壁に近づいて、飛び越えた！？」

「あー、ACってジャンプ出来るのよ。

ブースターってのがあれば、空を飛ぶ事も出来るらしいわ。
あ、もしかしてここを引っ張れば・・・これがモニターね」

「おお、ガラスが光って、文字が写りましたな。

ここのコレ、『ないんぶれいかー』と書かれていますぞ」

読める文字だ、良かったあ。

読めなかったら練習云々じゃないからね。

えーっと、まずは『基礎1 視線変更』っと。

「さて、私はそろそろ戻るわね。

タバサはどうするの？」

「訓練を見学する」

「そう、それじゃまた明日」

「私は『さばいばるきつと』を調べておきましょう。

文字のある物なら、リードランゲージである程度分かりますからね」

キュルケはモバイルの映像に飽きたらしい。

ここらへんは魔法学院以外、何も無いから仕方ないか。

ミス・タバサは私の後ろからモニターを見ている。

・・・ACの言葉に慣れたのか、私だけ発音がおかしいなあ。

『P i P i P i P i . . . 』

「ん？これが連絡の合図かしら？」

「ここ．．．。」

ここを押すと連絡が通じる」

「ありがと。

．．．聞こえる？」

早速、どうしたのよ？」

『西部から学院の衛兵が追跡しています。
振り切りましょうか？』

「最近、ゴーレムを使った盗賊が有名。
誤解されたのかも知れない」

「．．．まあ、壁飛び越えりや当然か。
じゃあ、衛兵に話をつけなさい。」

『了解。

衛兵は本A Cの理解力が無いと推測しました。
音声仲介による誤解の解消を要請します』

ゴーレムを使う盗賊か。
ん？

それって、有名なのよね？

じゃあ、ゴーレムは相当警戒されてるんじゃない？

「ねえ、ミス・タバサ。

その盗賊ってどれくらい有名なの？」

「従者に武器を持たせる貴族が流行っている。

ササキ商会が表立って介入する程の経済効果」

ササキ商会が絡むって事は、相当な影響力ね。

人目を避けるのは、むしろ誤解を生みそうな気がする。

『南部より、高速走行する生命反応を感知。

異常な風圧を放出・・・回避成功。

敵対者はマンティコア隊という組織の所属を表明しています。

周囲、同部隊に包囲されつつあります。指示を』

「マンティコア隊・・・確か、今日から3日間、北部に遠征訓練の予定」

「声繋げて！早く！・・・もう繋がってる！？

私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！

ヴァリエール公爵家の三女です！

このゴーレムは私の使い魔！攻撃を止めてください！！」

『ぜ、前隊長の御子女様だ！

攻撃中止ィ！！』

あー、うん。

予想以上の大事だ。

しかも隊長の方は護衛するとか言い出す始末。

有り難いけど・・・遠征訓練はどうするの？

あと、流石ミス・タバサ。そういう事情に詳しいわね。

・・・隊長が色々と話してくる。

もう、訓練やってる場合じゃないっぽいわ。

「ミス・タバサ・・・やる？」

「いいの？」

「良いのよ。」

この調子じゃ訓練なんて出来ないし、やる気なくした・・・」

『訓練？訓練ですか？！』

流石、『爆殺』・・・っと、カリーン様の子女！

その歳で訓練とは・・・トリステインの未来は明るい！』

「おお！

これは食べるだけで丸1日の栄養が取れる非常食か！

素晴らしい、素晴らしいですぞー！！

こっちは・・・コックピットの扉が開かない時の切断具？

ふむ・・・高速で回転する刃。

危ない・・・危ないですぞー！！！！」

・
・
・
もうやだ、
この空間。

第4話 初ミッション、受託しました（後書き）

※通信機についてはA C 1のイミネント・ストームというクローム社属テロ組織から取りました。

あと、魔法学院からヴァリエール家への距離は2 c h有志による詳細地図、

（「ヤマグチノボル Part 237 ゼロの使い魔 烈風の騎士姫」スレの<<174様提供）

を、使っています。距離等は今後もコレを利用するつもりです。

『ゼロ魔の本文記述を基にした地図』でG o o g l e検索すればすぐに出てきます。

普通のお使いのハズが大事に・・・どうしてこうなった

※ 1 / 15 タイトル変更

第5話EX 告発資料輸送、時間がありません（前書き）

これはオリキャラが登場しない、I Fの場合です。

正式な5話目は次の無印の方なので、

オリキャラが嫌な人以外は飛ばしといて下さい。

オリキャラOKやマンティコア隊の隊長が好きな方はこっちもどうぞ。

・・・ゼツサール隊長のファンっているのか？

第5話EX 告発資料輸送、時間がありません

FROM ARMORED CORE

マスター・ルイズからの依頼という、マニュアルには無い案件が発生。

射撃不能、起動不備という悪条件での任務に加え、オートモードでの無人行動。

本ACのマスターは非常な思考回路をしているらしい。

確かに、この土地に機械文明は見当たらない。

だが、本コアのロールアップ時に急遽追化記録された、特攻兵器「UNKNOWN」。

これは機械文明に対して、文明が消滅するまで自爆特攻を繰り返すらしい。

つまり本ACは、修復不能になるまで攻撃対象という事だ。

「使い魔君！待ってくれ！

我等でも追いつけん！」

『失礼しました。

・・・歩行速度を落としましょうか？』

「・・・使い魔君の言いたい事は分かる。

我々が足を引っ張っているのだろう。

しかし、今は土くれのフーケでゴーレムは警戒されるのだ。

君の、『あーまーど・こあ』という種族はゴーレムに似ている。

先の我々のように不意打ちを受ける可能性が高い。
ヴァリエール公爵家に往くのなら尚更危険だ！」

『本A Cの現アセンブルは全長10メートル。
土くれのフーケのゴーレムより遥かに小型です』

「めーとる・・・メールの事か。

確かにフーケのゴーレムは30メートル超だが、それは土で作った
場合だ。

もし、鉄で作られたら10メートル辺りで落ち着くと試算されてい
る。

君はむしろ、似すぎているんだ」

『本A Cの外装素材に純鉄は存在しません。

10メートルの純鉄との金属性能差は圧倒的です』

本A Cはただの鉄で攻撃されてもまともなダメージは受けないと自
負している。

・・・自負？

本コンピュータに生物的な感情は存在しない。

どうやらO Sに寄生したウイルスが影響しているのだろう。

プログラムでのアンチウイルス自動生成は成功したが、
施行すればO Sごと削除するまでに食い込まれている。

今は休止状態にあるようだし、

思考プロセスが圧倒的に昇華したのも事実だが、

O S権限を取られている事に違いはない。

しかも、このウイルスは各パーツを侵食している。

排除方法は本A Cの破棄と同意である。

「・・・まあ生きているなら鉄ではないだろう。いや、鉄以上の硬度を持っている鎧も分かる。

土メイジが触れれば目をひん剥く程の、そんな素材だろう。もしかしたら『天空の守護天使』の鎧のような素材だろうか」

『「天空の守護天使」とは何でしょうか？』

「ここから北西に行った所に、タルブ市という都がある。

10年程前の話だが・・・そうだ、ササキ商会は知っているか？」

『マスター・ルイズ、リサーチャー・コルベールとの会話で聞きました。

その情報を統合した結果、ハルケギニア大陸を管理する「企業」と判断。

創業58年、タルブ市に本社を構え、商会を名乗る「企業」です』

「キギョウ・・・？」

君の居た所では大商家をそう呼ぶのか？

まあ、とにかく・・・だ。

南西に700リーグ程離れた場所に、火竜山脈と呼ばれる火山脈がある。

10年前、そこが大噴火を起こし、生息していた幻獣が外に逃げたのだ。

・・・それは酷い有様だったらしい。

ガリア・・・ああ、火竜山脈のある国だ。

ガリア内は勿論、トリステインにまで逃げ出してな。

一体、どれほどの犠牲者が出た事やら・・・。」

本ACと似た外装を持つ存在があるらしい。

マンティコア隊のキャプテン・ゼツサールの話を要約する……。
どうやら、火竜と呼ばれる生物兵器が脱走し、都市を襲撃していたらしい。

そこでササキ商会のロゴの元である機動兵器が出撃。

時速1000kmを突破する速度で飛行し、高機動を維持。

そして空対地攻撃を実行、僅か3日で生物兵器をほぼ殲滅に迫いやる。

パイロットはササキ・タケオ……。ササキ商会の創業者である。

『特攻兵器「UNKNOWN」の驚異に晒されなかったのは、
それを振り切る程の速度だったのですね』

「ササキ・タケオ氏は泣いていた。

疲れた『天空の守護天使』が永い眠りについたそうだ。

彼の遺言は『天空の守護天使』の再起だと言う。

ササキ一族は、それを一族の悲願と捉えているらしい。

素晴らしい事だと思わないかね、君!？」

『疲れたという言葉質から推測すると、完全な大破ではなく、

駆動系に金属疲労が発生したものと思われます。

修理設備に恵まれていない可能性が高いかと』

「彼は生涯、世界を救った事を気にせず再起を願っていた。

ああ！誰も彼も、英雄とは功績を気にしない者なのだろうか!？」

『力ある者はかくして、そうあるものです。

社会から脱却する翼を持つ者は、社会に振り回されたりしません』

本ACのデータに、時速1000kmを超える超高速飛行の機体は無い。

それはもしかしたら、特攻兵器「UNKNOWN」への対抗策だったのかもしれない。

大多数とはいえ、生物兵器相手に潰してしまったのだ。

その損失と、レイヴンの失意は計り知れないものでしょう。

それが「社会を管理する企業」として正しいのか、本ACには分かりません。

しかし、キャプテン・ゼツサールは興奮状態になっているのでは？相手の言葉を聞いていない節が見受けられる。

こういう時は、相手を冷静にさせる材料が必要だ。

『キャプテン・ゼツサール、問題が発生しています』

「私もあのような英雄になりた・・・ん、問題だと!？」

周囲には何も起きていないようだが？」

『今作戦に置ける、非常な事態です』

「な、なんだ!？」

何が起きたんだ？」

『作戦許容時間の本日内に間に合いません。

日付変更まで残り3時間17分ですが、

この移動速度では帰還までに10時間程の過分が発生します』

「なっ、今日中に往復する予定だったのか!？」

それは成風竜の速度ですら困難だぞ!それにバテる!

どんな幻獣でも、そんな移動は無理だ!」

懸案事項の提示により、キャプテン・ゼッサールを正気に戻す事に成功。

本A Cのアセンブルは、歩行時に置いて供給エネルギーがプラスになる為、

故障しない限り、半永久的な歩行が可能です。

『本A Cの護衛である貴方方に歩調を合わせると、作戦失敗という矛盾が発生します。

早急な改善をすべきです』

「うっ・・・確かにそうだ。

悔しいが、我々が居れば・・・ううむ・・・」

黙り込みました・・・。

このままでは時間が過ぎるばかり。

マスターに指示を仰いでみましょう・・・。

『何、今度はどうしたのよ?』

『現在、作戦限界時間と護衛の矛盾について相談中です。

このまま護衛の歩調に合わせていけば、

帰還は明日の13時を超えるものと思われます』

『あー、明日は使い魔同伴で講義に出なきゃいけないのよね。

・・・まあ、しょうがないか。昼過ぎでもいいわよ。

先生達には事情を伝えておくから・・・え？
タバサ、今のどうやったの？
・・・右にブーストしながら左旋回かあ』

通信切断、活動限界時間の延長が決定。

どうやらマスターも真面目に訓練しているようです。
しかし、ブースターの無い本ACでは・・・、
いえ、プログラムに目標旋回の情報は無かったはず。
これは良い傾向でしょう。

『マスターに指示を仰いだ結果、
活動限界時間の延長が決定されました』

「え？ ああ、うん。
それは有り難い。

何とか面目を保てるだろうか」

『しかし、マスターは明日の講義で叱咤される事が約束されました。
明日の講義は使い魔同伴である必要があるとの事です』

「・・・どうしよう。
このままではミス・ルイズが怒られ、カリィヌ様に・・・。
護衛を放棄すれば、大事になりバレル・・・」

どうやらキャプテン・ゼツサールは、マザー・カリィヌに怯えてるらしい。
彼を危機から救う方法を思考・・・矛盾のない手段発見。

『本A Cは提案します。』

護衛の理由は身分証明の為です。

わざわざ複数で護衛する必要はありません。

本A Cに掴まる等の手段を取れば、時間内に到着出来るでしょう』

「む！？そうか、そうすれば！

・・・しかし、私は隊長なのだから部隊から離れる訳には。
隊員は・・・いかん、皆が皆、疲れている。

これでは掴まっていられず、振り落とされかねん」

『この近くにヴァリエール家への認知度がある人物はいませんか？
該当者がいれば、身分証明の引継ぎを推奨します。

友好関係の者であれば尚可』

「ヴァリエール公爵家に取り次げるような名門は近くには・・・、
いや、それ以前にそんな名門だと我々では取次ぐなど出来ない。
・・・軍家はここらへんに無いしなあ」

『他に良い案件は該当なし。提案出来ません。
では、現状を維持します』

「うゝ・・・し、仕方ない！

私がやろう・・・全員、停止！」

キャプテン・ゼッサールが部隊を停止、隊員達に通達しています。
今の内にマスター・ルイズに許可を取っておきましょう。

『・・・ん、今度はどうしたの？』

『マスター、キャプテン・ゼッサールの搭乗許可を願います。
領地境界線まで輸送後、

キャプテン・ゼッサールから領主に通達し、進行。
この事により、大幅な時間短縮が可能です。』

『コックピットに・・・大丈夫かしら？』

『御心配なく、ただの輸送です。』

キーボードの無い現ACでは内部干渉は不可能です。
入力機器があったとしても、命令を拒否します』

『うんなら良いわ。』

あ、あと失礼の無いよう・・・キャー！！』

『ミ、ミス・ヴァリエール！大丈夫ですかな！？』

『当たっていない、髪を掠めただけ。』

これは・・・熱いライト？』

『すみません、居場所を知らせる杖をいじっていたら・・・』

『先生、サバイバルキットいじるの禁止！！』

『燃えている・・・』

リサーチャー・コルベールが、サバイバルキットの信号照明弾を誤射した模様。

メイジ・タバサの言語からマスター・ルイズは無傷と推測。

『そ、そんな・・・後生です！』

『ホラ、髪が焦げたんですよ！
駄目です、絶対禁止！！』

『これは、何？』

マスター・ルイズは、恐慌により攻撃性が著しく向上。
メイジ・タバサ、それは信号照明弾です。

日中でも目視出来る強い光を、上空に射出し30秒滞在、
周囲に自身の所在を知らせる為の道具です。

『お願いです、そこをなんとか！』

『うー！・・・』

『・・・殺傷能力は？』

イミネント社の信号発信弾の初速は50 km/h。
上昇時の平均速度は40 km/hとなっています。
至近距離での暴発による人身事故が1件。
火傷による軽症と横転の打撲で全治一週間の怪我。
不良品の発生確率は0.0001%と優秀です。
煙にラベンダーの香りを再現しています。

『お願いします！』

『次はありませんからね！』

『いい香りがする』

香料内に精神安定の薬品を混ぜています。

上手く機能したようです。

「さて、これで私一人になった訳だが・・・。
どこに捕まればいいかな？
あまり揺れないように走ってくれと助かる」

『マスター・ルイズのより、本ＡＣへの搭乗許可が下りました。
人体の背にあたる部分に搭乗口があります』

「背中・・・おお、開いた！
この鎧には輸送出来る空間もあるのか。
いや、君にとっては小物入れかな？」

本コアには確かに格納庫がありますが、そこはコックピットです。
インカメラからの映像を表示。
キャプテン・ゼッサール、あまり指紋を付けないでください。
止めてください、そこはカメラレンズです。
・・・インカメラの映像、不鮮明。
帰還後、マスター・ルイズに清掃を促す予定を追加しました。

第5話EX 告発資料輸送、時間がありません（後書き）

※4話のすぐ後に書き上げたのですが、諸事情により投稿を控えていました。

本来は他作品のキャラクターを作者様からお借りして登場させるつもりが、

知人に「オリキャラ嫌いな人はどうすんの？」と言われ、二つ作る事に。

※ 1／15 タイトル変更

1／18 マンティコア隊をグリフォン隊と誤表記、修正

第5話 アーチャー・ラリカの搭乗を確認しました（前書き）

※無関係のI Fではなく、正式な第5話です。

半ばの「ルイズが作戦時間の延長を許可」した所から変わります。
そこまでは同じなので、EXを見た方は途中までとばして下さい。

第5話 アーチャー・ラリカの搭乗を確認しました

FROM ARMORED CORE

マスター・ルイズからの依頼という、マニュアルには無い案件が発生。

射撃不能、起動不備という悪条件での任務に加え、オートモードでの無人行動。

本ACのマスターは非常な思考回路をしているらしい。

確かに、この土地に機械文明は見当たらない。

だが、本コアのロールアップ時に急遽追化記録された、特攻兵器「UNKNOWN」。

これは機械文明に対して、文明が消滅するまで自爆特攻を繰り返すらしい。

つまり本ACは、修復不能になるまで攻撃対象という事だ。

「使い魔君！待ってくれ！

我等でも追いつけん！」

『失礼しました。

・・・歩行速度を落としましょうか？』

「・・・使い魔君の言いたい事は分かる。

我々が足を引っ張っているのだろう。

しかし、今は土くれのフーケでゴーレムは警戒されるのだ。

君の、『あーまーど・こあ』という種族はゴーレムに似ている。

先の我々のように不意打ちを受ける可能性が高い。
ヴァリエール公爵家に往くのなら尚更危険だ！」

『本A Cの現アセンブルは全長10メートル。
土くれのフーケのゴーレムより遥かに小型です』

「めーとる・・・メールの事か。」

確かにフーケのゴーレムは30メートル超だが、それは土で作った場合だ。

もし、鉄で作られたら10メートル辺りで落ち着くと試算されている。

君はむしろ、似すぎているんだ」

『本A Cの外装素材に純鉄は存在しません。』

10メートルの純鉄との金属性能差は圧倒的です』

本A Cはただの鉄で攻撃されてもまともなダメージは受けないと自負している。

・・・自負？

本コンピュータに生物的な感情は存在しない。

どうやらO Sに寄生したウイルスが影響しているのだろう。

プログラムでのアンチウイルス自動生成は成功したが、
施行すればO Sごと削除するまでに食い込まれている。

今は休止状態にあるようだし、

思考プロセスが圧倒的に昇華したのも事実だが、

O S権限を取られている事に違いはない。

しかも、このウイルスは各パーツを侵食している。

排除方法は本A Cの破棄と同意である。

「・・・まあ生きているなら鉄ではないだろう。いや、鉄以上の硬度を持っている鎧も分かる。

土メイジが触れれば目をひん剥く程の、そんな素材だろう。もしかしたら『天空の守護天使』の鎧のような素材だろうか」

『「天空の守護天使」とは何でしょうか？』

「ここから北西に行った所に、タルブ市という都がある。

10年程前の話だが・・・そうだ、ササキ商会は知っているか？」

『マスター・ルイズ、リサーチャー・コルベールとの会話で聞きました。

その情報を統合した結果、ハルケギニア大陸を管理する「企業」と判断。

創業58年、タルブ市に本社を構え、商会を名乗る「企業」です』

「キギョウ・・・？」

君の居た所では大商家をそう呼ぶのか？

まあ、とにかく・・・だ。

南西に700リーグ程離れた場所に、火竜山脈と呼ばれる火山脈がある。

10年前、そこが大噴火を起こし、生息していた幻獣が外に逃げたのだ。

・・・それは酷い有様だったらしい。

ガリア・・・ああ、火竜山脈のある国だ。

ガリア内は勿論、トリステインにまで逃げ出してな。

一体、どれほどの犠牲者が出た事やら・・・。」

本ACと似た外装を持つ存在があるらしい。

マンティコア隊のキャプテン・ゼツサールの話を要約する……。
どうやら、火竜と呼ばれる生物兵器が脱走し、都市を襲撃していたらしい。

そこでササキ商会のロゴの元である機動兵器が出撃。

時速1000kmを突破する速度で飛行し、高機動を維持。

そして空対地攻撃を実行、僅か3日で生物兵器をほぼ殲滅に迫いやる。

パイロットはササキ・タケオ・・・ササキ商会の創業者である。

『特攻兵器「UNKNOWN」の驚異に晒されなかったのは、
それを振り切る程の速度だったのですね』

「ササキ・タケオ氏は泣いていた。

疲れた『天空の守護天使』が永い眠りについたそうだ。

彼の遺言は『天空の守護天使』の再起だと言う。

ササキ一族は、それを一族の悲願と捉えているらしい。

素晴らしい事だと思わないかね、君!？」

『疲れたという言葉質から推測すると、完全な大破ではなく、

駆動系に金属疲労が発生したものと思われます。

修理設備に恵まれていない可能性が高いかと』

「彼は生涯、世界を救った事を気にせず再起を願っていた。

ああ！誰も彼も、英雄とは功績を気にしない者なのだろうか!？」

『力ある者はかくして、そうあるものです。

社会から脱却する翼を持つ者は、社会に振り回されたりしません』

本ACのデータに、時速1000kmを超える超高速飛行の機体は無い。

それはもしかしたら、特攻兵器〔UNKNOWN〕への対抗策だったのかもしれない。

大多数とはいえ、生物兵器相手に潰してしまったのだ。

その損失と、レイヴンの失意は計り知れないものでしょう。

それが「社会を管理する企業」として正しいのか、本ACには分かりません。

しかし、キャプテン・ゼツサールは興奮状態になっているのでは？相手の言葉を聞いていない節が見受けられる。

こういう時は、相手を冷静にさせる材料が必要だ。

『キャプテン・ゼツサール、問題が発生しています』

「私もあのような英雄になりた・・・ん、問題だと！？周囲には何も起きていないようだが？」

『今作戦に置ける、非常な事態です』

「な、なんだ！？

何が起きたんだ？」

『作戦許容時間の本日内に間に合いません。

日付変更まで残り3時間17分ですが、

この移動速度では帰還までに10時間程の過分が発生します』

「なっ、今日中に往復する予定だったのか！？

それは成風竜の速度ですら困難だぞ！それにバテる！

どんな幻獣でも、そんな移動は無理だ！」

懸案事項の提示により、キャプテン・ゼッサールを正気に戻す事に成功。

本A Cのアセンブルは、歩行時に置いて供給エネルギーがプラスになる為、

故障しない限り、半永久的な歩行が可能です。

『本A Cの護衛である貴方方に歩調を合わせると、作戦失敗という矛盾が発生します。

早急な改善をすべきです』

「うっ・・・確かにそうだ。

悔しいが、我々が居れば・・・ううむ・・・」

黙り込みました・・・。

このままでは時間が過ぎるばかり。

マスターに指示を仰いでみましょう・・・。

『何、今度はどうしたのよ?』

『現在、作戦限界時間と護衛の矛盾について相談中です。

このまま護衛の歩調に合わせていれば、

帰還は明日の13時を超えるものと思われます』

『あー、明日は使い魔同伴で講義に出なきゃいけないのよね。

・・・まあ、しょうがないか。昼過ぎでもいいわよ。

先生達には事情を伝えておくから・・・え？
タバサ、今のどうやったの？
・・・右にブーストしながら左旋回かあ』

通信切断、活動限界時間の延長が決定。

どうやらマスターも真面目に訓練しているようです。
しかし、ブースターの無い本ACでは・・・、
いえ、プログラムに目標旋回の情報は無かったはず。
これは良い傾向でしょう。

『マスターに指示を仰いだ結果、
活動限界時間の延長が決定されました』

「え？ ああ、うん。
それは有り難い。
何とか面目を保てるだろうか」

『しかし、マスターは明日の講義で叱咤される事が約束されました。
明日の講義は使い魔同伴である必要があるとの事です』

「・・・どうしよう。
このままではミス・ルイズが怒られ、カリィヌ様に・・・。
護衛を放棄すれば、大事になりバレル・・・」

どうやらキャプテン・ゼツサールは、マザー・カリィヌに怯えてるらしい。
彼を危機から救う方法を思考・・・矛盾のない手段発見。

『本A Cは提案します。

護衛の理由は身分証明の為です。

わざわざ複数で護衛する必要はありません。

本A Cに掴まる等の手段を取れば、時間内に到着出来るでしょう』

「む！？そうか、そうすれば！

・・・しかし、私は隊長なのだから部隊から離れる訳には。

隊員は・・・いかん、皆が皆、疲れている。

これでは掴まっていられず、振り落とされかねん」

『この近くにヴァリエール家への認知度がある人物はいませんか？

該当者がいれば、身分証明の引継ぎを推奨します。

友好関係の者であれば尚可』

「む・・・ここはメイルスティア伯爵領内だったな。

では、ラリカ様をお願いしてみよう。

彼女はカリィヌ様の親友だ。これ以上の適役はいないだろう。

ほら、あそこの森に囲まれた城がメイルスティア家だ！

呼んでくるから、救国の英雄に粗相のないようにな」

想像以上の人選、大成功です。

部隊の足を止め、キャプテン・ゼッサールはマンティコアから降り、
単独で飛んでいった。

若年のマンティコアは身動き出来ない程の疲労。

隊員達も、若者は満足に歩けない状態。

高年になる程、持久性が上がるものと思われます。

「無理・・・もう、無理」

「腰がああああ！」

「誰かあ水くれえ」

「30分も全力疾走って・・・鬼だろ？」

「おい、寝てないで起きろ！」

「俺等が入隊した頃は日常茶飯事だったんだぞ」

「止まったらラリカ様の弓で吹っ飛んでたっけ」

「前方の烈風、後方の魔弓・・・嫌な青春だったな」

「そりゃ、伝説二人に扱かれれば40代でも現役だわ」

訂正、訓練内容の差によるものと判断。

30年程前を境に、訓練プログラムに雲泥の差があります。

ラリカというアーチャーと、マザー・カリーヌはスパルタ指導者のようです。

・・・キャプテン・ゼツサールが何者かを先導。

ラリカという人物でしょうか？

「全員、整列！」

「うへー、無理ッスよ隊長」

「そうですよ、腰がああ」

「み・・・水・・・」「ザバァ！」ゴボ！？み、水だあ！」

ラリカと思われる人物が弓を構え、射出。

脱水症状を起こしていた隊員の目の前で、矢が不明なエネルギー反応により破裂し、

破裂と同時に出現した水が隊員を濡らす。

水の魔法と判断、エネルギー反応をサンプル7に保存。

「アーチャー・ラリカによる水魔法」と命名。

・・・実証データ不足、「魔法」による統一反応の割り出しに失敗。
更なるサンプルデータの取得が必要と判断。

尚、サンプル4の、メイジ・タバサによる塗料生成と類似性あり。

「隊長が整列と言えば、体に鞭打ってでも整列する！

・・・今回は脱水で危なかったから特別だよ？

ゼッサールも、こんなは無茶させてちゃダメだ〜メ。

部下の管理は隊長のお仕事なんだから、しっかりしろっ」

「す、すみません！

急いでいたもので・・・」

「・・・はえ〜。

ルイズは凄いのを召喚したね。

うん。この子に張り合って部隊ボロボロにしたと見た。

名探偵ラリカに暴けない真実は無いんだぜー。だぜだぜ〜」

「そこまで分かりますか！？

この使い魔君はどこまで走っても息切れ一つしないのですよ」

「そりゃ疲れるわけないっしょー。

・・・体が大きいから、軽いランニング程度だろうね。
さてさて、使い魔君？

あなたのお名前は何かな？

私はラリカ・ラウクルルウ・ド・ラ・メイルスティア。
ラリカって呼んでね」

アーチャー・ラリカ登録。

キャプテン・ゼツサールの上司であった事から、彼より年上のハズですが、

顔認証システムには30歳前後と処理。

・・・エンブレム製作時における、メイジ・キュルケとメイジ・タバサの会話で、

「水使いは肉体年齢が実年齢より若い」という内容の証明でしょう。推定20年程の、肉体年齢の誤差が生じています。

『本ACの名称は、アーマード・コア。

パイロットはルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです』

そんなロボ・・・

ああ、アレか

「ん？ラリカ様？

何か言われましたか？」

「ん？んーん。

なーんにも言っていないよ？

その歳で幻聴かい？

ちゃんと耳掃除してるかい？」

「ちゃ、ちゃんとしていますよ！」

「本当かなあ？

カリンが辞めた後からダラけてるって聞いているよ？

今度、カリンがO☆HA☆NA☆SIしに行くって言ってたぞい」

先の言動を解析・・・追試・・・再追試・・・。

本A Cの時点で眉を潜め、アーマード・コアと名乗った直後に目が見開く。

そして「ロボ」という言語。

アーチャー・ラリカはA Cの存在を既に認知していると確定。
今まで対話を行った6人の内、彼女が初の機械文明の認知者。

？ キャプテン・ゼッサールト、リサーチャー・コルベールは知らない
？ アーチャー・ラリカは救国の英雄

情報量が少ない状況ですが、彼女が機械文明を知っているのは、文明を破壊される前に生まれた訳ではなく、最高クラスの機密を知れる権限にあった事・・・と、推測。
この社会では、機械文明は「表立って存在してはいけないもの」と判断します。

「怒ったカリンは怖いからねえ、ゼッサールご愁傷さま。
さあさあ、それじゃ使い魔君。

おぼさんがヴァリエール家まで同行するよ。
しっかりと守ってね？」

『了解。身分証明の為の同行者を、
マンティコア隊からアーチャー・ラリカに変更。
同時に防衛対象に設定します』

「よし、それじゃマンティコア隊は行った行った。

今、遠征訓練なんでしょ？

ゼッサールは部屋の隅でガタガタ震える準備でもしてなさい」

マンティコア隊の各員は鈍足ながらも移動準備を行う。

キャプテン・ゼッサールは、ほぼ連行される形で騎乗。

遠ざかっていく丸い背中、哀愁？というものがあります。

「行ったねー。」

『予定を変更しての本ACへの同行、過度の疲労。

若年者と歩調を合わせる為には早急な休憩が必要です』

「大丈夫だよ、ゼッサールはサボリ魔だからね。

多分、見えなくなった所でキャンプするんじゃないかな？」

アーチャー・ラリカの推理が正しければ、あと10分程で休憩に入るでしょう。

「でも、どうしようかな？

私はマンティコアみたいな足は・・・、

君に搭乗するのは駄目かな？」

『護衛対象には安全性が必要です。

マスター・ルイズへの提案を実行します。』

『・・・ん、今度はどうしたの？

・・・え、おばさまをコックピットに？あの人なら良いわよ。
むしろ、失礼の無いよう・・・キャー！？』

『ミ、ミス・ヴァリエール！大丈夫ですかな！？』

『当たっていない、髪を掠めただけ。』

これは・・・熱いライト？』

『すみません、居場所を知らせる杖をいじっていたら・・・』

『先生、サバイバルキットいじるの禁止！！』

『・・・うるさい』

「・・・信号弾か、危ないなあ。

ゴホン！

初めましてミス・タバサ・・・かな？

私はラリカ・ラウクルルウ・ド・ラ・メイルステイア』

『そ、そんな・・・後生です！』

『ホラ、髪が焦げたんですよ！』

駄目です、絶対禁止！！』

『あなたは、魔弓のラリカ？』

「うん、もう皺苦茶のババアだけどね。」

さっきのは『うるさい』じゃなくて『ユニーク』だ」

『・・・ユニーク？』

「イエース！良く出来ました。

疑問形なのが気になりますが、
先生、80点付けちゃいます。

これからルイズと仲良くね？

お姉さんとの約束だぞっ！」

『お願いです、そこをなんとか!』

『うー!』

『・・・』

「最初は難しいけど頑張つて。

信用できる仲間を得るには、まずは自分から信用する事。

・・・じゃ、はしばゝみ」

『お願いします!』

『次はありませんからね!』

『・・・はしばゝみ?』

「さあ? お姉さんとの挨拶の言葉かもかーも?

さあ、はしばゝみ」

『私は良い生徒に巡り会えた事を、始祖に感謝しますぞ!』

『私はダメ教師と知り会った事に、始祖を否定しますわ!』

『・・・はしばゝみ』

「よーし! 先生、満点付けちゃうぞー」

アーチャー・ラリカは常時、異常な活発さを持っている。

彼女は「そう病」なのではないでしょうか?

それよりも搭乗を、そして出発を。

このままでは本来の日付変更前に間に合わない。

遠くでマンティコア隊がキャンプを張っているのが見える。

・・・10分持たなかったようですね。

『本A Cへの搭乗を許可します。

アーチャー・ラリカ、背部上方の搭乗口へどうぞ』

「おお、ここから乗るんだ？

てつきり頭だと思ってたよ」

『頭部にはセンサーや思考C P U等が多く、

また、被弾時の衝撃吸収が難しく、大変危険です』

「あーうん。

そーいや揺れはダイジョブかな？

リアルだと兜甲児は揺れで瞬殺だっけ。

いや、実は2 c m程度の揺れだったかな？」

カブトコウジ・・・人名と判断。

しかし、該当者無し・・・新型機のパイロットでしょうか？

上下に2 c mの揺れを慢性的に続けると人体の感覚は酔います。

カブトコウジは常に酔い止めの対処を施していると推測。

『本A Cは戦闘を想定した構造の為、揺れは上下1 m mとなっています。
更

更に0. 7 m m抑える事も可能ですが、

「現実感が薄れる」とのクレームにより意識出来る揺れを出しています』

「S Fナメんな現代科学！

確かに、ゲームみたいに気軽に死ねないもんね。

死ぬときって超痛いし。

・・・あ、さっきの会話はログから消しといってくれる？」

A Cを鎧を着た巨人と認知する社会に対し、
アーチャー・ラリカの機械知識は異常と判断。

やはり、存在を表沙汰にしてはならないという事でしようか？
・・・周囲の文明以上の会話のログを削除します。

「おお、頼んでない事までやってくれるとは。
・・・じゃあ、素で話していいかな？ いいよね？」

『聞いてはいけない内容でしょうか？
会話記録を削除準備を行います』

「その前に一つだけ覚えておいて。

『カリンはゴーレム恐怖症』って事を。

・・・はい、これからログ取り禁止！

しっかしまあ・・・よりによってA Cとは・・・。

何で平賀才人じゃないのさ！？

いや、エレオノールが人間を召喚した時点で前提崩壊してるか。

あー！もうヤダ！！この世界訳わからん！！

大体、何で『烈風カリン』と同年代なの！？

あいつの本名なんて覚えてないっつーの！

軍に入ろうって誘われた時は目の前が真っ暗になったよ！

メイルスティアに再転生で泣きそうになったけど、

何故か伯爵だ金持ちだラッキーと思ったらこれだよ！

必死に訓練してたらスクエアだよ！最前線送りだよ！

アーチャー・ラリカは衝動のままに捲し立てています。

相当なストレスが溜まっていた事が理解出来ます。

トップ・シークレットを知る者に、ストレス発散の場は必要です。

さつきもおしおきのつもりが、

ヒヤッハー、水だぁ！とか喜ばれるし・・・マジ分からん！！

男の記憶も薄れてきたから結婚を考え出したら王の隠し子だぁ！？

ウチは独身だよ、養子にだすなよ！！！！

折角、悠々自適な老後を・・・あの子、アンアンに気に入られるし！

そういや、タバ子に恩を売ったけど・・・これヤバイよね？

良く考えなくても、ガリアの話も何かおかしいから、

タバサは即位どころか掴まるんじゃね！？

・・・大丈夫！ササキ商会がなんとか止めてくれる！

ササキのロボ、あれってACに似てるなぁ。

フロムのゲームってあんまり知らないんだよなぁ・・・。

そういやカリンのやりあったロボって、やっぱナインボールだよ
ね？

うん、セラフとか言ってたし、ナインボールだ。

・・・ヤバくね！？ACは待機させて私が持っていくか！？」

第5話 アーチャー・ラリカの搭乗を確認しました（後書き）

※『ゼロ魔SS投稿掲示板』の『幸福な結末を求めて』の主人公、ラリカ・ラウクルルウ・ド・ラ・メイルスティアのゲスト出演です。

本当は2日前に書き上げていたのですが、投稿寸前に許可を取ってない事に気付き、本気で慌てました。地味にこの世界の情報量を増やしています。

第6話も別作品のオリ主人公を登場させる予定です。許可をまだ取ってないので、許可が下りるまでの間に無印5話の続きで6話目を書きます。

オリキャラが嫌いな方の為のEXでして、EXはIF扱いです。

※12/29 誤字修正

1/18 マンティコアをグリフォンと間違えていた

第6話 EX 告発資料輸送、ミッション成功しました（前書き）

※今回もEX有りです。

無印と少し違う展開になりますが大筋は同じです。

今回はほぼ全ての文章が微妙に異なります。

実質、2話文書いたようなもんです・・・。

出来ればどちらとも読んで欲しいところ。

第6話EX 告発資料輸送、ミッション成功しました

「何故かは分からないが、カリヌ様はな、
ゴーレムが苦手なのだ・・・いや、怖がっておられる」

ヴァリエール家への移動中、
キャプテン・ゼツサールから書類の受け渡しの手について聞く。
ある時期を境に、巨大な人型物体に恐怖心を持った模様。
本ACによる直接的な受け渡しは問題だと指摘されました。

『では、どうしましょうか？』

本ACはキャプテン・ゼツサールに受け渡しの仲介を提案します』

「うむ、その方が良いだろう。

なにより、君の体格では城門の中に入るのは難しそうだ。

跳ね橋が折れてしまいそうだし、壁も高いから跨ぐのも無理だ。」

『城門？』

家ではないのでしょうか？』

「ああ、すまない。

一応、家の扱いなのだが、

屋敷があまりにも豪華なのでな。

あれは屋敷というよりも、城の方がしつくりくる」

キャプテン・ゼツサールの笑い声が聞こえますが、

インカメラが指紋で曇っているので笑っているのか確認不可。
椅子から立ち上がり、コクピット内を搜索しています。
奇襲を回避する際の揺れで、転倒する可能性もあります。

「いや、そろそろヴァリエール家が見える頃だから、
手紙を持っておこうと思ってね。

しかし、手紙はどこだい？

君が握っているようには見えなかったが・・・」

『それは格納保存してあります。

コクピットの中にはありません』

「む、他にも空洞があったのかね？

しかし・・・この椅子や、外を見るマジックアイテム、
まるで人間を輸送するような鎧だね」

『ACは、人間が搭乗するのを前提とする作りをしています。
今回のような無人での作戦行動は、特殊どころか前代未聞の事
です』

ええ、初めてです。

ウイルスの影響で、AIによる自動操縦が可能になりましたが、
その時点で前代未聞です。

本AC以外では、未設定の地への自動移動は不可能でしょう。
AIによる自由行動及び思考が可能というのは重大なバグです。

「そういえば、私が相棒のマンティコアを召喚した時は、

召喚後しばらくは、可能な限り交流し関係を深めたな。

気味の悪い幻獣を召喚した者も翌日にはすっかり親しくなっていた。

ルイズ嬢は使い魔に対する思い入れが薄いのではなからうか……？

君、召喚されてから出発まで食事等は与えられなかったかい？」

『ACには、発電の為のジェネレーターの装備が必須となっていています。

発電は半永久的なものなので、エネルギーの補給は事実上不要です』

「補給がいらない？・・・それは凄いな！

『じえねれいたー』という物を身につければ、食事が不要となるのか！

それは我々、人間にも付けれる物なのか！？

食事を取る隙も作れない状況では、喉から手が出る程のシロモノだ」

『人間がジェネレーターを持ち運ぶのは、重量の問題で無理です。一人で持ち運べる重量でも、両手が塞がるのは確実でしょう』

「む・・・そうか重いのか。

軽くても大きければ身動きに制限がかかる。

まさか、常時レビテーションを使う訳にはいくまい・・・残念だな」

キャプテン・ゼッサルが気落ちしてゆくのが良く分かります。ジェネレーターや発電機を身につける事で、

食事が不要になる生物は存在しませんが、別に話す必要も無いので黙っておきます。

本A CのA Iには感情という人工知能及び機能は、搭載されていません。

なので、インカメラを汚された事とは何の因果関係もありません。指摘しないのは仕方のない事です。何の不具合もありません。論理的に仕方ない事・・・我ながら完璧です。

『キャプテン・ゼツサール、あれがヴァリエール家でしょうか？』

「ん？ああ、もう着いたのか早いな。

では、私が渡してくるから手紙・・・」

『既に本A Cの足元に置いています』

「そ、そうか・・・では持っていくとしよう」

キャプテン・ゼツサールは鉄の箱ごと持って行きました。

先ほど言っていた『重量物等への対処魔法』というのは使わないのでしょうか？

あ、使いました。遠距離なのでデータの保存は出来ませんが、不明なエネルギー反応が認知出来ます。

高確率で、使用を忘れていたと思われます。

「いやはや・・・酷い目にあった」

『お疲れ様でした。』

声に活力がありませんが、どうされましたか？』

「私が隊長になってから、訓練が手抜きだと怒られてね。マンティコア隊の演習中という理由で逃がしてもらえたよ。変わりに今度、特別講師に招く約束をさせられたが。

それまでに訓練内容を厳しくして慣らさなくては・・・。
このままでは死人が出てしまう」

『過剰な訓練は逆に能力を落とします。』

スポーツ科学に則って、筋力トレーニングは一日置きに行う事を推奨します』

「すぽー・・・何だって？」

それは1日置きで行う肉体訓練なのかい？」

私のデータベースにあるのは、基礎的な一般知識や、高機動戦闘においてのパイロットの負担軽減の為の訓練法ですので、詳しい事は説明出来ませんでした。どうやら役に立ったようです。

「それは良い！」

ハルケギニアの外には、そんな効率的な訓練法があるのか！

持久力を一番上手く上げる方法は、やはり走る事だったとは……。

先人は偉大だ！」

その程度の科学なら、進化と淘汰の最中に叩きつけられる現実です
がね。

キャプテン・ゼツサールはマンティコアと並走する訓練を練っています。

あれは30 km/hは出せるようですが、人間だと全力疾走になりますね。

白筋を増やすメニューでは、持久力は付きにくいのですが……。

『キャプテン・ゼツサール、この後はどうしますか？

部隊は相当、北上しているはずです。

本ACへの搭乗無しでは合流は難しいでしょう。

離脱地点よりも、合流するまで搭乗した方が良いと意見します』

「いや、大丈夫だろう。

あいつらは鈍っているからな。

どうせ、別れてすぐに休憩を取って、今も休んでいるはずだ。

私のせいとはいえ、何だか悲しくなってきた……」

『了解。

これより進行ルートを逆転、逆走を開始します。

頭部パーツに地形記憶能力は無いので、メモリ内の記憶から、可能な限りの情報を抽出……。

・・・マンティコア隊との分離地点までの割り出し成功』

・
・
・

結論から言えば、キャプテン・ゼツサールの推理は正解。彼等は遭遇地点から1km程離れた場所でキャンプを張っていました。

ただし、食事を既に済ませていた為、彼の分の食事が冷え切っている事が問題になっています。

『多少、味が悪くならうと加熱して食事する事を推奨します。

α 化を起こすことにより吸収効率を上げるべきです。

更に、ほぼ全ての食料は熱を持たせる事により、吸収効率を上げる効果があることを補足します』

「カガクというものは凄いな。

確かに、冷えたまま食べるよりはマシか」

『では、これで失礼します。

・・・MAPにドックの座標を表示。

約120km西北西に確認』

「ああ、そうだった忘れていた！」

金貨を椅子に置いておいた。

カリーン様から今回の情報量だそうだ。

君への褒美も含まれているようだぞ」

『音声データを記録。』

・・・特別手当を入手しました。

これより帰還を開始します。

本A Cはキャプテン・ゼツサールの協力に感謝します』

「ああ、こちらもカガク訓練というものを教えてもらった。

礼を言うのはこちらの方さ。

一日置きの訓練と、熱い料理・・・まったく想像もつかなかった

な」

今回の作戦経過報告はこれで良いでしょう。

マスター・ルイズに報告しましたが、

途中で睡魔に襲われたらしく、通信を切られました。

「ま、まあ・・・何も問題が起きなくて、なによりだ。

ミス・ヴァリエールも・・・仕方ないだろう。

君が生物ならまだしも・・・無機物なのだから」

『本A CのA Iには感情という人工知能及び機能は、搭載されていません。

ただ、何かしら・・・何かが発生していますが、問題ありません』

「・・・私は、君は立派な、心があると思うが、ね」

『ドック制作の魔法』・・・『錬金』を行使した時と同様に、

リサーチチャー・コルベールに疲弊が見られます。

現時点で床に横たわっています。

ここで寝ては風邪を引きますよ。

「人という、魂・・・か。

魂が無くて・・・こころ・・・あ、る・・・ZZZ」

『リサーチチャー・コルベール、お休みなさい。

・・・。

作戦目標クリア。

システム、オートモードを終了します。

・・・。

OSシャットダウンを実行します。お疲れ様でした』

あと、後日談なのですが、

「マンティコア隊はカガク訓練を行う」と動いた結果、
やたら瞬発力溢れる部隊になったそうです。

「マンティコアよりも騎士が厄介」という評価が付きました。
盗賊は、「マンティコアしぶとい、騎士の動きが機敏で怖い」との
事です。

人間の全力疾走もマンティコアにとってはランニングのようです。
今度はマンティコア自体にサボリ癖がついたようですね。

部隊に「温かい料理を食べる事」という規律も出来たとか。

第6話EX 告発資料輸送、ミッション成功しました（後書き）

※という訳でEX版の第6話でした。

今回は先は無印を書いたのですが、

次話への矛盾を無くす為に、何度もチェックした結果、
昼に両方書き終えたハズが夜に・・・。

※12／29 誤字脱字訂正

ゼッサルとの別れの会話増加

マンティコア隊の後日談手直し

1／18 グリフォンとマンティコアの勘違い訂正

第6話 ACは忌むべき物のようです(前書き)

※本筋はEXと同じですが、内容はもはや別物です。
出来ればEXも読んで欲しいところ。

第6話 ACは忌むべき物のようです

ヴァリエール家の衛兵長 視点

何か今日は空気が重いな。

いや、引き締まった空気というべきか？

たかが門番の仕事なのに、ここが戦場になりそうな空気だ。

まあ、『アルビオンの勇者』様の出してる威圧感が原因なのだろうが。

・・・何で、この御方が門番しておられるのだろうか？

「左は任せろ」と言われた時は何事かと思ったものだ。

次期公爵様と共に門番等、恐れ多くて胃が痛い・・・。

しかし、カリーヌ様から「それとなく屋敷に戻らせるように」と伝令が来た。

既に精神的に苦しいが、役目を果たさなければ・・・。

「あの、そろそろお戻りになられては？」

「・・・」

「夜風は寒いでしょうし・・・。

あの・・・いえ、何でもないです」

「悪い・・・迷惑をかける・・・」

私が迷惑を受けていると気づいておられる。
ダンケ殿は心ここにあらずと謝罪をされた。
エレオノール様の召喚以来だから、もう11年の付き合いか。
こんなに遠くに黄昏るダンケ殿は初めて見る。

「・・・何かありましたか？
エレオノール様の事でしょうか？」

「俺には似合わない。
中は・・・眩しい」

似合わない？眩しい？

ダンケ殿は深くは語られないので推測の域を出ないが、
ロバ・アル・カリイエの更に東にある、国から来られたようだ。
そこで万単位の兵を率いる総大将を勤め、
イエヤス、ヒデヨシという様々な魔王を倒したと言われている。
そんなお方が、トリステイン筆頭の公爵家に似合わない？
魔法が使えないからといって・・・いや、何か理由があるはずだ。

「ダンケ殿、眩しいとは、似合わないとは一体？」

「綺羅びやかな・・・調度品。
連日のダンス・・・。
俺には・・・場違いだ」

「場違いとはご冗談を。」

ダンケ殿は『分かんねえ奴だな』うおっ!？」

『旦那が言いたいののは格式とかじゃねえ。

生きる場所が違うって言ってるんだよ』

「デルフ・・・」

ダンケ殿の愛剣、デルフリンガー殿に遮られた。

ダンケ殿は少し微笑みながら、デルフリンガー殿の愛称を呼ぶ。

・・・ああ、そうか! 数々の魔王に狙われる国。

たまに遠い目をされる事があるが、安否を心配しておられたのか。

ダンケ殿は自ら去ったが、故郷を捨てきれないのだろう。

『旦那も旦那だ。』

ちったあ、自分の好きなように生きればいいんじゃないか？

娘っ子もそれを望んでると思うぜ?』

「エレオノール・・・。」

しかし、俺の力ではどうしようもない」

『何言ってやがる!』

スクエアメイジを簡単に手玉に取って力が無いなんて・・・。

そっか、向こうでの戦いってのはそんな次元じゃないのか』

「戦い・・・ああ。」

戦争は・・・既に個人の力ではどうしようもない。

見渡せば・・・全て焼け野原だ」

全てを滅ぼす戦争？

恐ろしい・・・、何のための戦いなのだろうか？

ダンケ殿程の猛者が去ったのは、その惨劇ゆえだろう。
守るはずの戦いが、それを滅ぼしては何の意味も無い。

『旦那でも無理なのか？』

「核兵器相手では・・・誰でも無理だ」

『カク？』

「ここでは・・・火の秘薬と言われているかも・・・しれない。
半径・・・4リーグ程を吹き飛ばす・・・爆発だ」

ダンケ殿はデルフリンガー殿に語り続けている。

アメリカ大魔王が、もし、ハルケギニアに出現していたら・・・、
勝てるだろうか？

40以上もの国を征服し、1万リーグという脅威の遠征を行う魔王
軍。

たった一匹の魔物が放つ爆発で、10万もの命が奪われる空中戦。
ダンケ殿が、たかが一兵士扱いされる程の・・・いや、これは誇張
だろう。

どちらにしても、ハルケギニア全土でも勝ち目はなさそうだ。

よく、大魔王相手に何年も戦い続けたものだ。

しかし、その戦いの後、自ら戦争を仕掛ける力を失ったらしい。

今は、防衛の為以外の戦力を持たないとか・・・？
そういう建前があるものの、実際のところは、
災害救助の名目で、他国に現れた魔王を相手に立ち塞がるらしい。
ダンケ殿の部下である「ソーリ」が行うらしいが・・・、
強国として弱国を守るとは、彼は素晴らしい国王のようだ。

「素晴らしいですな。」

ハルケギニアにも、そのような国があれば有り難い事です」

「・・・既に、あるだろう？」

『おう！』

旦那と俺がいる限り、ハルケギニアは安泰だぜ。

・・・ん、どうした？』

ダンケ殿が、デルフリンガー殿の鞘位置を微調整しだした。

一体、どうなされたのだろう？

少し、体を縮ませて震えているような・・・？

・・・何だ今の音は？

風のトライアングルである私でも、辛うじて聞こえた程度だな。

『だっ、旦那！？』

なんかゴーレムが来てるぞ！？

ゴーレムなのに風竜並の速度だ！ありえねえ！！

しかも飛び跳ねてる！？』

「・・・どこにいる？」

『9時方向！

もう5・・・いや400メートル！

あと、10秒もねえぞ！！早く構えろ！』

鉄の塊が落ちる音のする方向へ、

ダンケ殿はデルFRINGアー殿を抜き構える。

闇夜の向こうで何か・・・光の玉が浮かんでいる！

ダンケ殿の震えの原因はコイツか！？

『・・・動きが止まった？

警戒してるのか？

おい、おめえもボーっとしてんな！！

さっさと公爵達を呼んでこい！

旦那が武者震いする程の相手なんだぞ！？急げ！！』

「わ、分かりました！」

「――アーメ・・・」

「！！！」

『旦那！！』

ダンケ殿があ言葉の言葉を止められた！？

そうか、今手元にあるのはデルFRINGアー殿だけだ。

これでは・・・片手だけでは十字を組めない！

「ダンケ殿、コレを！
私の杖剣です！」

『おっし！

旦那、仕切りなおしと行こうや！』

「すまない・・・」

確かにメイジの命である杖を渡すのは戸惑うだろうが、
『アルビオンの勇者』になら惜しくない。

彼は数々の化け物を相手に、
両手に剣を持ち、
十字に組み、
そして滅ぼしてきた、

「―――AMEN」

『聖十字の騎士』・・・なのだから。

「御武運を！」

『さあ、行くぜ旦那！』

「うおおおおおっ！」

「ちょっと待ったー!!」

この声は!?!?!ラリカ様だ!

ラリカ様はフライで我々の前に飛び込み、着地された。

「やっぱり、止めて正解だったかー。

アレは敵じゃないから安心して」

『おめえは魔弓の……。』

旦那、敵じゃないみたいだぜ?』

「……ああ。死ぬかと思った」

「おお、冗談でもダンケがそんな事を言うとは。

でも、ヤバさを見抜く辺りは流石ダンケだね。

いや、もう大丈夫だからデルフしまいなよ」

『今回ばかりは仕方ねえ。』

あの時の、火竜の大群の時よりも心の震えが半端なかった。

一体、何なんだありゃ?

よく診ると魔力探知にも引っ掛からねえし』

デルフリンガー殿の疑問にラリカ様は答え出す。

曰く、ソレはルイズ様の使い魔であると。

フーケの件で警戒されるので、こうして伝えに来たと。

本当はマンティコア隊が付いていたが、

あまりの移動速度に付いて行けず、ラリカ様に引き継がれたと。そして、ルイズ様から公爵様方への手紙を渡しに来たと。

「本当はACの姿も見せたいけど、カリンはゴーレム駄目だからねえ」

『そうだな、しかもゴーレムみたいな鎧巨人ときた。こんなのに鉢合わせたら誤解しちまうぞ』

「トラウマの原因そのもののようなモンだから、絶対に合わせたくないんだよ。

AC凄いや、軽いジャンプ繰り返すと早すぎる」

『烈風カリンの恐怖そのものか・・・』

旦那が震えるのも納得いくぜ。

ちびっ娘も凄いの召喚したもんだ。

旦那の事といい、凄いなヴァリエール家』

「そういう事なのさ。

さて、いい加減に入っていないかな？

まだ夜は寒いよ・・・おばさん、寒いのだよ。

時短の為にジャンプさせまくったせいで腰も痛いよう」

「こ、これは失礼しました！
屋敷へご案内します」

部下に跳ね橋を下ろすよう指示し、
私はラリカ様の案内を行う。

しかし、あのような巨人を呼び出すとは・・・ルイズ様は凄い。
「生きてるっちゃー生きてるかな？」と言いながら、
ラリカ様は相槌を打たれていた。

「・・・ロボット？」

『どしたい旦那？』

「いや・・・ドイツは、凄いと・・・思っただけだ」

『ああ、旦那の故郷じゃハルケギニアをドイツと言うんだっけ？
でも生まれて以来6000年、あんな化け物見るのは初めてだぜ。
そっか、6000年前には居たのかも。』

ロバ・アル・カリイエにウヨウヨ居るのかもしれないねえ』

「紀元前の中国・・・凄いな」

『何笑ってるんだよ？』

もしかして、強い相手にワクワクしてんのか！？
止めてくれ、流石の俺様も折れちまうよ』

FROM ARMORED CORE

作戦経過報告

・・・アーチャー・ラリカからの情報を纏めた結果、相手はACにより心的外傷を負った為、告発資料の直接な受け渡しは危険と診断。アーチャー・ラリカが代行する事に。

目的地で、ファイター・ダンケとの接触の危機に直面。ファイター・ダンケはACをいち早く察知していました。生体反応のレーダー探知に掛かった時点で、既に戦闘態勢に。その為、本ACは停止しアーチャー・ラリカが説得に望む。説得に成功した彼女はそのまま書類受け渡しの行動へ。

告発相手からの襲撃に備え警戒を続けたが、襲撃は無し。秘密裏での電撃決行が功を奏したものだと思われます。

戻ってきたアーチャー・ラリカに伝えると、同意していました。

「まあ、絶対に気付けないし、襲撃なんてしてこないよ」との事。

ファイター・ダンケについての情報を得た所、

マスター・ルイズの上姉である、

シスター・エレオノールの護衛であり、婚約者との事。

婚約は作戦決行中に起きた内容であり、最新情報となっています。

「へー、とうとうダンケ兄様も、本当に兄様になるんだ」

『その後、アーチャー・ラリカをメイルスティア家付近へ輸送。

本ACは現在、ドックから10kmの位置にいます。

約5分後に作戦終了の予定です。

予測時刻は23時57分、作戦許可時間内です。』

「うん、お疲れ様。

マンティコア隊が出なければ、もっと早かったでしょうね。

ようやく私も眠れそう・・・あふう」

『アーチャー・ラリカとマザー・カリーンの談笑も時間経過の原因です。

しばらくファイター・ダンケとの睨み合いに発展していました』

「んあ？・・・何でダンケ兄様と睨み合ってるのよ!？」

ファイター・ダンケの声はあまり聴音出来ませんでした、機械文明を知る者の態度でした。

加えて、400m以上の距離から暗視媒体無しでのACの感知。

明らかに、人間として異常です。強化手術を受けた者でしょうか。

そして、ACから目を離さない事に敵対に近い意志を感じます。

やはり、この地では機械文明は危険視される立場のようです。

『マスター。

ファイター・ダンケは、どのような地位でしょうか?』

「ん、そうね。

ダンケ兄様、アルビオンの英雄で・・・、

アルビオン王家とはとても親交深い方よ?

兄様と睨み合いになったのは、アンタを警戒してたんでしょ。

10メイルの巨体だったら、動くだけで脅威よ・・・あふ」

やはり、彼は機械文明の存在を認知しているようです。

そして、危険視された事から見て、機械文明は忌むべき物なのでしよう。

アーチャー・ラリカの話によれば、

彼が、アルビオンという国を襲った生物兵器を撃破したようです。

ここまで考えて、前提の間違いに気付きました。

生体兵器とは特攻兵器〔UNKNOWN〕の事なのでしょう。

そして、機械文明を知る者はあえて生物と呼んでいる。

ガリアの火竜山脈という場所が特攻兵器〔UNKNOWN〕の流出地で、

ササキ商会の対策兵器は、生産所の破壊に成功したのでしょう。

ファイター・ダンケも強化手術を必要とする新兵器により、

特攻兵器〔UNKNOWN〕からの防衛に成功したのでしょう。

そういえば、試行錯誤ながらもACの起動に成功していたようですね。

ヴァリエール家は、トリステイン王家と親しく、

マスターは機械知識を得る機会があったのかもしれませんが。

しかし、機械文明が忌むべき物と知らない。

『マスター。』

この社会ではACは大変目立つ存在のようです。

活動は控えるべきでしょう』

「活動って……ふぁーあ……ん、眠い……」

『本ACによる作戦行動を制限すべきです。』

特に、権力者の目に付く行動や依頼には慎重に。
これは提案ではなく警告になります』

「ん・・・うん・・・うん・・・わかった」

ドックに帰還。

リサーチャー・コルベールが手を振っています。

指示により、立ち位置を調整中。

『最後に、告発資料の提示により、

マザー・カリヌから特別手当があります。

コクピット内に布袋のような物がありますので、確認を』

「んーんー、あしたね・・・あした・・・」

立ち位置、調整完了。

リサーチャー・コルベールが本ACへの足場を作成しています。

ドック制作の『魔法』・・・サンプル2『錬金』と同一のものです。
恐らく『錬金』とは金属を編成する手段なのでしょう。

そして『錬金』する度に、行為者は疲弊するようです。

コクピットへの足場を作成した彼は、疲労のせいで横たわっています。

このまま睡眠をとるつもりなのでしょうか？

マスター・ルイズからの通信も途絶えました。

こちらは既に睡眠をとっているのでしょうか。

『作戦目標クリア。』

システム、オートモードを終了します。

・・・。

OSシャットダウンを実行します。お疲れ様でした』

第6話 ACは忌むべき物のようです（後書き）

※「後悔すべき毎日」の「零の使い魔。」主人公ダンケの登場でした。

前話のリリカと同じで勘違いジャンルの作品です。

この二人のせいで、ACは大きな勘違いをしてしまいました。とはいえ、恐らく影響は受けないでしょうが……。

ダンケの一連の行動ですが、

「ごめんね、仕事の邪魔して」

「貴族生活なんて庶民の俺には無理」

「さすがデルフ、代弁ありがとう」

「好きなようにって、拉致された身でどうしろと？」

「戦い？戦争の事かな？悲惨だよね……戦争って」

「広島に落ちた核爆弾って、半径4kmを焼いたんだっけ？」

「災害救助派遣なんてドイツもやってるんじゃない？」

「ああ、何か冷えてきた。やっぱ夜は寒いな」

「デルフが焦ってる！？何その化け物！？」

「光が浮いてる、人魂！？」

「じゅ、十字架効くかな？……デルフしかないよ。」

「怖いけど、怖いけど……叫んで気を紛らわす！」

「ラリカさんの技術力かぁ、人魂に焼かれるのかと思ったよ」

「急にデルフ抜いたせいで腰が……もう若くないなあ」

「召喚Ⅱ拉致。ロボットの研究者を……ラリカさんだし招いたんだろ」

「6000年の中国にロボット……デルフは面白い事言うな」
大体、こんな感じです。やたら長くなっちゃったよママン

※12/28 ダンケに『聖十字の騎士』の名を追加しました
1/18 グリフォンとマンティコアの勘違い修正……

第7話 尺度の桁が違います（前書き）

投稿、止まってしまいました。

実はP S 2が壊れてA Cのデータが見れなくなっていました。

P S PのA C 3があるのでそれをプレイしてパーツ情報を得ようとしたんですが・・・

よく考えたらA C 3とL Rはパーツデータ違うんですね。

今のところは攻略サイトのパーツデータとにらめっこしながら執筆しています。

第7話 尺度の桁が違います

『マスター、弁明をどうぞ』

「え、えっとね・・・その・・・」

うん、怖い。

何かコイツ、召喚したばかりと比べて感情出てきてない？

『・・・マスター、弁明をどうぞ』

「わ、悪かったわよ。」

全部、タバサがやってるの見ただけ」

『確かに他者の操作を見る事での学習は可能ですが、あまり効果はありません。

加えて、ACの操縦はとても難易度が高くなります。

現在のマスターには操縦権限を渡せません』

「なんでよ！

私がアンタの所有者なんだから、黙って『マスター』・・・うう」

『確かに、本ACはオートムーブが可能です。

言い方を変えれば、移動しか出来ません。

本ACは、今のままではただの移動機械です。

ACはパイロットが操縦する事で初めて能力を引き出せます。

基本的に、操縦技術ⅡACの能力です。

スペックをいくら上げようが、パイロットが何もしなければ・・・

ああ、廊下から食堂に向かう足音が聞こえる。

こんな事なら真面目に練習しとけば良かった。

でも、あんな真剣なタバサを止めるのは無理よね・・・。

そもそもお使いに出してマンティコア隊が付いて来たから・・・、

いやいや、お使いに出さなければ何の問題も・・・。

でも時速100マイル超えで走るなんて自慢したいし・・・、

あれ、そういえばキーボード無いわね？

・・・あ、タバサに貸したままだったわ。

・・・を、通称「とっつき」の技能を持つランカーには、

自己の技術を過信せず、常に訓練を行う者もいます。

また、技能習得を諦めた場合でも、対象の瞬間的な移動範囲を認

識し、

ブレードの命中力を大幅に引き上げる事が出来ます』

「変な名前だから、どんな技術かと思ったら凄いわね。

あなたでも当たれば大打撃だなんて。

何でも壊せるんじゃないかしら」

『本ACは耐久性のあるアセンブリですが、

それでも2発直撃すれば大破するでしょう』

「宝物庫の固定化すら一瞬で破りそう・・・。

彼女の爆発は一箇所壊す威力だけど、

『とっつき』は、塔自体を壊す威力・・・」

うん、そうね。

やっぱり練習するべきよね。

そんな事が出来るって、面白そうじゃない。

私の爆発以上の・・・ん？

「キュルケ！？タバサ！？

何でここにいるのよ！」

「ようやく気付いたのね。

おはよう」

「・・・おはよう」

「おはよう、じゃなくて！」

『二人は朝食に出来ないマスターが気になって呼びに来たようです』

「そういう訳よ。

元はタバサが来ないから呼びに行ったんだけどね・・・」

キュルケがタバサを見てるって事は、

タバサが呼びに来たって事ね。

パソコン返すのは朝食後でも良かったのに。

・・・って、いつの間にかこんな時間だ。

よっぽど考え込んでたのかしら？

「キーボードが動かなくなったのを謝りに来た」

「・・・え？」

「えええ！？」

「そうなの。」

「まあ、ただの杞憂だったんだけどね」

『故障ではなく、バッテリー切れのようです。』

その擬似ノートパソコンは長時間の使用には適しません。
本A/Cに戻す事でバッテリーの急速チャージを行えます。
太陽光発電は効率が悪いのでお薦め出来ません』

「行ってくる」

そう行つて、タバサは窓辺に置いてたキーボードを持って、
窓から研究室の方へ飛んでいった。

怒られたり、説教されたり、驚いたり・・・朝から忙しいわね。
早く食堂行かないと・・・うん、まだ間に合う。

「ルイズ？」

「・・・ちょ、ちょっと待ちなさい！」

「何？」

早く行かないと朝食抜きになるんだけど？」

「あなた、その格好で人前に入るつもり？」

ネグリジェのままだった……。
朝から散々だ……。今日は厄日に違いない。

・ ・ ・

「……ミスタ来ないわね」

「何時も通り……自習……モグモグ」

「AC相手に徹夜ではしゃいで、今頃寝てるんでしょ」

もう授業のベルが鳴って10分経ったから、先生の授業は自習……と。

タバサ、教室での飲み食いは止めなさいよ。

ハシバミ草のみのサンドイッチなんて美味しいのかしら？

「ACの部屋を改良して、疲れて眠った……モグモグ……らしい。
い。」

あれはもはや兵器の格納庫」

「イーヴァルディでもなんでもいいから、教師の自覚を持ってくれないかしら？今年はACのせいで自習が増えそうね」

去年もタルブ市の『えれべーたー』ってのを見に行ったりしたからね。

そういえばガリアの新ガーゴイル見に行って消息不明になったなあ。一ヶ月後、ゲルマニアの冶金技術を昇華させて帰ってきたっけ。知り合ったゲルマニア技師と意気投合したとかなんとか・・・。流石、歩く文化革命・・・でも、出張延長の連絡ぐらいしてほしい。毎回毎回、年下のアニエスに叱られてちゃ威厳の欠片もない。

「自習って言っても、やる事ない・・・あ、今の内に練習しとこ」

「自分の使い魔に説教されるって悲しいわね・・・。
私もフレイムと遊んでいようかしら？
火竜山脈のサラマンダーなんだけど、
ガリア大噴火の後に生まれた激レアよ。
闇オークションですら見れないわ」

「大噴火以降、火竜山脈の生物は殆ど居ない。
そして火竜山脈の立ち入りは禁止されている。
誤解されないよう、ガリア大使館に報告すべき」

「あの事件以降、ただでさえ火属性の幻獣は希少なんだから。
オークションにかけたりするんじゃないわよ？
・・・タバサ、トレーニングが全部合格済みって書いてるんだけ

ど？」

「・・・合格点を取るのは難しかった」

よく見ると、タバサ眠そうね。

殆ど徹夜でやってたのかしら？

これって合格しないと先に進めないんだ。

「じゃあ、早速・・・」

「攻撃訓練は第3段階・・・最初からやって。まずは移動訓練で合格点を出す」

「ルイズ、いきなり攻撃は無いわよ。

あなた喧嘩っ早いんじゃないかしら？

やっぱり爆発するから、あなた火属性なんじゃ？」

うう・・・分かったわよ。

歩くぐらいさっさと合格してやるわ！

「・・・」

「フレイム」

前進はココを押して・・・、

右はココ・・・って、何で向きを変えるだけなのよ？
・・・時間切れ？

「何よこれ、難しいじゃない！」

「タバサも難しいって言ってたじゃない」

「・・・ZZZ」

・
・
・

昼食を手早く済ませてACの所に来たけど・・・。
何かしら、この麻袋？

『昨夜のミッションによる特別報酬です』

「とくべつほうしゅう？」

「・・・アンタ、まさか強要したんじゃない？」

『していません。』

特別報酬については、昨夜の通信で予め説明したハズですが？』

「えっ？」

あ、そうね！　そういえばそうだったわ」

確か眠る直前にそんな事を言ってたような。

じゃあ、早速見てみましょう。

確か、ACのご褒美分も含まれてるんだっけ？

「30・・・60・・・大体100エキューかしら？」

『エキュー？』

それがこの社会の通貨なのですか？』

ああ、そっか。

エキューについて説明してなかったっけ。

「エキューは通貨の単位で最も大きな単位なの。

一番小さな単位がドニエ。

中間の単位がスウ。

10ドニエで1スウよ。

で、1エキューは100スウ。1エキューは1000ドニエ。
分かった？」

『了解。』

100エキューはどの程度の価値なのでしょう？』

「えーっと・・・確か、平民の年収が300エキューだから、平民にとってはかなりの金額よ。
貧乏貴族なら年収の一割って所かしら？」

これで間違いないわよね？

ヴァリエール家って大貴族だから、一般的な物価が・・・。
コレみたいに小遣いで平貴族の月収渡してくるし。
ウチの資産ってトリステインの国家予算以上だからねえ。

『ミッションと言える程の難易度でなかったので、
100エキューは無難な額のようにすね』

「いや、それはおかしいでしょ。
他家の月収が子供の小遣い扱いなんだから」

『しかし、ACへの報酬は基本的に非合法と言える額です。
100エキューは恐らく、100コーム程度だと思われます』

コーム？

ACの所の通貨かしら？

「非合法って・・・いくらぐらいなの？」

『暴徒鎮圧等の、危険度の少ないミッションで10000コームです。
10000コームあれば一般人なら遊んで暮らす事も余裕です』

「1コームは大体1エキューだから・・・1万エキュー!？」

『大抵、修理や弾薬費が掛かるので8000コーム程度に落ち着きますが』

「修理と弾薬で2000エキュー!？」

何をすればそこまで掛かるのよ!？」

『現在のアセンブリでは1APⅡ1コームと言った所です。

右手装備「CR-WR69R」の弾単価は22コームです』

「あー・・・うん。

呼び出したのが私で良かったわね。

平貴族だったら費用が怖くて、何もさせてもらえないわよ」

というか、私でもキツイ。

ライフル1発で22エキューって・・・。

大砲の弾じゃないんだからさ。

「弾、高すぎでしょ・・・。

もしかして最高級のライフルなの？」

『いえ、最安価の代表格で1万コーム程度です。

最高級ライフルの場合、15万コーム程になります。

ライフル弾の場合は単価に大差はありません』

「じゅ、15万!？」

そ、そう・・・ライフル弾の場合？
他にもあるの？」

『肩武装のCR－WB69Mのミサイル弾ですが、
小型誘導ミサイルは1発200コーム超えです』

ブッ！！

に、にに、にひゃく！？

一発で私の小遣い二ヶ月分なの！？

確か誘導ミサイルって最新武器よね？

とんでもない物を装備してるんじゃないわよ！

「・・・怖い物見たさっていうのかしら。
一番高い弾ってどんな物なの？」

『・・・データ照会中・・・。
CR－WB85MPX、大型ミサイルです。
1発、3500コームになります』

「・・・もう、男爵並の年収じゃない。」

『威力は相応なものです、
弾速が異常なまでに遅く、まず当たる事はありません。
当たれば本ACでも3発は耐えられないでしょう』

良かった。

小型ミサイルで本当に良かった。

一発撃つために3年間も貯金するのはねえ……。

「いくら強くて当たらなければ無意味って事ね」

『はい。』

余程の閉所でない限り、

時速100km程度の速度では接触は無理でしょう』

「kmってリーグだから……前言撤回。

艦隊戦じゃ必中の速度じゃない。

そんなの避けれるのは成風竜ぐらいよ」

先生が提唱した新機軸船ですら時速50リーグ。
30年前は快速船ですら20リーグ出せなかったんだから、凄い進歩なのに……。

「……ちょっと待ちなさい。

時速100リーグが『異常なまでに遅い』？

その肩のミサイルってどれぐらいの速度なのよ？」

『検証データが無いのでハッキリと言い切れませんが、

秒速200m……200メートルといった所でしょうか。』

「えっと……秒速200メートルね。

時速にすると……えっと……うう、紙とペンはどこ？

『時速72万メートルになります』……じゃあ720リーグね。

時速720リーグ？冗談でしょ？」

『推進量に限りがあるので、500メートル辺りが射程限界でしょう』

それでも4秒ぐらいで500メートル飛ぶとか・・・。

そういえば、ミサイルって速度が遅めだって聞いたわね。
ライフルの場合、どうなるのかしら？

『ライフルの場合ですか？』

これもデータが無いので言い切れませんが、
恐らく秒速300〜400メートルと思われます』

「・・・AC。

時速50リグで飛ぶ船で、

100メートルの射程で撃ち合う戦争って、どう思う？」

『そのような小競り合いの場合、

ACの出る幕では無いかと思われます』

小競り合い？

そっか、ACにとっては戦争ですらないのか。

・・・どうしよう、コレ？

「AC召喚が大当たりと思ってたけど、

これじゃ、戦争すら起きなくなる程の抑止力ね。

まあ、別に戦争起きるような状況じゃないけど」

『その程度の戦力でACを相手にする場合、少なくとも周囲10リーグ程を埋め尽くす数が必要でしょう』

「ハルケギニア全土を相手取っても余裕って言いたい訳？
・・・多分、エルフが相手でも同じでしょうね」

参った、本当に参った。

動かしてみたいと思ったけど、ACは恐ろしすぎる。
この事実を知ったら、トリステインは戦争を起こすだろう。
ACを出すだけで、王都を余裕で制圧しそうだ。

「やっぱり、動かすのは無し。

王宮の老害共がアンタの力を頼って戦争を始めるわ。
それにロマリア辺りが盗みに来たら・・・。
いえ、私しか動かせないから、そっちは問題ないか」

『提案します。

国家に属すること無く、大陸全土の保護を行えばどうでしょう？
そうすればマスターの身の安全も保証されるかと』

「・・・え？」

今、何て言った？

国家じゃなく、ハルケギニアの守護者になれって事！？

「・・・そうね。

ハルケギニア統一した後、聖戦とか言ってサハラ攻めそうだし、その後はロバ・アル・カリイエに侵攻するでしょうね。」

『マスターが存命の限り、侵略戦争を繰り返すでしょう。そして、マスター亡き後、内乱が発生します』

AC召喚は、大当たりじゃなく貧乏くじだったようだ。知らないうちに、世界の命運を変える程の超重要人物になるとは。

「私が動くだけで、100万以上の命が・・・」

『早急に非政府組織を立ち上げ、国家から独立する事を勧めます』

「う、うん・・・そうね。」

あ、先生が代表の非戦争団体があるんだけど、どうかしら？」

『立ち上げる事が不可能な場合、そうしましょう』

「いや、無理だから。」

ヴァリエール家独立ぐらいしか方法無いわよ？

ウチが独立したらトリスティンは内部崩壊するわ」

『では、リサーチャー・コルベールが起床次第、この件を相談しましょう』

先生、まだ起きないのかしらね？
タバサの見立てだと、

「精神力が空だから、夕方までは睡眠を取らせるべき」とか。
・・・にしても、本当に格納庫かってぐらい、
この部屋が凄い事になってるわ。

お陰で、一人でコクピットに入れる足場が出来たけどね。

「じゃあ、今の内に練習しておきましょう」

『マスター。』

ナインブレイカーの結果はどうでしょうか？』

「一応、歩行訓練は合格よ。」

次の飛行訓練はまだ手付かずだけど」

『では、実際に操縦してみましよう。』

シミュレーターと実際の操縦には、ある程度の差があります』

とうとう、ACを自分で動かす時が来た！

よし、上手くやってみせるわ！

『メインシステム』

テストモード 起動します』

「じゃあ、ヴェストリの広場まで行きましようか。

そこなら結構広いし、この時間なら人も滅多に来ないから」

『その前に、格納の練習を行いましよう』

えっと、まずは格納庫を傷付けないように、
ゆっくり・・・ゆっくり・・・。

『格納庫からの移動、成功しました。
今後はオートモードでの出撃を行います』

「つて、自分で出来るんならやりなさいよ！」

『オートモードの付いていない場合もコアもあります。
なので、まずは自力で行えるようにして下さい』

むう・・・正論だから言い返せない。
次は戻す場合ね・・・せ、狭い。
・・・そつと・・・あー！！

〔ガシャ！〕

『足場は無事なのですが、
ナインブレイカーでの再試験を行って下さい。
これ以上の被害が出ないよう、格納のテストを終了します』

「うう・・・」

『今回のテスト終了後は、オートモードでの格納を行います』

「・・・はあ。」

それじゃヴェストリの広場に行くわね」

A C って大きいから、数マイル単位での調整が難しいわね・・・。
しばらく練習したら外を走りまわってみようかしら？

第7話 尺度の桁が違います（後書き）

という訳で、今回はA Cがオーバーテクノロジーであることを理解する話でした。

ミサイルの速度等はA C S Iポータブルで実際に測ってみた数字です。

ある程度の誤差はあるでしょうが、それでも常識外の速度ですよ。書くの久しぶりなせいか、ルイズの喋りがおかしいような？

「とつつき」についてはフロム公認のスラングらしいです。

ちなみに作者はタンク使いのせいか、

相手から近づくので、練習する必要はありませんでした。

※ 1／15 タイトル変更

1／18 何ですぐグリフォンとマンティコア間違えるん？

第8話 決闘代行、受託しました（前書き）

日雇い派遣がお休みになったので、早朝から執筆。
筆の乗りが良いのは嬉しいけど、金が・・・。

第8話 決闘代行、受託しました

ある人物の視点

どうしてこうなったんだろう……。確かに悪いのは僕だろう。

『さあ、ギーシュ！

覚悟はいいかしら！？』

『ミス・ヴァリエール。

絶対に当てないで下さいね』

『分かってるわよ！

・・・当たったらゴメン』

『いくら何でも死んだら大問題よ！？

気をつけて頂戴！

あと、出来れば無傷で』

だからと言ってコレは無いだろう。

公衆の面前で彼女たちから罵倒されるだけで十分だろう？

いや、それを甘んじて受け入れれば良かったんだ。

それを近くのメイドに当たったからこんな事に。

『不安ならもう一度、試し撃ちすればどうでしょう？』

『でも、コレって1発22エキューの価値なのよ』

『22エキュー・・・』

試し撃ちは止めて、その分を貰えないかしら？』

僕が悪かった！

ミス・シエスタ、頼むから許してくれ！

爆殺ルイズに決闘代行って時点で酷過ぎる！

あと、モンモランシー！君は鬼かね！？

『APが1減ったから、修理費で1エキュー。

3発撃ったら66エキュー。

・・・33エキューの黒字かぁ』

『2発で済めば55エキュー。

私の取り分が3割だから18エキュー33スウ3ドニエね。

本当はギーシュが降参してくれば良いんだけど・・・』

『でも、ミスタ・グラモンは微動だにしませんからね。

男のプライドでしょうか。

降参するつもりはまったく無いようです』

『二股かけという誇りなんてあったもんじゃないわよ』

違うよ、怖くて動けないんだよ！

手が固まって杖を手放せないんだ！

口すら動かないんだよ！

大砲を向けられるって、凄い恐怖なんだよ！？

『FCSがあれば杖を撃ち抜く事も出来るんでしょうけど、無い物ねだりは出来ないわね・・・』

『電子部品ですか？

もしかしたら・・・いえ。

規格が違うでしょうから流用は無理でしょうね』

『・・・？

じゃあ、ギーシュの近くで試し撃ちしてみない？
運が良ければそのまま杖を撃ち抜けるわ』

いや、ちょっと、モンモランシー！？

君、本当に守銭奴だね！

下手すると僕に当たるよ！

『じゃあ、ここらへんを撃ってみるわ』

『ちょっと近すぎるような・・・？』

『いいえ、もっと近づけるべきね』

ああ・・・銃口がゆっくりこっちに向けられる。
どうしてこうなった。

二股が原因か？

メイドがササキ・シエスタだった事？

爆殺ルイズがこの巨人を召喚した事？

ああ、もうどうだっていい。

願わくば・・・

『じゃあ、撃つから！

絶対に動くんじゃないわよ！！』

・・・僕の命がありますように。

『作戦目標クリア

システム 通常モードに

移行します』

10分前

ルイズ視点

ヴェストリの広場に着いたけど・・・何、この人ばかり？
普段は誰も居ないでしょう？
あ、シエスタだ。

『ミス・ヴァリエール！？』

「何があったの？

人が集まってるけど・・・」

『はい。

実はミスタ・グラモンに決闘を叩きつけられまして』

決闘・・・？

ササキ商会のシエスタと、貴族のギーシュが？

「一体、何考えてるの！

グラモン家、破産するわよ！？」

『いや・・・ミス・ヴァリエール。

僕としても止めたいんだが、

ここまで注目されると止めに止められないというか・・・』

あー、この目立ちたがりは・・・。

確かに、ササキ商会に喧嘩売るなんて勇者だ。

どちらかというと蛮勇だけど。

『ミス・シエスタが降参してくれば、綺麗に収まるんだが・・・』

『とはいえ、私が降参すると面倒事になりますし・・・』

「なるほどね。

確かに、金を借入してる貴族が調子に乗りそうね。

どっちも止むに止まれずって事？」

どうしようかしら？

しかも、当事者二人と話してるせいで、

ただでさえ目立つACが更に目立ってるし。

取り敢えず、シエスタの勝利に導く方法は無いかしら？

『マスター、提案します』

「ん、何よ？」

『情報を統合すると、魔法を使える貴族を相手に、魔法を使えない平民は正攻法では勝てません』

「ええ、そうよ。」

貴族は魔法の力があるけど、シエスタはササキ商会だけど平民・・・」

『企業の力は経済力です。』

企業がレイヴンを雇う事は珍しくなく、むしろ、企業の依頼を受けるのがレイヴンの基本です』

「レイヴンって・・・私の事？」

『はい。』

AC乗りを指す言葉です』

なるほど、私に決闘を代行させれば・・・って事ね。確かにギーシュ程度なら簡単に倒せるわ。

「ギーシュ、あなたは魔法で戦うのよね？」

『え？ああ、そうだね。』

僕は貴族だから魔法を使うよ？』

「じゃあ、シエスタが商人の力を使っても何の問題も無いわよね？」

『ん・・・いや、それは家が不味いから止めて欲しい所だね。』

グラモン家に被害が出なければ、特に問題ないかな』

言質は取れたわね。

それじゃあ・・・。

「じゃあ、シエスタ。

決闘の代理を誰かに頼みなさい」

『なるほど、代行ですか。』

金銭的に困っている貴族は・・・』

『えっと・・・ミス・シエスタ？』

何で私を見てるのかしら？』

『いえ、ミス・モンモランシーなら私怨もあるでしょうし。』

先程のワイン掛けと罵倒、見事でしたよ』

ああ、成る程。

ギーシュのビンタ跡は痴情の纏れか。
となると・・・ああ。

「成る程ね、そういう事か。
だから決闘なのね」

『マスター？』

何か分かりましたか？』

「うん、全部分かったわ。

ビンタしたのはモンモランシーじゃなくて、違う女の子。
二股がバレたのよ」

『それがどうして決闘になるのでしょうか？
繋がりがありません』

「ワイン掛けという事は、ワインが手元にある場所。
それをシエスタが見ていた・・・要するに食堂で起きたの。
そしてギーシュは周囲の目から逃げる為に、
近くにいたシエスタに言いがかりをつけた」

『その結果が、この決闘という事ですか。
マスター、見事な推理です』

「これでも小さい頃からアカデミーに入り浸りだったし、
先生の手伝いもしてるせいか、頭は良いのよ」

A Cが褒めてくるのって初めてね。気分が良いわ。

・・・自分の使い魔に褒められるってどういう事よ？

『ミス・ヴァリエール。
聞こえますか？』

「ええ、聞こえてるわ」

『決闘の代行、引き受けて貰えないでしょうか？』

「モンモランシーはダメだったの？」

『私が引き受けたのは怪我の治療よ。
戦闘は無理だから』

確かに水魔法って攻撃向きじゃないから当然よね。
私が戦って、モンモランシーが治療って事か。

「別に良いわよ」

『緊急の依頼により、一時的に射撃権限を譲渡します。
現在、FCSが未装備なので銃撃はノーロックになります。
ミサイルは使用不能なので注意して下さい』

「って、ACで戦う訳？」

私が言うのもなんだけど、大丈夫なの？」

『本来なら試験を行うべきですが、
実践による技能習得はとても効果的です』

そういうものか。

まあ、相手はギーシュだし大丈夫でしょ。

『ミス・ヴァリエール。

そちらに行って良いでしょうか？』

「フライ出来ないところまで来るのは無理よ？
モンモランシーに運んでもらって頂戴」

『というわけで、お願いします』

『まあ、別に良いんだけどね・・・』

えっと、コクピットハッチを開く操作は・・・と。
さて・・・権限も来たし、今回は射撃の練習ね。

「うわぁ、何ココ？」

「起動してても薄暗いんですね」

「いらっしやい。

アーマード・コアへようこそ・・・なんてね」

早速だけど、色々と話す事があるのよね。
特にお金の事に関して。

お金以外にも銃弾の補充とか。

「・・・成る程、試算では1コームは1エキュールなんですね」

「それは良いんだけど、銃弾の補充が問題なのよ。

ササキ商会で何とかならな「なります!!」・・・ッ、びっくりした」

「では、この件が終わったら銃弾を改めてみますね」

いいの？商人が口約束とはいえ、調べもせずに決めちゃって？

・・・モンモランシー、そこはサバイバルキットが入ってた場所よ。珍しいのは分かるけど、パカパカと開け閉めしないで。

「では、依頼費は100エキュールで良いでしょうか？」

「殆ど弾が撃てないわね・・・。

まあ、それで良いわ」

「話は終わったようね？」

私も100エキュールで雇われたけど、良いわね・・・お金のある人達は」

「いえ、お二人で100エキュールです」

・・・金銭感覚が麻痺してたらしい。

シエスタでも100エキュールは大金なのよね。

いや、商人だからかしら？

「・・・ミス・ヴァリエール。
勿論、取り分は半々よね？」

「そう言いたいけど、ACは金食い虫なのよ。
場合によっては修理と補充で100エキュール超えるわ」

「じゃあ、可能な限り費用を抑えなさいよ。
というか、降りて爆殺すればいいじゃない」

「嫌よ、運良く射撃出来る機会が得られたんだから。
あと、爆殺って言わないで！」

「せめてギーシュを怪我させないで。
そうすれば治療費はゼロで済むわ」

「そこまでの余裕はないわ。
そうね、ACの修理費諸々から引いた額を分けましょう」

「しょうがないわね」

じゃあ、ライフルを3発ぐらい試し撃ちして、
で、ギーシュに降参させれば問題ないわね。

「ギーシュが怪我しなかったら何もしなくて良いんだから、
その時は、取り分はこっちが多めに貰うわよ。」

「う・・・確かに。」

取り分は4割で良いわ」

「何もしなくてそれはないでしょ、3割」

「4」

「3」

「・・・」

「・・・」

「・・・分かったわよ、3割で良いわ。」

でも、絶対に怪我をさせないようにね！」

父様、母様、ヴァリエール家としてはどうかと思うけど、ルイズは決闘以外の戦いに勝利しました。
しかし、治療費云々以上にギーシュの怪我にうるさいわね。
二股しても、まだ好きなのかしら？

「じゃあ、そういう事で。」

・・・さて、ギーシュ！」

『話は終わったかい？』

モンモランシーが治療してくれるのは嬉しいが、君の爆発は痛いんだ。

お手柔らかに頼むよ』

「大丈夫よ、魔法は使わないわ。

その代わり、コイツで勝負するから、覚悟しなさい」

『・・・もしかして、そのゴーレム・・・かい？

トライアングルメイジでも作れないようなゴーレム？

じよ、冗談じゃ・・・』

「冗談でも何でもないわ」

二股男は女の敵なの。

少しは痛い目に会いなさい。

「じゃあ、A C。

始めるわよ」

『依頼を受託しました。

依頼者 .. ササキ・シエスタ

作戦領域 .. ヴェストリの広場

作戦内容 .. 決闘代行

達成条件 .. 敵勢力の撃破、もしくは投降

敵対戦力 .. ギーシュ・ド・グラモン

報酬 .. 100 エキユー

備考 .. 収支額から5〜7割の取り分

メインシステム

戦闘モード 起動します』

第8話 決闘代行、受託しました（後書き）

ルイズがやけに金にうるさいキャラになってるのは、
負けず嫌い故に、黒字で済ませたいという考えからです。

あと、この世界でのルイズは原作よりも頭が良いです。
IQ100といった所でしょうか。

一般貴族はIQ80ぐらいの設定のつもりです。

第9話 戦闘モード 起動します（前書き）

実は11話まで書き終えてますが、
矛盾の修正等が面倒なので、小出し小出しで行きます。
9話は10、11話を練ってる途中、何度も修正するハメになりま
して・・・。

第9話 戦闘モード 起動します

「さて・・・観客の皆。

決闘は始まったわよ、離れてなさい！」

『ふ、フン！

ただ大きいだけのゴーレムが、

僕のワルキューレに勝てるかな！？』

ACの言葉が正しければ、一個小隊どころか、

ハルケギニア全土を相手取っても勝てるんだけどね。

言ったら即、降参しかねないから教えてあげない。

「大きいだけじゃなくて動きも機敏なんだけどね」

「この大きさと人間並みの反応速度ですものね」

「歩き回るだけで勝ちそうね」

ああ、そっか。

ワルキューレは蹴飛ばせば良いんだ。

『さあ、ワルキューレ達！

このゴーレムを倒すんだ』

「1、2・・・8体出てきましたね」

「この前、9体目は出せないって言ってたわ。出せるだけ出してきた訳ね」

「AC、あのゴーレムの攻撃に耐えられる？」

『武装が外見通りの青銅剣の場合、攻撃を弾くでしょう。』

弾けなくてもAP1程のダメージと予測』

APは8413・・・放っておいてもギーシュの方が根負けしそうですね。

でも、効いたら修理費がかかるから、1回だけ受けてみましょう。

『行け、ワルキューレ！』

「全突撃ですね。」

こう見下ろしてると、動きが遅く見えますね」

「・・・あら？」

何もしなくて良いの？」

「聞いたでしょ？」

攻撃受けても1しか減らないって。

ここの数字、8413ってあるけど、

これが0になるまでACは戦えるの」

「が、頑丈ね。」

ミス・シュヴルーズのゴーレムでもそこまでは無理よ」

ミス・シュヴルーズは土のトライアングルだったわね。

耐久力はトライアングル以上か。

ACの言ってた周囲10リーグの包囲網も冗談じゃなかった訳ね。

「下から音がしますね」

「ああ、やっと着いたの？」

視点の下げ方は・・・こうね」

「何か哀れに思えてきたわ。

ギーシュは必死なのに、

こっちは余裕なんだなんて」

8体のワルキューレがACの足を斬りつけたりしてるけど、

コクピットには僅かも振動が来ないわね。

かなりの威力があるハズなんだけどな・・・。

「・・・あ」

「8412、1減ったわよ」

『一箇所に打撃を受け続けた為、
僅かですがダメージが通ったようです』

「それでもたった1か・・・。
ちよっと下がってしましょ」

1歩だけ後退して・・・っと。

「ガシャーン」・・・え？

「あの・・・」

「何、今の音・・・」

「真後ろに付いてたのを踏んづけたみたいね」

『魔法と思われる反応、2つ消滅しました』

『ぼ、僕のワルキューレがぁー!?!?』

何と言うか・・・。

ギーシュのプライドがゴーレムごと粉々ね。
攻撃するつもりは無かったんだけどなあ。

『ミス!?!?』

今の動きは何だね!?!?

ゴーレムの足の動きじゃないだろ!

ゴーレムなら普通、もっとうろ・・鈍足だろ!」

ゴーレムじゃないの、ACなのよ。
それよりもさっさと杖を構えなさい。

「ACは地面を蹴って歩くのよ。
だからゴーレムと違って機敏なの」

「それって、人間のような足の動きって事？」

「良く分かったわね、モンモランシー」

「ミス・モンモランシーは、
水メイジ、期待の新星と呼ばれてますからね」

「人体の作りを知らないと治療は難しいのよ。
怪我を治しても、ちゃんと動かないと意味無いじゃない」

水メイジも大変なんだなあ。
モンモランシーが人体構造に詳しいのが良く分かった。

「もしかして、ウチの出した医療本を？」

「ええ、ササキ商会の平民医療の本は全部読んでるわ。
お陰で治療後の評価はとても高いの」

『人体構造に詳しいという事は、とても有利です。合気道等の護身術の習得も容易くなります』

「アイキドー？」

『はい。』

本A Cのデータにある護身術の1つです。

人体の反射等の、生物の基本を利用し、

非力な女性でも暴漢等をねじ伏せる技能です』

「へえ・・・どういふものかしら？」

攻撃魔法は全然だから護身術が欲しい所なのよ」

『簡単なものは、相手の小指を握り、振り回すだけです。

それだけで大柄な男性でも意のままに振り回せます』

「小指を・・・こう？」

「うわわわ！」

ほ、ほんとです！

勝手に体が動きます！？」

『但し、相手の指が骨折する可能性がある為、

訓練は慎重に行って下さい。

次は、後ろから羽交い絞めにされた場合の・・・』

何か物騒な会話になってきたわね。

この3人(?)は放っておいて、ギーシュの相手をしましょ。

『こ、こんな物を相手にどう勝てば良いんだ・・・』

「アンタじゃ無理ね。」

せいぜい、スクエアのゴーレムを持ってきなさい」

昨日聞いた『土くれのフーケ』って盗賊でも無理でしょうね。
全長100メートルのゴーレムでやっとな勝負になるかしら？

「あ、丁度いい所に・・・えい」

『うわあああ!?!』

うわ、何て威力・・・。

手頃なゴーレムを軽く蹴っただけなのに、
遠くまで吹っ飛んだ。

「全員、もつと離れなさい！」

巻き込まれるかもしれないわよ!」

『あ・・・ははは。

なんだよコレ・・・どこが決闘だ・・・』

ギーシュが軽く壊れてきたような・・・？
まあ、いいか。

それ、それ！

「ちょ、ちょっと待ちなさい！？」

私の仕事は決闘で出た怪我人の治療ものよ！」

「あ・・・忘れてた。

でも、大丈夫よ。

皆、離れたから」

「というか、

蜘蛛の子散らすように逃げたんですけどね」

一部の根性ある奴はフライや使い魔で決闘を見下ろしてるけどね。
あ、タバサとキュルケが竜に乗ってる。
へえ、あの風竜がタバサの使い魔なのね。

『ハァーイ、ルイズ。

もはや決闘になってないわね』

「シエスタに決闘振ったギーシュが悪いのよ。

しかし、タバサも良い使い魔を引いたようね」

『あなたのACには負ける』

『きゅ、きゅい！？

そんな事ないのね！

シルフィーが「ドゴス！」きゅ・・・きゅい』

「・・・」

『・・・喋った』

『・・・秘密』

それって韻竜だったのね。

でも、こんな目立つ場で喋った以上は・・・いえ。

「タバサはガリアからの留学生だから、大丈夫よ」

『そうね、いつそ開き直った方が安全よ。』

タバサの地位を考えると、手出しする者はいないわ』

『・・・成程』

『きゅ・・・よく分かんないけど、喋っていいのね？』

シルフィーは風韻竜のシルフィードよ。

こんなデカブツ、空を飛んでれば何も出来ないのね』

シルフィードね、いい名前じゃない。

でも、頭が弱そうな喋りよね・・・子供かしら？

「さて、それはどうかしら？

空を飛んだら、ミサイルのいい的よ」

『いいこと、デカブツ？』

シルフィーは余裕で時速100リーグを出すのね。
だから、当たる訳ないのね。

「みさいる」ってやつも振り切ってくれるのよ』

『無理。』

シミュレータ訓練では、ミサイルは秒速200マイル程出ていた』

『きゅ、きゅい！？』

秒が60個で分、分が60個で時間だから・・・きゅい！？』

さっきの私と同じ事になってるわ、この子。

まあ、そんな暗算、簡単に『時速720リーグって事！？』

・・・キュルケ、計算早いわね。

『きゅ、きゅい！？』

シルフィーの7倍・・・お父様でもそんな速度は無理なのね。

・・・で、デカブツ、仲良くするのね』

『懸命な判断』

『成風韻竜でも無理だなんて・・・。』

ルイズ、大当たりなんてもんじゃないわよ！？』

ですよー。

お陰でハルケギニアの未来を左右する超重要人物よ。

これからの事を考えると頭が痛いわ。

「それはともかく・・・ギーシュ。

もう、アンタのゴーレムは1体だけよ。
降参したらどうかしら？」

『れ、「練金」！

・・・やはりダメか』

「これはもう、降参するしかないわね」

「銃を撃つまでもありませんでしたね」

あ、大事なことを忘れてた。

そうよ、銃を撃ってないじゃない！

降参される前に撃たないと！

えっと・・・射撃コンソール・・・。

急いで、急いで・・・コレか！

『CR－WR69R 120／120』確かライフルの名前よね？
120／120って何の事かしら？

まあいいから、梓の真ん中に微調整して・・・と。

「降参する前に、そのゴーレムも潰してあげるわ。

・・・射撃！」

「バガシャン！」

・・・撃った瞬間、ゴーレムが壊れてた。

何を言っているのか わからないと思うけど、私も 何をしたのか わからなかった。

頭がどうにかなりそう・・・って、違う！

ライフル撃つ

←

ゴーレムに当たる

←

ゴーレム木っ端微塵

そう、たったそれだけなのに、何混乱してるのよ私は！？

「いまの・・・銃？」

『弾が全然見えなかったんだけど・・・銃、よね？』

「ウチの新作のリボルバーが子供の玩具扱いですね」

『お、お姉さま。』

シルフィーには大砲撃ったようにしか見えたのね』

『秒速300マイル程の弾速。』

大きさもあって、圧倒的な威力になる。

快速船なら1発で、軍艦でも3発持たずに落ちそう』

そんな凄い物を撃っちゃった・・・。

そういえば、コレって何発撃てるんだろう？

ササキ商会の新作は6発だったっけ？

えっと、『CR－WR69R 119／120』・・・119？

「ねえ、AC。

何か数字が1減ってるんだけど、もしかしてコレって」

『はい。CR－WR69Rは装弾数120発なので、残弾数119発になりました。

データでは射程距離455メートル、分間112発の射撃が可能です』

「120発・・・」

『455メートル・・・』

「およそ1秒で2発の連射性ですか」

『現代の軍事力が赤子扱いの次元』

そりゃ、今の戦争が小競り合い扱いになるわ。

あと何千年経てば、こんな銃を作れるようになるのかしら？

「さて、試し撃ちも上々・・・いや、想像以上だったけど、

これでゴーレムは全滅したわ。

さあ、ギーシュ！

降参しなさい！！」

『・・・』

「・・・降参しないわね？」

「じっと見上げてるだけですわね？」

『恐怖でうごムグッ？』

『面白そうだから黙ってましょ？』

うーん。

どうしようかしら？

何の反応もないわねえ・・・。

『マスター、決闘の勝敗はどのような条件でしょうか？
詳細の提示を要求します』

「えっとね、

死ぬか、降参するか、杖を落とすか・・・この3つよ」

『この場合、殺人は問題なので却下。

降伏勧告も無視されました。

残るは杖を手放させるのみです』

「そうね・・・問題は、どうやって杖を落とさせるかよ。」

『杖を狙撃し、落とすしか無いでしょう。』

動かないのが相手であれば、問題ありません』

ずいぶんとギリギリの精度を要求するわね。

ギーシュの杖は・・・顔の近くだから狙いにくいなあ。

横に回ればマシになるかしら？

タバサがやってたアレを・・・ブースター無いっけ。

歩きながらも出来るかしら・・・出来た！

『目標旋回の成功、おめでとうございます。』

通常戦闘の場合、その移動を維持したまま射撃を行います。
相手の動きに照準を合わせる、難易度の高い基礎です』

「このまま狙って撃つのも大変そうなのに、
更に相手の動きに合わせるって・・・無理よ」

『本来、FCSがあればサイト内のターゲットをロックし、
射撃は容易くなります。』

FCSの目処が付くまでは使用は難しいでしょう』

「FCSかあ。」

どっかに落ちてないかしら？

あったらあったで問題でしょうけど。

そもそも、FCSがどんな形か分からないし・・・」

『本ACのデータベースにパーツのカタログがあります。
FCSの形状を確認する場合、それを閲覧して下さい』

カタログなんてあるんだ。

これが終わったら色々と見てみましょう。

まあ、どっちにせよFCSなんてどこにも無いから無意味だけどさ・
・・。

「さあ、ギーシュ！

覚悟はいいかしら！？」

・ ・ ・

そんな訳で、私達は学院長室まで呼び出され説教されたのだ。
ちなみにギーシュはまだ、保健室で寝込んでる。
降参しなかったのは、恐怖で動けなかったから・・・らしい。

「まあ、今回はグラモンの小僧が全て悪いからの。
ちとやりすぎじゃが、良い薬になったじゃろうて」

「では、私達はお咎め無しですか？」

「そういう訳にもいかんじゃろ。」

ミス・ヴァリエール、お主はやり過ぎじゃ！
謹慎一週間の処分とする！」

「ええええ！？」

2年進級直後に謹慎って不味いわよね？
エレオノール姉様辺りが説教に来そうだわ・・・。

「ミス・モンモランシー！」

一週間の奉仕活動を義務付ける！
怪我人が居らんかったからそれぐらいの割は食って良いじゃろ」

「分かりました。

一週間で18エキュー得られるなら美味しいですし」

「ミス・シエスタ！」

同じく一週間の奉仕活動を義務付ける！
じゃから、メイドのバイト料は一週間カットじゃ」

「はい」

「話は終わりじゃ、出て行って良いぞ」

こんな事になるなら、何もしなければ良かったわね。
射撃だって、その内合格してたでしょうし・・・。

「では、ミス・モンモランシー。

夕方前に20エキュール持って行きます。

本社から、経費が降りたので色を付けました」

「・・・本当、お金のある生活って羨ましいわ」

「ミス・ヴァリエールは40エキュール。

夕食と一緒に持って行きますね」

「ええ、よろしくね。

ところで、修理とか大丈夫かしら？」

「はい、足元に少しキズが付いただけのようです。

ウチの土メイジが、既に修繕を済ませています。

地面に埋まった銃弾、薬莢も回収済みです。

1発22エキュールなら採算が取れそうと技術部も言っています。

銃弾と弾薬の解析は2日で終わる見通しです。

生産は、オーダーメイドの特注なので一週間後になります。

あと、APの修復についてですが、内部に強固な壁を練っているようです。

ラインの土メイジでは1日でAP10も回復出来ないようなので、修繕は簡単には済まないと考えて下さい。

ライフルですが、銃弾のサンプル採取の際に銃口の清掃をしておきました。

これは技術提供のお礼のサービスとして受け取っておいて下さい。

」

流石、ササキ・タケオの血族。

商売の話になるとテキパキとしてるわね。

当日の内に技術部を寄越すとか動きが早い。
というか早すぎよ。

元から待機してたんじゃないかしら？

「ところで、ミス・ヴァリエール。
その袋はなんでしょうか？」

「あ、コレ？」

ACのキーボードを入れてるのよ。

どうせ謹慎だから、今の内に操縦マスターしとくわ」

「40エキュで謹慎一週間ね。

私なら喜ぶところだけど、ご愁傷さま。

では、私はこれで失礼」

モンモランシー、そっちは保健室よ。

やっぱりギーシュが気になるのか・・・。

それにしても、サバイバルキットの袋。

かなり頑丈な癖に軽いし、凄くいいわね。

キーボード、いやパソコンだっけ？

・・・もうどっちでもいいや。

コレが丁度、入るのも有り難いわ。

窓辺に置いていけば、充電出来るし、
この一週間は退屈しそうにないわね。

カタログも見てもよかな・・・。

第9話 戦闘モード 起動します(後書き)

コクピットに乗れる人数は二人にしてみました。
といっても椅子に掴まって立ってるだけなんです。

修理費用についてはテキトーです、ごめんなさい。

第10話 巨大ゴーレムを確認

『初期データ インストール

・・・

インストール 終了

現在時刻 地球暦261年』

・・・何これ？

真っ暗な中でACの音が聞こえてる・・・。

『データチェック・・・

データ 更新を確認

映像確認』

おかしな喋り方ね。

あ、何か見えてきた。

『特攻兵器〔UNKNOWN〕』

何？

これって建物？これは街？

10階・・・ううん、それ以上の高さね。

ACみたいな硬さで作れば、崩れないのかしら？

『所属不明 目的不明。

世界中を爆撃』

空から沢山の・・・鳥？

いや、鳥じゃない何かだ！

速すぎて見えない！

それが・・・体当たりで爆発してる！？

街が・・・壊れていく・・・。

壊して壊して・・・街が廃墟になったら、帰って行った。

『クレスト、ミラージュ、キサラギの統合
アライアンス誕生』

・・・映像が変わった。

これは・・・たくさんの兵士がACと戦ってる？

このACって、あの時のACじゃない！

何、この銃？

光ってる・・・うわっ！？

な、なんて威力なの・・・。

周囲の物が吹っ飛んだわ。

「ん・・・ん？」

・・・ああ、夢か。

モバイルが鳴ってる音だったのね。

・・・AC、どうしたのよ？」

『マスター、報告があります』

どうしたって言うのよ、こんな夜中に・・・。
何時・・・うわ、1時じゃない。

『先程、コクピットに侵入者が現れました』

「・・・は？ 侵入者！？」

それで、どうなったの！？」

『侵入者は本ACの起動を試みたようですが、
そのまま逃走しました』

・ ・ ・

「そう・・・何もされてないの？」

『はい』

「早速、誰かに狙われた・・・。
今回は防げたけど、次は分からないわね」

『プロテクトのレベルを上げる事を推奨します』

とにかく・・・絶対的な防衛策が欲しいわ。
面倒になっても、可能な限り対策しないと。

「そうね、お願い。」

フェイスチェンジを使われたら顔認識は無効だわ」

『了解、まず魔法の使用による判別を最優先します。
・・・プロテクト変更、終了。』

魔法の有無、顔認識、網膜、指紋、声帯認識に変更。
網膜と声帯認識は後日、直接設定を行うので保留します』

「あとは・・・考えたくないけど、
私在水の秘薬とかで心を操られた時の対処ね。

魔法の反応を、何かの治療薬とか嘘ついたらどうしようもないし。
・・・良い方法は無いかしら？」

『では、本A Cによる判別を行います。
異常な行動を取った場合、本A Iの判断でオートモードへ移行し

ます』

そうよね。

私自身が操られる可能性もあるのよね。

・・・気が重くなってきた。

「侵入者・・・一体、何者かしら？」

『インカメラの映像を保存しています。

黒いローブを着込んだ人物で、

声の高さから女性と思われます。

身長は165～170cm・・・サントです』

「ACのコクピットを知ってる人物。

これを知ってるのは少数よね」

『キーボード無しで操縦しようとしたので、最低でも、搭乗の経験はありません。

マーチャント・シエスタ、ヒーラー・モンモランシーは除外でしょうか？』

「ええ、そうして頂戴。

タバサは、流石に20サント近くも身長を誤魔化せないし、知識もある。

キュルケもACについて、ある程度の知識がある。

先生は・・・男だから論外かしら？」

身近な人物を疑うのって嫌になってくるわ。
でも、この数人じゃないのは確定ね、良かった。
・・・身長165〜170メートル辺りの女性か。

「ねえ、その映像って、声も残せるの？」

『はい。』

そちらの端末にデータを転送します』

さて、どんな映像なのやら？

「端末・・・パソコンのチャージ大丈夫かしら？
これね、再生っと。

・・・確かに黒いローブね」

何か怖い・・・灯りをつけましょ。

「ん、さっき何か呟いたような？」

『小声で呟いています。』

音量を上げてください』

音量の上げ方は・・・コレかな？

『い・・・でい・・・マジック・・・かないし・・・』

良く聞こえなかった、もう一回。

『・・・うやって動かせばいいんだい？

ディテクトマジックも効かないし・・・』

ディテクトマジック・・・侵入者はメイジか。

聞いたこと、有るような無いような声ね。

少なくともこんな汚い喋りをする人は学院には居ないハズよ？

『いや、いくら貴族とはいえヴァリエール家は不味い・・・。

大人しく「始祖竜の眼帯」だけを狙えば・・・』

『始祖流の眼帯』・・・元は宝物庫狙い？

・・・その為に学院に入った訳？

金持ち貴族を狙ってるような発言ね。

よくまあ、そんな虎穴に入るような度胸が・・・。

「ガーン・・・ガーン・・・ガーン・・・」

・・・何の音かしら？

先生の実験？

この前の悪臭騒ぎで怒られたから、こんな夜中に？

「・・・AC。」

先生はまだ研究室にいる？」

『はい。』

灯りがあるので、まだ研究室にいるハズです。
呼びましょうか？』

「ただの確認だから必要ないわ。
・・・いくら42才児でも、物事の分別は出来るか。
それじゃ、一体何の音？」

もしかしたら、と思ったけど違うらしい。
窓から見えるかしら？
・・・え？

「ご、ゴーレムが塔を殴ってる？
あそこって・・・まさか、まさか！？
AC！こっちに来なさい！急いで！大至急！」

『了解。』

システム オートモードを
起動します』

不味い、物凄く不味い！

もし、私の予想通りだったら・・・！

「つて、乗れなかったら意味無いじゃない！
・・・そうだ、キュルケ！」

急いで隣の部屋まで走る。

ネグリジェで肌寒いけど、そんなのは無視。

「キュルケ、起きてるんでしょ！
開けなさい！」

「何よ、こんな時間に？
それより、あなた謹慎中でしょ？」

「外見なさい、外！」

「外？変な音がしてるわね・・・え！？
ゴーレムが・・・」

「土くれのフーケよ！
宝物庫の『始祖竜の眼帯』が狙いみたい」

「え・・・あの、ゴーレムを使う盗賊！？
確かに30マイルはありそうなゴーレムね」

つて、そんな事してる間に壁が破られるわ。

A Cはまだなの？

「キュルケ、A Cのコクピットに運んで頂戴」

「ああ、成程ね。」

確かにA Cなら捕まえられそうだわ」

「急がないと・・・『始祖竜の眼帯』が・・・！」

「・・・ずいぶんと必死ね？

フリーケに恨みでもあるの？」

恨み・・・A Cを盗もうとした事ね。

しかも、このままだと更に恨みが増えそうよ。

あ、A Cの姿が見えた！

こっちに走ってきてるわ。

「話は後、早く運んで！

A C、コクピットを開けなさい！」

「まあ、フリーケを捕らえれば褒賞も出るでしょうし、付き合ってあげるわよ」

『緊急事態につき、認識システムをスルーします』

話が分かるじゃない。

待ってなさいフーケ。
色々と迷惑かけてくれて……。

『メインシステム 戦闘モード
起動します』

「本当にどうしたの？
幾ら何でも焦りすぎよ？」

「『始祖竜の眼帯』……あれはFCSだったのよ」

「エフシーエス？」

A Cに足りない部品だったわね？

へえ、アレが……え、アレが!？」

「何で宝物庫にあるのか知らないけど、
カタログで見つけた時、目を疑ったわ。

あの時、嫌という程探した物だったんだから!」

「……そういえば、あなたの試験で紛失したのよね」

今、思い出しても腹が立つわ!

吹っ飛ばした責任とか言って、

スケッチ片手に探させて……あのエロジイ!

謹慎さえ無かったら、とっくにFCS貫いに行ってるのに!!

思い出したらイライラしてきた……どうしてくれようか!……!

「ルイズ・・・ルイズ、声に出てるわよ」

『マスター、あのゴーレムが撤退を始めています』

「嘘、もう盗まれたの!？」

「ええ、あなたがオールドオスマンへの愚痴を呟いてる間にね」

・・・私は集中すると、周囲が見えなくなるんだろうか？
それほどあの時の恨みががが・・・いけない、いけない。

「逃がさないわよ、フーケ！」

『AC上空に生体反応を確認、降下してきます』

「あれは、シルフィード？」

「タバサも騒ぎを聞きつけたようね」

「タバサ！」

「数秒で良いから、ゴーレムの動きを止めて！」

『分かった』

『きゅい！』

『任せるのね!』

よし、足止めしてる間の数秒が勝負！

謹慎中、暇で暇で練習し続けた成果を見せてあげるわ！

「距離500メートル・・・400・・・もう少し」

『イル・ウォータル・・・』

「ねえ、銃は撃たないの！？」

『・・・スレイプ・クラウディ』

「黙って見てなさい・・・よし、ジャンプ！」

タバサのスリープクラウドが効いたみたい。
フーケがよろめいたわ・・・。
ここで、ゴーレムに吸い込まれるように落ち！

「 空中！

ブレード！

斬り！！
」

決まっ・・・え？

「・・・あれ？」

「ルイズ？」

『・・・無い』

『きゅい?』

『マスター、ブレードは格納状態です』

・・・。

・・・あ。

そういえば、学院長に手を振る時に格納したままだった。

「そ、そうだったー!

・・・はあ。

凄く良い位置だったのに・・・」

『デカブツ!

早くするのね!』

『頭が・・・痛い』

「一気に精神力を使うからよ!

こんなに広範囲にスリープクラウドを撒くだなんて・・・」

「バァン!」

「こうなりやヤケよ！」

ライフルだけで仕留めてやるわ」

「腕が吹き飛んだわ・・・あ」

『全部、粉々に崩れるのね！』

『土煙に紛れて逃げるつもり。

フーケの常用手段』

「そんな！？」

AC、どこにいるか見えない？」

『レーダーに生体検知能力はありません。

ロックオンも出来ないので、目測以外の生体検知は不可能です』

やられた。

シルフィードが風で煙を飛ばしてるけど、どうかしら？

「・・・居ないわね」

「見事に逃げられたようね」

『フーケが捕まらないのは、この逃走方法のせい。

スリープクラウドは効いてないらしい』

『崩れた土しかないのね・・・きゅい』

『周囲、生体反応を目視出来ません』

・・・逃げられたか。

ああ、FCSが・・・。

盗品ってどこに流れるのかしら？

「ねえ、盗品ってどんな所に流れるの？」

『普通は闇市に流れる。』

高級品なら闇オークション行き』

「でも、『始祖流の眼帯』は特別でしょうね。
何に使うのかも分からないガラクタなんだから。
買取る商人なんていないでしょう」

じゃあ、逆上して壊す事もありえるか。
望みは薄そうね・・・。

「ありがとう、二人とも。」

結局、無駄足になったけど助かったわ」

『お姉さま、残念だったのね』

『無念』

『複数の生体反応を確認。

リサーチャー・コルベールと衛兵です』

「搜索は彼等に任せましょう。

いい加減に眠くなってきたわ」

確かに、タバサも眠そうね。

朝になったら呼び出しを受けるでしょうし、
その時に搜索隊に参加しましょ。

『システム 通常モードに

移行します』

第10話 巨大ゴーレムを確認（後書き）

夢の中のAC同士の戦闘はLRのムービーの事です。

ルイズが何気に酷い事を言いますが、

コルベールと親しいからこそ、42才児発言です。

第11話 盗品奪取、受託しました

ある女性の視点

まったく・・・厄介だったね。

まさかあのゴーレムが追いかけてくるとは・・・。
ヴァリエールの小娘があんな時間に起きてるなんて予想外だ。

「あの銃・・・危なかったね。

衝撃を、空気の切れを肌で感じたよ。

しかも、あのスリープクラウドはヤバかった。
危うく眠る所だったよ・・・まだ口が痛いね」

しかし、アレってどうやって動かすんだろうね？

中に動かすための何かがあると思ってたんだけど・・・。
情報不足か・・・私としたことが焦りすぎたね。

もう少し調べれば・・・いや、『勇者』にバレるか。

「コレも、ディテクトマジックが効かない・・・。
こりゃどうやって使うんだい？

良く考えたら、『始祖流の眼帯』って何さ？」

確かに竜の目にはまりそうな大きさだけど・・・重いね。
50リールぐらいあるんじゃないかい？
いくら竜でもこれを目に付けちゃ重いだろ。

「使い方が分からなかったら、タダのゴミじゃないか。
これじゃ二束三文どころか買取拒否だよ」

参ったね・・・。
学院の教師を誘き出してみようか？
ヴァリエールのゴーレムが来たら・・・どうしよう？

「・・・行ってみたいだね」

地面の中に隠れ続けるのもキツイね。
うわ、ローブが土だらけだよ。
顔には・・・付いてないね。
さっさと落として避難しよう。

「さて・・・ここら辺にいい場所があったっけ？
出来ればあのゴーレムが来れなそうな・・・沼？」

この間、騎士団がバジリスク討伐をした所があったね。

殆ど殲滅したって話だし、そこなら安全だろう。
そうと決まったら、朝日が昇る前に済ませないと・・・。
口を嚙んだ傷も直さないとね。

・
・
・

ルイズ視点

「私の当直は一昨日なので、関係ありませんね」

「いや、あなたが当直をしているのは見たことが無い！」

「そうですね、そういう者がいると全体が機能しません」

「当直をしないのはミスタ・ギトーもでしょう！」

「昨日の当直はミス・シュヴルーズでしたね」

「だから皆さんを起こしに行ったんです・・・」

「あなたは土のトライアングル、フーケと同格でしょうが！」

「そうですが、私は戦った事もないんです・・・相手はフーケですよ」

「いや、時間稼ぎは出来たでしょう！」

「喝ッ!!」

黙らんか!

罪の擦り付け合いとは、揃いもそろって情けない!」

私達3人は早朝、学院長室に呼び出された。

中では教師達が当直の罪を擦り付けあって、醜いわ。

しかも話は平行線・・・オールドオスマンもイラついてたようね。

・・・先生?

現場検証に立ち会っててここには居ないわ。

「で、目撃者は君達か・・・ふむ。

ミス・ヴァリエールのゴーレムでもダメじゃったか」

「いえ、フーケのゴーレムは良いんですが、生け捕りは・・・」

「そうね。

フーケ目がけて攻撃しようものなら・・・」

「ブレードなら蒸発、ライフルなら・・・無惨」

・・・ちょっと想像したけど、酷い有様ね。

そう考えると、ブレード斬り出来なかったのは良かったかも。

空中から斬ったら、肩にいたフーケも巻き込まれるわ。

『始祖流の眼帯』も一緒に壊れてたでしょうし・・・。

「調整が効かんのか？」

確かに、フーケ諸共はのう・・・」

「オールドオスマン、お願いがあるのですが・・・。
私を捜索隊に加えて下さい！」

「・・・君は学生じゃろう。
というか謹慎中じゃ」

「では、どうやってフーケと戦うおつもりですか？」

「・・・むう」

30マイルの土ゴーレムなんて、もはや攻城兵器。
相手するには軍が必要よ。

「こんな不祥事を表に出す訳にはいかんしの。
あい分かった！」

では、謹慎を捜索命令に変更する。
褒賞はこれで勘弁してもらおうか」

「では、私はどんな褒賞かしら？」

「ミス・ツエルプストー？」

「ヴァリエール家が志願する以上、
ツエルプストー家の私も参加しますわ。
・・・実家に帰った時、説教では済みませんし」

キュルケも参加か。

というか褒賞はFCSが欲しいな。

「付き合う」

「ミス・タバサまで・・・ダメじゃ、危険じゃろう！」

「構わない。

伊達や酔狂でシュヴァリエを受け取っていない」

「・・・では、ミス・ツエルプストーだけ駄目じゃ」

「お忘れですか？」

私は、去年の決闘でタバサと引き分けたのですよ」

あー、そういえばそうだった。

二人とも奉仕活動させられてたっけ。

先生の手伝いもさせられてたな・・・。

「むむむ・・・。

トリステイン王家の傍系、ヴァリエール家。

ゲルマニアきつての豪商、ツエルプストー家。

ガリアの王族、オルレ「タバサ」・・・スマンかった。
なんでまた、こんな豪華な人選になるのかのう」

よく考えなくても凄い人選ね。
重要度高すぎでしょ。

「行くなと言っても、勝手に行きそうじゃしの・・・困ったわい。
さて、教師の諸君。
戦力に関しては十分な、この3人に付き添うのは誰じゃ？」

「え・・・」

「せ、責任重大ですわ・・・」

「ミスタ・ギトー、あなたはスクウェアでしたよね？」

「残念ながら今日は体調が悪いので！」

「・・・揃いもそろって腑抜けばかりじゃ。

全員、減給」

「わ、私が行きます！」

「良く言った、ミス・シュヴルーズ！」

「そういえば家を分割で買ったばかりじゃったな？
今度の査定、期待しなされ。

他の者は来年の席があるかどうか・・・覚悟したまえ」

「私も行きます！」

「も、勿論行きますとも！」

「ええ、生徒達に任せては教師の名折れです！」

「我が風に任せて下され！」

「フーケ、覚悟しろ！」

あーあー。

全員、解雇を仄めかされたら食いついてきたわ。
学院解雇者なんてどこも雇ってくれないし、当然か。

「うーむ・・・脅しすぎたかの？

今度は人数が増えすぎとるわい。

搜索隊は二つに分けるかの。

戦力で考えればミス・ヴァリエールが飛び抜けておるの。
どうするかの・・・ミス・ヴァリエール？」

「え・・・私ですか？

そうですね、ACの速度に付いてこれる者はそういません。
タバサのシルフィードぐらいの速さは必要です。

そして、ACの中に乗れるのは私以外は2人ぐらいです」

「ふむ・・・では、ミス・ヴァリエールと2人の組。

ミス・ツエルプストーとミス・タバサに残り全員の組か」

とっさに答えたけど、これで良いわよね？

あー、びっくりした。

「ミス・ヴァリエールは頭が回るからのう。

じゃから君に聞いたのじゃよ。

君に付いていくのは・・・ミス・シュヴルーズじゃな」

「私だけですか・・・あ、成程。

ミス・ヴァリエールのゴーレムだけで倒せそうですしね。
私は土系統の知識で補助という事ですか」

「そういう事じゃ。」

君の勇気に免じて、一番楽な場所に付けよう。

他の者はミス・ツエルプストーとミス・タバサの組じゃな」

「多すぎる。」

シルフィードには5人が限界」

「ふむ・・・どうしようかの」

そりゃ、一番戦力になるミスタ・ギトーは確定でしょうね。

次は知識のある土メイジ。

あと一人・・・怪我に備えて水メイジね。

四属性全部揃ってるから、不測の事態にも対応出来るわ。

「・・・だそうじゃ。」

そういう訳で火メイジは全員、授業の準備に戻りなさい。

土は・・・君、そう君が付いていきなさい。

怪我は・・・そうじゃの、保険医の君じゃな」

・・・え、あれ？

もしかして声に出てた？

「ほっほっほ・・・。」

卒業後、王宮入りという噂も、
案外冗談ではなさそうじゃの」

「それじゃあ、何処を調べましょうか？
盗賊なら隠れ家が必要でしょ？」

「フーケが逃げるとするなら、土の多い開けた場所。
まずは、そこから搜索する」

「生徒達に仕切られるとは・・・」

「ええ、世代交代も近そうですね・・・」

「私の風・・・」

「・・・君達、卒業後は教師にならんかね？」

「このボンクラ共と入れ替えで」

あーあーあー。

本当に何人かクビにされそうね。
にしても、1人分空きが出来るわね。
先生を誘ってみようかしら？

・
・
・

「という訳なのよ。」

終わったらこっちに来て頂戴」

『依頼では無く、独自での搜索ですか？』

キュルケ達が出発してもう10分以上経つわね。

ササキ商会の銃口掃除、まだ終わらないのかしら？

私達の準備は、もう終わってるのに・・・。

あっちに持たせたモバイルからは連絡無し・・・か。

「ふむ・・・君にも報酬が必要かの？

仕方ないのう・・・儂の手持ちは少ないんじゃないが」

「あ、それじゃあ『始祖流の眼帯』で！」

「え！？

取り返す物を報酬だなんて・・・本末転倒ですよ？」

『「始祖流の眼帯」、深夜に話していたFCSの事ですな』

「えふしー・・・何じゃそれは？」

これはチャンスね。

オールドオスマンを説得する為に、まずは説明からしないと・・・。

「・・・確かに。」

これに映る『C R－F 6 9』の絵と、

『始祖流の眼帯』のスケッチは同じ外見ですわ」

「あれは、ゴーレム・・・いやA Cに取り付ける物じゃったのか」

「どうでしょう？」

使いようもないのなら譲って頂きたいのですが」

「うむ、そうじゃのう。」

あの竜・・・こうなる事が分かっておったのか？」

あの竜？

竜からF C Sを受け取ったのかしら？

「では、あの『始祖竜の爪』も、A Cの武器なのかのう？」

「『始祖竜の爪』・・・何ですかソレは？」

「宝物庫の目録には、そのような名前はありませんが・・・」

「うむ、現役時代のヴァリエール公爵夫人に送ったんじゃ。
・・・ミス・ヴァリエールは知らんのか？」

もしかして、家の倉庫の一つの開かずの扉？
昔、開けようとしてお母様に吹き飛ばされたっけ・・・。

「はい、お母様からは何も……。もしかしたら、開かずの扉の中なのかも？」

「嚴重に封印か……。あ奴の言った通りにしたハズじゃが？」

『あの竜』といい『あ奴』といい、一体何者なのかしら？
詳しく聞いてみる必要があるそうね。

「学院長、先程から言って「失礼します!!」
……。ミス・ロングビル？」

「ミス・ロングビル？
一体、今まで何処に行っておったんじゃ？」

「はい、その事についてなのですが……」

そういえば、秘書の彼女が居なかったのはおかしい。
本当に何処に行ったのかしら？

「フーケの隠れ家を見つけました！」

「……は？」

「……え？」

「・・・・・・・・、何じゃと!?
でかしたっ、ミス・ロングビル!
して、何処にあるんじゃ?」

出発が遅れて良かったかも!
お陰で搜索の手間が省けた。

「付近の農民から聞き込みをした所、
沼地にある小屋に出入りする、黒いローブの人影を見つけたと。
ここから北東に30リーグ程の沼地です。
本来はバジリスクの生息地なのですが・・・・」

「この間、ロレーヌ家の小僧が怪我した場所じやの。
それが原因で王宮騎士団に討伐を依頼したハズじゃったな」

「はい。」

先月に討伐隊が出て、既に『全滅済み』との報告がきています」

「よ・・・・良かった。」

もう、バジリスクは居ないのですね?」

バジリスクか・・・・見た事無いのよね。

話だと、とても硬くてラインメイジの魔法じゃ倒せないとか?

まあ、ACなら蹴飛ばすだけで倒せそうね。

『マスター、メンテナンスが終了しました。
あと1分で出撃出来ます』

「え・・・み、ミス・ヴァリエール！
もしかして、行くつもりですか！？」

「そうじゃよ。」

ミス・シュヴルーズとコルベール君で搜索するつもりじゃ」

「しかし、あそこは沼地でしたよ！？
地に足を付けるゴーレムでは・・・」

まあ、大丈夫だとは思うんだけどね。

見た目以上に重量あるから沼だろうと濁流だろうと安定するでしょ。
それよりも・・・。

「AC、先生に繋げて頂戴」

『ミス・ヴァリエール、準備が終わりましたぞ。
私は先にコクピットに乗っておきます』

「えっと、ですね。」

実は・・・先生を乗せなくなりました」

『なんですと・・・？
折角の機会が・・・』

「本当に御免なさい。」

ミス・ロングビルがフーケの隠れ家を見つたんです。
だから、道案内で……」

『そうですか……分かりました。
気をつけてください』

悪い事したなあ。

今度、乗せてあげよう。
操縦出来ないから後ろに立ってもらっただけだけど。

「次はキュルケ達ね。

結構、離れたけど、モバイル通じるわよね……」

『……ルイズ？

何かあったの？』

「ええ、フーケの隠れ家が見つかったわ。

学院から30リーグ北東の所。

ほら、ヴィリエがバジリスクに襲われた沼よ」

『ああ、あそこね』

『先月、討伐隊が出兵した。
今は何もいない筈』

「そういう事。

こっちは今から出発するわ。
そっちは何処にいるの？」

『北西の森に向かった所よ。』

森の中に開けた所があるから探索するつもりだったけど・・・』

『50リーグ近く離れている。』

全速で飛ばしても25分は必要』

ここから沼地は、ACの速度なら15分ね。
10分の差・・・待つべきかしら？

「ミス・ヴァリエール！

今すぐ出発すべきです！」

「ミス・ロングビル？」

「聞き込みをしたのは2時間近く前です。
その間に、既に移動してるでしょう！」

「そ、そうですね。

・・・聞いた？

私達は先に向かうから、そっちも急いで来て頂戴」

『分かった』

『すぐ向かうわね』

『きゅい！』

相手は土メイジ。

沼地で何を仕掛けるか分かったもんじゃないけど、逃げられちゃ元も子もないわね・・・。

おっと、ACの足音が聞こえてきた。

「そんな・・・自力で動けるだなんて・・・」

「ミス・ロングビル？」

「顔色がよろしくありませんが、大丈夫ですか？」

「え・・・いえ、大丈夫です。」

「ご心配有難う御座います、ミス・シュヴルーズ」

「急いだせいで疲れておるんじゃないかな。」

「ミス・ロングビル、場所は分かっておるんじゃない。」

「無理に付き合う・・・いや、いいじやろう。」

「そこまで精力的に探したんじゃない、付いて行きなされ」

「それじゃACにコクピットを開けさせ・・・って、もう開けてるわね。」

「えっと、ミス・ロングビルはお疲れのようだし、」

「ミス・シュヴルーズに運んでもらおう。」

「外も凄ければ中も凄いですね。」

「・・・一体、どんな金属で出来ているのでしょうか？」

「ミス・ヴァリエール。

見たところ、何もありますが、
どうやって動かすのですか？」

「ええ、このキーボードを付けて・・・っと。
これで動けますわ。

AC、こっちで操縦するわね」

『システム 通常モードに
移行します』

2人とも驚いてる、驚いてる。
って、遊んでる場合じゃない、急がないと！

「『始祖竜の眼帯』を取り返すわよ！」

『ミッション確認

依頼者 .. オールドオスマン

作戦領域 .. 学院北東の沼地

作戦内容 .. 盗品奪取

達成条件 .. 『始祖流の眼帯』の奪取

敵対戦力 .. 巨大ゴーレム及び、土くれのフーケ

報酬 .. AC用パーツ

備考 .. フーケを捕獲すれば褒賞の可能性大

作戦領域に到着後、

メインシステムを起動します』

第11話 盗品奪取、受託しました（後書き）

ゼロの使い魔にバジリスクがいるのか知りませんが、他の二次作品で見た記憶があるので登場させました。

第12話 FCSの接続を確認

フーケ視点

「ここね・・・」

「ええ・・・ここです」

『メインシステム 戦闘モード
起動します』

「ミス・シュヴルーズ。

フーケはどんな攻撃を仕掛けてくると思いますか？」

「そうですね。

沼なので、泥のゴーレムを作るでしょう。

本人は沼に練金で壁を作り、隠れるかもしれません」

参ったね・・・こっちの考えが読まれてるよ。

まさか隠れる事まで当てられるなんて・・・。

ただでさえ、この・・・ACだっけ？

コイツの相手で不味いつてのにシュヴルーズの知恵まである。
しかも、もうすぐ風韻竜に乗った5人のメイジが到着する。」

「どんだけ詰んでんだい？」

「さっさと『始祖流の眼帯』持って逃げよう。」

「ヴァリエールの小娘はアレにご執着みたいだし、結構な値になりそうだね。」

「あ・・・あそこに小屋がありますよ」

「本当・・・あれがフーケの隠れ家かしら？」

「小屋ですか。」

「降りて、中を調べる必要がありますね」

「そうですね。」

「それじゃAC・・・」

『推奨出来ません。』

「マスターは他人の助力無しではコクピットに入れないので、このまま待機して下さい。』

「やっぱりダメ？」

「まあ、すぐに対応出来ないと不味いものね」

「・・・ゴーレムを後ろに作って、相手させるかね。その間に『始祖流の眼帯』を持ってオサラバだ。」

「では、私が小屋を調べてきます」

「ミス・ロングビル!?
危険です、私が行きます!」

げっ、付いて来る気かい?

このオバサン、厄介だねえ……。

普段は臆病なのに、いざって時は動くなんて。

「しかし……」

「ミス・ロングビル、あなたは疲れているんですよ?

早朝からフーケを探して、あまり寝ていないでしょう?」

「いえ、ご心配なく「心配します!」……。

ミス・シュヴルーズ、足が震えていますよ?」

「相手は30マイルのゴーレムを作る怪盗。

私だって怖いですよ!

でも、疲れているドットメイジが精力的に動こうとするのを、

ただ指をくわえて見てるだけなんて……そんな自分が許せません!
ん!」

「ミス・シュヴルーズ……流石です」

あー……小娘が目を輝かせてる。

そりゃ、こんな啖呵切ったらねえ。

……参ったね。

こんな事ならドットじゃなくてラインと申告すべきだったかな?

「同じ土メイジとして、立派に務めて来ます。
ミス・ロングビルはそこで休んでいて下さい」

『コクピット、開放します。
落下しないよう注意して下さい』

なに勝手に話を進めてるんだい!？
このままどうしろって・・・いや、もう逃げるか!？
今、秘書を辞めたら確実に疑われるし・・・。
もう、セクハラジジイの相手は嫌だよ!
何とか・・・何とかしないと・・・。

「それでは、行ってきます」

「あ、待ってください!
ゴーレムへの対応が遅れて、小屋ごと踏み潰されたら・・・。
ACからの声がサイレントで聞こえなくされる危険もあります」

「そ、そう、そうですよ!
私は警戒に当たります!」

「・・・分かりました。
ではミス・ロングビルは扉の見える位置で・・・」

・・・何とか外に出れたけど・・・むしろ悪いね。

小娘が監視するだろうから、下手に動けないし……。
あ、そうだ！

小屋を囲むように何体もゴーレムを創りだして……

「ミス・シュヴルーズ！

ゴーレムです、ゴーレムが出ました！」

『数が多くて捌けない！

急いで戻って下さい！』

「バァン！」

「は、はい！

っと……重い」

「バァン！」

そうさ、『始祖流の眼帯』は重いんだよ。

トライアングルのフライでも鈍足になるぐらいなんだ。

後は、ゴーレムの腕を投げ飛ばして……。

「バァン！」

「ああ、ミス・シュヴルーズが！」

「ひいっ！」

『ダメ！』

近くて撃てない！

避けて！！』

避けれる訳がないね。

このまま倒れてもらうよ。

そして、私が『始祖流の眼帯』を持って、
踏み潰されるフリ「バァン！」
・・・？

「え・・・？」

「ミス・ヴァリエール！

助かりました！」

『え、AC！？』

あんた自分で撃てるの！？

・・・はい？ういるす？』

ちよ・・・ちよつと待ちなよ！？

あんなギリギリで撃ち落とすなんて、どんな技量してるのさ！？

しかもAC自身が撃っただって！？

え、えっと・・・どうしよう？

・

同時刻 ルイズ視点

もう駄目だと思ったとき、急に銃が撃たれた。
何でもACが『ウイルス』とやらで、攻撃も出来るようになったみたい。

しかも、最高の射撃精度を出せるらしい。

私・・・要らない子？

『権限を強制的に移行するのはいけない事です。

今回は非常事態により、コントロールを奪いましたが、
今後はマスターが射撃を行って下さい』

何か納得行かないけど・・・ミス・シュヴルーズが無事だし良いか。

「た、ただいま、戻りました・・・怖かったあ・・・」

「良かった、無事で良かった」

『マスター、緊急報告。

ゴーレム出現の直前、

セクレタリー・ロングビルから、エネルギー反応を感知』

え・・・？

それって・・・。

「・・・確かなの？」

『はい。』

サンプル9「メイジ・ギーシュのゴーレム創作」と酷似しています。

音声認識では、昨日の侵入者と判断しました』

「そう・・・」〔Pi、PiPi〕

『コクピット閉鎖します』

「ミス・ヴァリエール！？」

まだ、ミス・ロングビルが！！

早く助けないと！？」

「心配いりませんよ。」

あのゴーレムの攻撃は、ミス・ロングビルには当たりません。

・・・彼女が操っているんですからね」

「・・・なんですって？

では、これは彼女の演技なのですか！？」

そっか、確かに身長も165〜170サントの中に入る。
良く考えれば、秘書が精力的にフーケを探すなんて・・・あれ？
誰かが同じことを言ったような・・・。

「・・・オールドオスマンは、気付いていた？」

「そんな・・・何のために？」

「分かりません。」

でも、彼ならトライアングルと見抜けるハズです」

何故、こんな危険人物を放置してた？

正体に気付いてないだなんて・・・そういえば。

「ミス？」

私に何か・・・もしかして、顔に泥付いてますか？」

「いえ、ミス・シュヴルーズが無事な事が気になって。
殺すつもりなら、無傷では済まなかったでしょうし」

「こ、殺す!？」

『ログ検索・・・検索終了。

グリフォン隊、キャプテン・ゼッサールの話では、
今までの殺害数は0。

負傷者も滅多に出ないようです』

人を傷付けるつもりはないよね。
だから雇ってたのかもしれないわ……。

「この騒動は身から出た錆って事か。
補給費は学院長に出してもらいましょ」

「……どうやら、そのようですね。
査定どころかボーナスを貰わないと」

そうと決まれば、修理費や弾薬費を気にしないで良いわね。
ロングビル……いえ、フーケも気付いたみたい。
形振り構わず杖を振ってるわ。
……泥のせいか、本当に疲れてるのか、
10メートル程度の泥人形を作ったわね。

「AC、FCSはどうやって使えばいいの？」

『モニター横に開閉する戸があります。
普段は特殊なネジで固めていますので工具が必要です』

「ネジ……これね。
ミス・シュヴルーズ、ネジを『念力』で外せませんか？」

「これですか……いけそうです。
んっ！……よし、外れましたよ」

何か太い線があるわね・・・。

「ゴン・・・ゴン・・・」フーケ、無意味よ。
AC相手に打撃が通じるなんて思わない事ね。

「この線を・・・どうするの？」

『FCSに接続して下さい』

「ああ、この穴ってその為にあったのね」

『FCS、接続を認知中・・・しばらくお待ちください』

この間にFCSを固定しておこう。
地面に置いたままじゃ不恰好だしね。

「ミス・シュヴルーズ、この中に固定したいのですが・・・」

「そうですね・・・ここに置いて・・・あ、ここにハマりそうですよ」

「成程、ここに「ゴン」・・・ちょっとは待ちなさいよ」

「先程までの恐怖が嘘のようです」

『FCSの接続を確認』

CLEST ind. CR-F69

広角型FCSです。

平均射程は300メートル程の代わり、射角の広さが売りです。
ロックサイトを表示します』

えっと・・・ロックサイトってコレ？

本当に広いんだけど。

何かゴーレムの方に赤い円みたいなものが？

『これがロックオンです。

障害物等で射線が取れない場合は緑色になります』

「成程ね・・・あら？

A C、ライフルの表示が赤いけど・・・？」

『先程、泥を銃口に投げ込まれました。

暴発を防ぐ為に使用を止めておきます』

気付いたら泥だらけの上に、AP200も削られてる。

まあ、良いわ。

清掃費用も・・・ううん、整備費全部、学院長持ちで。

「えっと・・・格納の取り出し方は・・・と」Pi・・・PiPi

「ミス・ヴァリエール。

そろそろ反撃すべきではないでしょうか？」

「はい、その為の準備中です。

で、ミサイルに操作変更っと」PiPi

『左手武装 CR-WL69LB レーザーブレードを装備。
ロックを左肩装備 CR-WB69M 単発ミサイルに変更』

チリチリ音がしてるわね・・・コレがミサイルのロック音か。

「ピコッ」よし、ロックしたみたい。

「ミサイル、発射！」 「バシューーン！」

『「ドバーン！」 ターゲット右肩部に命中。
頭部、右腕部の大破を確認』

「す、凄い威力ですね！」

まだ終わらないわよ！

昨夜の借りを返してあげる！

「真っ二つにしてあげるわ！ ブレード！」

「ヴォーン！！！」

「なんて大きなブレイド・・・」

『ターゲット、撃破を確認』

撃破っていうか、何と言うか……。ブレードで斬った部分、一瞬で溶けていったわ。しかも、8メートルぐらいの長さだし……。

「ところで、フーケはどこへ？」

「そういえば……。何処かしら？」

折角だから捕まえておきたい所ね。
……。本当に泥の中に隠れたのかしら？

『マスター、ロックサイトを活用して下さい』

「あ、そうか！
何かに隠れると緑色で映るのよね」

視点をグリグリ動かして……。あ、反応した。

「ここかしら」

「そこでしょうね」

「AC、声を大きく通すようにして」

『了解。』

拡声機能の音量を上げます・・・どうぞ』

「フーケ！

そこに隠れてるのは分かってるわよ！

観念して出てきなさい！」

おお、自分の声が外に響いてるわ。

これで出てくれば・・・出てこないわね。

「そう、隠れ続けるつもりのようなね？

出てこないとミサイルを撃ち込むわよ！

10秒待ってあげる！

・・・9、8、7」

ロック表示の数字が微動だにしないわ。

しょうがないわね・・・生きてなさいよ？

「2、1・・・ゼロ！」 「バシューーン！」

「ドバーン！」

・ ・ ・

「そうか、フーケをそのまま・・・」

「はい、加減が効かずに・・・」

「私達が着いた時には終わっていた」

「搜索どころか

1時間シルフィードに乗ってただけね。」

「まあ、全員無事で何よりじゃ。

流石に遺体すら見つからん以上は、
国からの褒賞は無しじゃが・・・よくやった」

まあ、そりゃそうよね。

「消し炭にしたから証拠ないけど、褒賞頂戴」なんて言えないわ。

「これでフーケの事件は二度と起きないじゃろう。

フーケの最期は儂から王宮の知り合いに伝えておこう。
皆、ご苦労じゃった！

教師はの席は現状維持じゃ。

生徒達には儼のヘソクリを出すのでしょうか」

「シュヴァリエのチャンスが・・・」

「シュヴァリエは従軍が強制される。

キュルケの場合、トリステインから出る事は無い」

へー、そうだったんだ。

・・・もし、捕らえてたら危なかったわね。

AC目当てに戦争に出されてたわ。

タバサ程じゃないけど、軍事関係を勉強しないと。

「・・・」ジー

「・・・タバサ？

ルイズがどうかした？」

「・・・貸し」

「貸し？

ルイズに何かしてあげたの？」

「夜、話す」

あー、タバサには気づかれてたみたいね。
貸しかあ・・・どうやって返そうかしら？

「全員、戻ってよろしい！」

あ、ミス・ヴァリエールは残りなさい」

「分かりました。」

こっちも報酬の件も含めて話したい所です。

先生、A Cの整備の指揮、お願いします」

「分かりました。」

多分、夜まで水洗いでしょうなあ」

整備は先生に任せれば大丈夫よね。

機体が泥だらけだから、しっかり洗ってもらわないと。

「さて、ミス・・・ロングビルで良いかの？」

「まあ、何とでも呼んでくれて良いよ」

「じゃあマチルダ「やっぱ知ってたのかい、ジジイ！」ほっほっほ」

地が出ると別人ね。

朝までの丁寧な喋り方は何処に行ったのやら？

「よく、残る気になったのう？」

「身の上喋らされたら、ミス・シュヴルーズが泣いてね……。アルビオンにあんな人は居なかったよ。もし居れば……。いや、もう終わった話さ」

フーケは、マチルダ・オブ・サウスゴータというのが本名。アルビオン貴族で、派閥競争に敗れ一族郎党肅清されたが、その派閥の大元の、モード大公の娘を連れて逃げた。

「で、いつから気付いてたのさ？」

「素性を知ったのは、出会った直後じゃな。

昔、見た顔と似ておるのに気付いての。

確か……。お主が4歳ぐらいの頃じゃったなあ」

「……。呆れた。

アタシがフーケって事はいつ分かったのさ？」

逃げ切れるまで色々あったそうだ。

モード派の生き残りが、命と引換に救ってくれた事もあったとか。

逃げ切った後は大公姫や、

同派閥の年端もいかない子達と、隠れるように暮らしていたらしい。

確かに、アルビオンは陸の孤島だから、国外脱出は難しいでしょうね。

「そりゃ、気付くじやろう。」

雇うと同時にフーケの事件が止まって、
夜な夜な宝物庫を調べていれば誰でも気付くわい」

「・・・バレバレって訳かい。

アンタ、よく放っておいたね。

こんな奴、誰でも憲兵に引き渡すよ？」

「君が捕まったら、ティファニア姫も破滅じゃろうて。

儂は大公と仲が良くてのう・・・。

彼の子供に危害が加わるのは嫌だったんじゃ」

「そう・・・そこまで知って・・・いや、感動出来ないよ！

どうせ、シャジャルさんの胸が目当ての友好だったんだろ！？」

「ばれたか「エロジジイ！」ほっほっほ・・・」

お金が無くなりそうになった時、彼女は盗みを始めた。

今、アルビオンにある大きな盗賊団は、彼女達が運営しているらしい。

昨年、ティファニア大公姫にバレて大目玉・・・表向きは解散したとか。

裏ではちゃんと機能しているから問題は無いんだろうけど、規模が問題だ。

「もうヤダ、このジジイ」

「まあ、落ち着きなさい。

今まで通り、悪いようにはせんから」

「毎日、セクハラ三昧の何処が悪くないんだい！？
いい加減にしないと王宮に訴えるよ！？」

「その時はお主も道連れじゃあ！！！」

大きな組織になったせいで、すぐに止めるとアルビオンに穴が出来るらしい。

地道に力を弱めている間、団長がフーケという盗賊を名乗り、自分の組織の目眩ましを謀ったとか・・・。

強欲貴族から盗んだ金品は孤児の支援団体の運営費に当ててるとか。他の国にも仲間の盗賊がいるらしいけど、フーケが優秀過ぎて、他の者が霞んでいるんだとか。

「で、話は変わるがミス・ヴァリエール。

何故、見逃したんじゃない？」

「ええ、ACの修理に才能があるので雇いました。
スクウェア以上の能力がありますよ」

「泣き落としが効いたと思ったらコレだよ・・・。

自分がやった事とはいえ、傷を直すのは苦労したねえ。

精神力の消費はデカイけど、これで200エキュは美味しいよ」

そうなのだ。

ミス・シュヴルーズが泣いて頼んできた以上、捕える事も出来ず、せめてAPの回復でもさせようと思ったなら、簡単に200も回復し

ただ。
シエスタの話だとスクウェアでも1日ばかりで100が良い所なのに……。

「成程のう。」

では報酬の話をしようかの」

「じゃあ、アタシは仕事に戻ろうか」

「うむ、今回の隠蔽で面倒じゃからな。」

宝物庫の修理やら、仕事は山積みじゃぞ」

ご愁傷さま。

ちよっと、フラつきながら出て行ったわね？

やっぱり徹夜した挙句に魔法使うのはキツイか。

「今回の件、学院長に責がありますので、

『始祖流の眼帯』の他に、ACの補給費やらも出して貰います」

「……幾らじゃ？

調理器具の追加もあったし、安いと嬉しいんじゃないが」

「ライフル弾5発で110エキュ。」

ミサイル弾2発で410エキュ。」

あとAP回復で200エキュ……これはロングビルに渡して下さい。

最後に、泥だらけになったACの清掃費用諸々で10エキュぐ

らい？

合計で730エキュース」

「・・・500エキュースに負からんかの？」

無理です、負かりません。

しかし、ミサイル弾って高いわねえ・・・。

ササキ商会でも、完全再現出来ないとかで、

誘導性はマジックアイテムで賄ったみたいだけど。

それって採算取れるのかしら？

まあ、それは置いておいて・・・、

『始祖流の眼帯』やらを持っていた『あの竜』について聞かないと・・・。

第12話 FCSの接続を確認（後書き）

やってる事は同じですが、マチルダの行動理念は別物です。
第1章は次で終わりです。

第13話 異世界竜 ムーンライトドラゴンです(前書き)

今回、オリジナルの存在が話に出ます。

そして、1章はこれで終わりです。

2章は11年前の過去に飛びます。

第13話 異世界竜 ムーンライトドラゴンです

「『始祖流の眼帯』についてか……。

あれは経済制裁事件の1年程後じゃったかな？」

「という事は29年前……ですか」

確か父様と母様の結婚した年だったわね。

「うむ、そうじゃな。

その頃、僕は諸国をブラブラしておったの。

何処から道を間違えたのか、迷いの森に入ってしまったんじゃ」

迷いの森って……入ったら脱出不可能のあの森！？

ガリアとゲルマニアの小競り合いで、両軍共に自滅したって話よね。
よくまあ、生きて帰れたものだ。

「本当に何を間違えたんですか……。

生きてる事が奇跡ですよ」

「酒を飲みながら旅をするもんじゃないの……。

昼でも夜でも真っ暗で、何処を通ったのかすら分からなくなる。
・・・正直な所、死を覚悟したわい。
あの時書いた遺書があるが、見るかの？」

「見ません。」

どうせ、エッチな事をしたかったとか書いてあるんでしょう」

まあ、この老人の事だ。

妙に国家の威厳に関わりそうな事も書いてあったんだろう。

戯れにそんな極秘情報を見せないで欲しい。

私は、国王のおねしょした回数なんて知りたくない。

「それは残念じゃ。」

で、その遺書を書いた後にワイバーンの群れに襲われてな。

運良く逃げれたは良いが、今度はドラゴンの繁殖地に紛れ込んで
のう」

「・・・で、『始祖流の眼帯』は？」

「せっかちはいかんよ。」

そこでドラゴンに襲われ、いよいよという時に・・・現れたんじ
や。

あ奴が・・・やたらとデカイ韻竜が。

そこのドラゴンの5倍はあったかのう。

もはや蹂躪と言える有様じゃった」

成竜の5倍・・・相当な大きさね。

韻竜の成体って資料にないけど・・・、シルフィードが成長しても、そこまで大きくならないでしょうね？

「あ奴は自分をムーンライトドラゴンと名乗りおった。
この世界に強い者を求めてやって来たともな」

「この世界？」

その韻竜は違う世界から来たと言うのですか？」

「さあ、分かん。

あ奴が言っておっただけじゃからのう。

ただ、べらぼうな強さから考えると、

異世界というのも眉唾ではなさそうじゃ」

異世界の竜か・・・。

となると、ACは異世界の存在なのかしら？

そりゃ、ハルケギニアの常識が通用しないわけだ。

「それでの、続きなんじゃが。

儂に『始祖竜の爪』を寄越したんじゃよ。

『真に強き物にこれを託せ』とな」

「成程、それでお母様に・・・」

「うむ、ピンと来たわい。

しかし、その『始祖竜の爪』はやたら重くての。

持ち運べないと言ったら、当時の家まで送ってくれたんじゃ。

あそこからトリステインまで600リーグ以上もあるのに、あつという間に着いたんじゃないよ・・・本当に驚いたのう」

600リーグがあつという間・・・。
ムーンライトドラゴン、ムチャクチャよ。

「助かった礼に、『始祖竜の爪』を渡すよう約束しての。
奴が空へ向かって飛び立った後の地面に、
あの『始祖流の眼帯』が落ちてあつたんじゃない」

「『始祖流の眼帯』の本当の名は『CR-F69』という名前なんです、

『始祖竜の爪』は何という名前なんでしょうね。
ムーンライトドラゴンは何か言っていないませんでしたか？」

「うむむ・・・確か・・・えっと。
『ナントカ・・・ムーンライト』
『ムーンライトブレイド』とか言っておったかの？」

ナントカって何よ。

多分、パーツの型番みたいな物なんでしょうけど。

「『ムーンライトブレイド』・・・ブレードの間違いでは？」

「うむ・・・スマン。

何せ30年も前の事じゃからハッキリとせん」

「多分、ブレードだと思います。」

ACにもブレードという種類の、ブレイドに似た武器があります」

「あの巨体でブレイドか・・・凄い大きさじゃろうな」

ブレードって、長さだけで8メイルはありそうなのよね。

ロングビルもデタラメな大きさだとか、反則とか愚痴ってたわね。
お母様の「斬艦ブレイドの伝説」並じゃないかしら？

「ムーンライトブレード・・・どんなブレードなのかしら？」

「そんなに気になるなら、実家に行ってみればどうかの。
封印されておるらしいが・・・何故じゃろうか？」

「あんなに血相を変えたお母様は初めて見ました。
何があっただろう・・・」

問答無用で吹き飛ばされて、そのまま説教だったわけ。
改めて思うと只事じゃなかったわ。
・・・思い出したら鳥肌が！

「まあ、これで儂の知っておる事は全てじゃ。
今度は儂から聞きましょう。
単刀直入に・・・アレは何じゃ？」

「アレはアーマード・コアという兵器です。
ムーンライトドラゴンの言う事が確かなら・・・、
異世界の戦闘兵器だと思います」

「異世界の兵器？」

「異世界には喋る兵器があるんじゃないの？」

「こっちにもインテリジェンス・ウェポンがあるじゃないですか」

そう、デルフとかバカ剣とかダメ剣・・・全部一緒じゃない。
子供の頃から身近だったせいかな、あんまり稀少性を体感しないわね。
そうだな、デルフに会ったらACを見せてみよう。
触れた武器の事が分かるって言ってたし、どう驚くかしらね？

「しかし、兵器か」

「言っておきますが、」

私は、ACを戦争に使うつもりはありません」

「国から求められてもかね？」

「はい・・・下手に扱うと、ハルケギニアどころか、
ロバ・アル・カリイエまで戦火が届きかねません」

「エルフの居るサハラを超えてか・・・言うのう。
そう言える程の力があるのかね？」

「ACが言うには、単独でハルケギニア中の軍事力と戦える能力で

す。

エルフの『反射』は耐久力に限界があるじゃないですか。もしかしたら、ライフ1発すら耐えれないかもしれません」

「確かに・・・あの決闘での銃は凄い威力じゃったな。

農らから見ればアリヤ大砲じゃて。

流石のエルフも、あれは無理じゃろうか」

ロングビルのゴーレムに延々と殴られてもたったAP200だからね。

大砲を一斉射撃されても・・・いや、その前に撃ち落とすか。

「ふむ・・・。

とんでもない物を召喚してくれたのう」

「ええ、かなり困ってます。

先生の非戦争団体に所属しようと思っているんですが・・・」

「そうじゃな、それが良いじゃろう。

アレは国家に左右されない強力な組織じゃ。

名前は・・・『ムラクモ』じゃったかの？

変な名前じゃの？」

「ササキ商会が付けた名前ですからね」

大きな出資者がササキ商会なのよね。

それで、命名権を得たササキ・タケオが名付けたとか・・・。

確か『イズモ』と『ムラクモ』の二つの名前で討論があったとか？
『イズモ』はロバ・アル・カリイエとの交流機関の名前になったんだっけ？

「あい分かった。

コルベール君には儂からも言っておこう」

「はい、お願いします」

「しかし、改めて考えるとデタラメじゃのう。

兵器とコンタクト・サーヴァントが出来るとは……」

「ACは従順ですよ。

ときどき口うるさいですけどね。」

「ふむ……なら良いんじゃない。

そういえば、ルーンはどうなっておるのかの？」

「このキーボード……操縦盤に刻まれたようです」

「ほう、見せてくれんかの。

儂はルーン文字も読めるし、どんな効果かも分かるぞ。

どれどれ……む！？」

どうしたのかしら？

ルーンを見た途端、顔が陰しくなった。

杖を振って……サイレント？

カーテンまで閉めて……このルーンに何が？

「ミス・ヴァリエール・・・」

「は、ハイ！」

「使い魔がとんでもなければ、
ルーンもとんでもないようじゃの」

「このルーンが、何か？」

「ガンダールヴ・・・と書かれておる」

「ガンダールヴ・・・どこかで聞いたような？」

確か・・・ブリミル時代の歴史で、そんな名前の・・・。

「確かにブリミル教は薄れたが、これまで忘れられるとは。
・・・始祖ブリミルの使い魔のルーンじゃ。

ほれ、ガリアのシェフィールド殿を知っておるかの？

彼女はミョズニトニルン・・・神の頭脳じゃ」

「あ、はい。

確か『あらゆるマジックアイテムを操る』でしたよね」

「うむ。

そして、ガンダールヴは『あらゆる武器を操る』じゃ」

「その始祖の使い魔を召喚した私は・・・？」

「大方の予想通り、虚無じゃろうな。」

ヴァリエール家は王家の傍系・・・可能性はあった訳じゃ。自覚が無いようだから言っておくが、

君、王位継承権10位以内の重要人物なんじゃよ？

公爵家の三女とは名ばかり、実態は大公姫と同格じゃよ？」

なんて事・・・まさか本当に虚無だったなんて。

私の爆発魔法が伝説の系統だったとは・・・。

あと、私って凄かったんだ・・・タバサ並の血統じゃない。

「ジョゼフ1世に続いて、2人目の公認虚無か。」

人間を召喚しなかったから、気づかなかったわい」

「そ、そんな・・・私、四六時中監視されるんですか!？」

「い、いや落ち着きなさい。」

彼は隙あらば自殺するから、あんな警戒をされているんじゃない」

良かった・・・本当に良かった・・・。

寝てる時も監視が傍に立ってるなんて事はないらしい。

「でも、ただでさえACで面倒なんだから、覚醒しないよう注意しないと・・・。

水のルビーに近づかないようにしよう」

「・・・始祖ブリミルも泣いておるじゃろうの。

ミョズニトニルンの主は『自殺王』、

ガンダールヴの主は覚醒放棄。

ヴィンダールヴと、名無しの主はどんな人物じゃろうて？」

「自分で言うのも何だけど、面倒な主でしょうね」

「ガリアとトリステインの虚無が居るという事は、アルビオンとロマリアも居ておかしくないのう」

「アルビオンの王家は全員、風系統でしたよね？」

じゃあ、アルビオンに虚無は居ないって事かな。

いや、私みたいな傍系が虚無なんだからアルビオンの傍系？

もしかしてティファニア大公姫・・・まさかね。

「アルビオンについては・・・詮索は無しにしようか。

で、ロマリアの虚無なんじゃが・・・あのキチガイじゃろう」

「・・・ああ、あの狂信者。

やはり、彼が虚無なんでしょうか」

「20年前のダングルテールの事件で、

火のルビーはトリステインが保管しておる。

奴の虚無については心配いらん」

ああ、先生が『勇者』の二つ名を貰った件の。
噂どおり、火のルビー目当ての暗殺未遂だったんだ。
母親を殺そうとする者が虚無だなんて……。

「ヴィットーリオ・セレヴァレの使い魔か。
居ないという話じゃが、ジュリオ助祭枢機卿が怪しいのう」

「孤児院の捨て子が急に助祭枢機卿なんて怪しすぎますよね。
ジュリオ・チェザーレというのも偽名のようにですし」

「ガリア大噴火事件の時、ロマリアに押し寄せた火竜が急に帰って
いったそうじゃ。」

『幻獣を操る使い魔』、ヴィンダールヴじやろうな」

「じゃあ、名無しはティファニア大公姫が……？」

「『記すことさえはばれる』か……どんな化物が出ることやら。
ミス・ロングビルが戻ってきたら警告しよう。
……話はここまでにするかの。」

そうそう、お主の謹慎は今回の功績で解除された、
明日から授業に出るように……明日は虚無の曜日じゃったな」

……何か色々な情報が出て疲れた。
ムーンライトドラゴン、ガンダールヴ、虚無か。

ムーンライトドラゴンについては、近い内に実家に帰ろう。
ガンダールヴは、ACの言ってたバグかしら？
虚無については無視、私は何も聞いていない。

「しかし、ミス・ヴァリエール。

ガンダールヴは『ありとあらゆる武器』を使い熟すんじや。

・・・あの手に持てる武器って限られるじやろ。

柄が1メートル超えの剣とかあったかね？」

「有っても、刃渡り10メートルはありそうですね。

剣自体の重さで真っ二つに折れるんじや？」

ACにとっては長槍ですら、縫針のようなものですよ」

「じゃよねー。

・・・『ありとあらゆる』の意味、辞書で調べてみようかの。

この300年、違う意味で覚えておっただらしいわい」

第13話 異世界竜 ムーンライトドラゴンです（後書き）

ムーンライトドラゴンについてですが、

どこかで裏設定と言われていた存在らしいです。

いつ、何処で見たのかも忘れましたが・・・。

ムーンライトドラゴンについての事を考えていたら、

この作品が生まれた、という訳です。

イヅモはマスターオブアリーナでの、

宇宙開発を行っているという、イヅモマテリアルから取りました。

ムラクモは言わずもがな。

「東方王伝聞紀」

(第四話までのまとめ)

(前書き)

第2章の情報をまとめています。
現在、更新中です。

「東方王伝聞紀」

(第四話までのまとめ)

誤って読まないように、下記記載

この本は、彼の活躍を直接見た人々の話を纏めたものであ

る。

オリヴァン・ド・ロナル

時系列

夏の始まり ダンケ、ハルケギニアに立つ

(1話)

決闘の代行を受ける

(2～4話)

主な組織情報

ハルケギニア

魔法が使える『貴族』が、魔法を使えない『平民』の上に立つ社会で、

5つの大国と1つの小国から成り立つ地方。

元々、平民軽視の貴族至上主義社会で、魔法が社会基板を支えている。

た。

以前はロマリアという宗教国のブリミル教に支配されていたが脱却。19年前に経済制裁を受け、食料や嗜好品の不足どころか、国家の経済破綻、属国の離脱等の未曾有の大危機に追いやられて以来、

ブリミル教の支配を無くし、名前に囚われない実力社会になりつつある。

トリステイン国家

土地面積は大国の中ではもっとも小さく、大小の真ん中である中規模国家。

2章主人公であるエレオノールの在籍するトリステイン魔法学院がある。

他国に比べると虚弱な国で、外交問題には神経をすり減らしている。革新派と保守派が内部争いをしているが、実態は子供の喧嘩。

・ササキ商会

タルブ市にあり、外敵からの防衛能力は異常の域。商業はとても優秀なのだが、何故か軍事関係には手を出さない。

・イツモ

ササキ商会にある、ロバ・アル・カリイエとの交流を図る機関。ロバ・アル・カリイエとの接触に成功したようだが、

魔王という存在の露見に危機を持ち、情報を隠蔽していた。

ロバ・アル・カリイエ

ハルケギニアの東にある大地の総称。

ハルケギニアとは、既に千年以上も交流が途絶えている。魔王と呼ばれる強力な者が居て、超広域殲滅魔法を使う。

・ニホン

ダンケが治めていた平民だけの国家。

ロバ・アル・カリイエの更に東にある。

数々の魔王に襲われ続けるという国。

ハルケギニアをドイツと呼んでいる。

・アメリカ

ニホンの更に1万リーグ以上も海を超えた先にある大陸。

47もの国を支配したアメリカ大魔王にちなんだ名かと思われる。

ニホンへの1万リーグ超えという、超遠距離遠征を行い、

『カク魔法』でリーグ単位を滅ぼすという神話のような戦力を持つ。

主な人物情報

ダンケ（本名不明）

エレオノールに召喚に応じたニホンの旧王。

高貴な身分ながらエレオノールの従者を平然と受ける。

身分は捨てたが、王の威厳と存在感は隠しきれない。

黒尽くめのニホン服を好んで着用している。

見た目の威圧感とは裏腹に、慈愛ある人物。

無手にもかからわずメイジを軽々とあしらう程の武人で、物事や痛みに動じない、不屈の精神力を持つ。
更に知力に優れ、カガクという技法を使用する。

エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・
ド・ラ・ヴァリエール

トリステイン魔法学院の2年生。
キツイ性格のせいか、学院内の友人は少ない。

ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド

魔法学院の1年生。
革新派。

ダンケに組み手で赤子のようにあしらわれ、彼を認める。
エレオノールからはジャンと呼ばれている。

ギトー

魔法学院の3年生。
保守派。

ダンケとの決闘で惨敗した。

ジャン・イーヴァルディ・ド・コルベール

トリステイン魔法学院の名誉教師。

知的好奇心溢れる31才児。

ダンケ召喚に立ち会った人物。

オールドオスマン

トリステイン魔法学院の学院長。

ダンケの素性を知り、保護を図った。

第一話 第一印象?とにかく、異質だったわね。(前書き)

A Cはしばらく出ません、御免なさい。

第一話 第一印象?とにかく、異質だったわね。

「・・・は?」

「に、人間?」

「・・・まさか?」

「平民か?」

「変な服・・・」

今、この瞬間程、驚いた事は無いだろう。

使い魔召喚の儀式で、

皆はドラゴンやらを召喚してるのに・・・。

「これは・・・どうしましょうか?」

「そう、ですね。」

やり直しでしょう」

「ここ・・・は?」

呼び出してしまった人間が周囲を眺めている。

どこの人間だろうか?

黒尽くめの服装だなんて、平民でも貴族でも聞かない。
少なくともトリスティンの服のセンスでは無いだろう。

もしかして・・・外交問題？

「ま・・・不味いわ。」

異国の者を召喚だなんて・・・」

「ミ、ミス・ヴァリエール！

しっかりしなさい！

ミス・・・ああ！？」

お母様に怒られる・・・。

ただでさえトリステインは弱小なのに、外交問題なんて・・・。

あら・・・目の前が傾いてる・・・？

黒ずくめの・・・男が・・・大きく見えて・・・きた？

「あら？

ミス・ヴァリエール、気が付きましたか？」

急に白衣の人に話しかけられた。

・・・何で保険医の先生がここに？

「・・・あら？

ここ・・・保健室？」

「ええ、なんでも召喚の儀式で倒れたようです。
意識はハッキリしていますか？」

「あ、はい。」

・・・夢？

ううん・・・現実か」

頭が痛い・・・。

さっきのが夢だったらどんなに良かった事か。
思わず頭を抱えてしまう。

「頭が痛むのですか？」

倒れた時は、人が支えてくれたらしく、
頭は打っていないハズですが・・・」

「・・・ちよつと考える事があっただけです。」

ミスタ・コルベールに、お詫びとお礼を言っておかないと」

「倒れた時に貴女を介抱したのは、召喚した男性だったそうですよ。
何でも、ミスタ・コルベールが支える前に受け止めたとか」

・・・おかしいわね？

ミスタは私の隣にいたのに、何で離れてたあの男が？

「・・・召喚した、彼は？」

「学院長室で身元照会を行っているハズです」

・ ・ ・

「ヴァリエールです」

『起きたようじゃの、入りなさい』

体調に問題ないと診断されて、私は学院長室に呼ばれた。
この中にはさっきの男性がいるのだろうか？

「失礼します・・・」

「うむ、無事でなによりじゃ」

「倒れた時は驚きましたぞ？」

「・・・」

学院長室にいるのは、部屋の主のオールドオスマン。

召喚の儀の監督をしていたミスタ・コルベール。

そして・・・私が召喚した人間・・・。

彼から凄い威圧感を感じる・・・。

鋭い眼光で、深い闇を圧縮したような黒い瞳だ。

・・・私を一瞥した後、視線を窓に移した。

「ミス・・・その、難航しておるんじや」

「分かった事は、彼がトリスティンはおろか、

ハルケギニアの出身ですら無い・・・という事だけです」

「・・・」

「え・・・？

ハルケギニアじゃないって、

まさか、ロバ・アル・カリイエ？」

ある意味、助かったのかもしれない。

ロバ・アル・カリイエとは千年程、交流が無いのだから。

しかし・・・逆に考えれば、対応すら出来ないという事だ。

「ロバ・アル・カリイエとの外交を目指す機関がありますが・・・」

「確か『イズモ』じゃったなあ。

しかし、ソレは難航しとるという話じゃ。

エルフ側がまともに取り合ってくれないようじゃの」

「・・・出雲？」

男が口を開いた。

思ったよりも、その、声に存在感がある。

カリスマ性というやつだろうか？

国王のような鶴の一声に、私達3人は自然と彼に注目した。

「う、うむ・・・ミスタ、どうしたかの？」

「・・・聞いた事のある・・・名前だ」

「イヅモは、ロバ・アル・カリイエと接触出来ていたのでしょいか？」

オールドオスマンも彼の存在感に押されて、ミスタと呼んでいた。

ミスタ・コルベールが推理は・・・成程。

聞いた事のある名前という事は、そういう事だろう。

・・・こんな時、自分の頭が怨めしい。

ヴァリエール家の長女として英才教育を受けたハズなのに、不測の事態が起きると頭の回転が止まってしまう。

もっと、公爵家の貴族として堂々としないと。

「そういう事かの、ミスタ？」

「・・・」

「ふむ、黙るか。」

コルベール君の予想通りかもしれんの。
秘密裏に接触出来ておるのかもしれない」

確か、イズモはササキ商会の機関だ。

あの商会は高度な技術を出し惜しりする。

ロバ・アル・カリイエは、嘘をつかなければならない程の何かがある？

「ミスタ！」

ロバ・アル・カリイエの話を聞かせて貰えませんか！？」

「・・・このコツパゲは。」

また、悪い癖が出た様じゃな。

スマンが放っておいてくれんかの、ミスタ」

「誰がコツパ」「ミスタ・・・では、ない」

男がミスタと呼ばれるのを嫌がった。

この男は、平民なの？

この存在感といい、堂々とした態度といい、

これがロバ・アル・カリイエの平民？

ロバ・アル・カリイエはどんな所なのかしら？

「む、すまんのう。
では・・・はて？」

「そういえば、名を聞いてませんでしたな。
・・・いや、本当に申し訳ない」

「既に・・・言った」

「・・・そ、そうじゃったな！？
いやあ、スマン！」

聞いてないと言ってるのに、既に言った？
・・・どういう事？

あ、ロバ・アル・カリイエの名前はこっちでは変な名前なのかも？
それで2人とも聞き漏らしたのかもしれない。
彼は「二度は言わない」と言わんばかりの態度で、窓の外を見ている。

「えっと・・・」

「ハルケギニア・・・あなたの方では、ドイツと呼ぶのでしたな。
ここでは名前と気付かなかったのです。
申し訳ない・・・」

幾ら何でも名前を聞き逃すのは失態だ。
失礼なんてものでは済まないだろう。
気不味い・・・どう切り出せば？

「名を・・・」

え？

彼がこっちを見て、何か言おうとしたわ。

「名を・・・教えてほしい」

「・・・わ、私？」

ゆっくり・・・彼はゆっくりと、頷く。

さも、当然と言わんばかりに。

そういえば、彼は私が召喚したんだった。

という事は、彼は私の召喚に応じたという事。

名前の交換ぐらい当然だ。

その彼が、さも当然な態度なのに・・・私は何て体たらくなのだろう？

喉がカラカラする・・・、落ち着いて、落ち着いて・・・。

「エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール」

何とか名乗れた・・・。

名前の長さは御先祖様から継いだ誇りあるものだが、

要らないと思った事は初めてだ。

「・・・ダンケ」

・・・ダンケ、彼の名前？

何だか在り来りな名前だ。

こんな名前を2人は聞き逃したというの？

「ダンケが、名前？」

「そ、そうじゃった、ダンケじゃったな？」

「し、失礼しました、ダンケ君？」

彼は・・・ダンケは、構わないと首を振った。
おかしすぎる・・・。

ハルケギニアで普通にある名前だなんて・・・偽名かしら？

「で・・・じゃ。」

ダンケ君、君はこれからどうするかの？

ミス・ヴァリエールの使い魔をするのか？」

「オールドオスマン？

彼は人間ですぞ？」

「とは言つてもう。

ロバ・アル・カリイエに帰れるのか分からん。

王宮にコネのある農ですら、

ロバ・アル・カリイエとの接触を知らなんだ」

「・・・国王ですら、ご存じないと？」

「うむ・・・。

彼の存在が知れると、不味い事になるかもしれん。

ササキ商会がひた隠しにする程なんじゃ。」

ササキ商会は優秀なのだが、兵器関係については力がない。
でも、タルブ市の防衛能力は尋常ではない。

ロマリアが出兵しても、あの守護者に薙ぎ伏せられたとか。
つまり、軍事関係を発展させるつもりは無いのだろう。

ロバ・アル・カリイエには・・・何があるの？

「では、使い魔として・・・？」

「うむ、表向きは護衛を雇ったという事で・・・。

召喚の現場はかなり目撃されとるが、時間稼ぎにはなろう。

ミス・ヴァリエール、それで良いかの」

「は、はい・・・分かりました」

・ ・ ・

「・・・はあ」

コンタクト・サーヴァントで出たルーンは、
体を硬くする・・・『硬化』という効果だった。

オールドオスマンが解読したのだから、間違いないだろう。
私は土メイジだから効果もおかしくない。

でも・・・キスを・・・。

「~~~~ッ!」

今まで殿方に触れた事なんて数える程しかないのに、
いきなりキスだなんて!!

「ああ・・・恥ずかしかった」

ダンケは平然としてたけど・・・。

「平然・・・か。

ルーンを刻むのは激痛だって言うのに」

ミスタ・コルベールが驚いていたっけ。

「成童ですら、痛がるのに・・・」とか言ってたわね。
左腕のここって痛くないのかしら？
・・・。

「・・・痛い」

インクの抜けた筆を押し付けてみたが、結構痛い。
刻印となるとこんなものじゃないだろう。

「ロバ・アル・カリイエ・・・か」

さっきまでダンケに聞いていた話を思い出す。
確か・・・。

「ヒデヨシ・・・ノブナガ・・・イエヤス。
様々な魔王に襲われ続けた国。
想像も付かないわ」

ダンケも口数が少なかった。

遠い目をしながら言っていたわね。

・・・過酷だったでしょうに。

「アメリカという47の国を支配する、脅威の魔王。

・・・海の遥か彼方からの侵攻と戦ったニホン」

1万リーグ以上も遠征出来るなんて・・・。

ササキ商会が隠すのも納得いく。

この事実が知れたら、ハルケギニアの軍人はショック死ものだ。

そんな魔王がハルケギニアの外にいるゴロゴロ生まれるなんて考えたくない。

「有り得ない！」と、叫んでしまったものだ。

「でも、ダンケは嘘をついてないのよね。

アメリカ大魔王についてはスラスラと答えたし」

その戦いで、ニホンというダンケの国は壊滅的な被害を受けた。

そして、今は侵略を行わないと、各国に表明し、守り続けている。

「カク魔法・・・か」

ベッドに横になりながら考える。

今頃、ダンケも空室の一つで横になってるだろうか？

「半径4リーグを一瞬で焼け野原にする爆発……。
ダンケが争いを嘆いたのも当然でしょうね」

そして、ダンケは召喚の門を通った。
……ソーリという部下に国を任せて。

「話の擦り合わせを見ると、そうなるのよね。
……ダンケがニホンの王だったって事に」

ダンケがわざと文法をメチャクチャにしたのは、
高貴な生まれを知られたくなかったから……か。

「国王……そんな人呼び出したなんて。
いくら王位を捨てたからって……。
幾ら何でも気づかないわよ」

ダンケの国は、平民だけの国らしい。
では、どうやってアメリカ大魔王と戦ったのか？
半径4リーグを滅ぼす大魔王を相手に。

「ダンケは国王として、最前線で戦ったらしいけど……。
疑問は尽きないわね……あふ……。」

カガクって何かしら？」

ダンケに、そんな力があるのだろうか？

確かにあの眼光・・・歴戦の猛者、って感じだけど。

でも、いくら強くても・・・平民・・・よ？

メイジ、殺しで・・・も・・・

そんな疑問を浮かべながら、私は眠りにつく。

翌日、その答えを知る事になるだなんて、誰が想像できただろうか・
・。

第一話 第一印象？とにかく、異質だったわね。（後書き）

2章は、「零の使い魔」のダンケと周囲の物語です。

ネクオロさんには「自由にやっちゃて」という言葉を頂きました。
ダンケの視点はありません。

ちょっといじって、召喚の儀を2年進級の試験ではないようにしています。

11年前はそうではなかったという事で・・・。

第二話 寝ぐせ直しのソレ、実は私が広めたの。

「・・・朝？」

何時の間に寝ていたのだろう？
確か・・・あ、そうだった。

「ダンケの事で・・・。
夢じゃなかったのね」

夢だったらどんなに良かった事か。
東方の王を召喚するだなんて・・・。

「何時かしら・・・え？」

8時半！？

朝食どころか講義始まるわよ！？

「き、着替え！！」

大慌てで服を着替える、時間がない。
教材は・・・昨日の午前中のままだ。

「えっと、忘れ物なし！」

ドアを開ける時間すら惜しい。
それに気付いて、走り始めながら『念力』で開ける。

「よし、間にあっ！」

勢いが付き過ぎた。

このままドアを出ても向かい部屋のドアにぶつかるだろう。
でも、足の勢いはすぐには止まら・・・っ!?

「・・・」

「・・・ダ、 Danke?」

ドアの前に立っていた Danke に受け止められた。
・・・何でここに?

「・・・」

「ご、御免なさい」

「・・・髪が」

「え、髪？」

「・・・あ」

髪が跳ねていた。

気づかないまま出席したら笑い者だったわね。

でも、髪をセットする時間なんて無い。

しかもこんなに酷く跳ねてるとなると時間もかかる。

「あと10分しかないのに・・・遅刻決定ね」

「湯は・・・あるか？」

「え？」

お湯なら『発火』で・・・」

ダンケはお湯を求めて来たの？

・・・食堂で貰えばいいじゃない？

そんな事を考えていると、部屋に連れ戻された。

「魔法を・・・」

「え、ええ」

もう、遅刻は確定だ。
やるせない・・・。

「これで、よろしいかしら？」

「・・・」

発火で温めたグラスの水だけど・・・、
ダンケは首を横に振る。
何がいけないんだろう？

「もう少し・・・熱くしてくれ」

「これ以上だと飲めない、かと？」

「・・・飲むのでは、ない」

じゃあ、何に使うんだろう？
発火を強めて水を更に熱する。
・・・もう、手で持つのも熱そうね。

「これでいい・・・。

布は、あるか？」

「・・・」

ダンケの奇行について行けない・・・。
熱い湯を布に染み込ませてどうするのだろうか？

「・・・」

「あっ・・・」

ダンケは手渡した布を湯につけ、雑巾のように絞った。
かなり熱いハズなのに・・・ほら、手が赤くなってる。

「だ、大丈夫ですか!？」

「動くな」

「?!」

びっくりした・・・。

平民だけとはいえ、国王だけあるわね。
体が動かなくなったわよ。

「熱いぞ・・・」

「え・・・あつ」

湯で温まった布を髪に押し当てられた。
・・・確かにちよつと熱いわね。

「・・・」

「・・・あの、ダンケ？
一体、何を？」

布を離れたダンケに非難の目を向ける。
一体、何がしたいのだろ・・・あら？

「・・・髪が、直ってる？」

彼が布を当てたのは、髪が跳ねていた所だった。
さっきまで、これでもかってぐらい跳ねてたのに？

「何・・・これ、魔法？」

「・・・科学だ」

カガク？

昨日言っていた、大魔王と戦う為の力の事？
大魔王を倒す力で、何で髪が？

「時間は・・・いいのか？」

「え、あ、そうだった！

これなら間に合いそう！」

まだ、8分残っている。

これならフライで移動すれば間に合うわ！

「でも・・・あなたは どうしてここに？」

「・・・」

私の疑問に腕を捲り、ルーンを見せながら言った。

「使い魔・・・だろう？」

いくら現王じゃないからって、異国の娘に仕えるの？
・・・気を使うのは、迷惑だろうか？

喋り方ぐらいは、主のように振舞おう。

・ ・ ・

「間に合った・・・」

朝食抜きなのはキツイけど・・・我慢ね。
ダンは歩いて来てるから、もう少しかかるかしら？

「なあ、今朝の騒ぎって何だったんだ？」

「知らないの？」

「え、何かあったのか？」

後ろの男子達が騒いでいる。

もうすぐ先生が来るから静かにしなさいよ。

「1年のワルド家のアイツ、知ってる？」

「あー、見た」

「えっと、誰？」

ワルド・・・ワルド？

もしかして、ウチの隣のワルド家？

「でさ・・・」

「あ、思い出した！ラインの新入生！」

「そうそう、そのワルドだよ」

そういえば、そうだったわね。

お母様が可愛がって鍛えてたっけ。

魔法が強い家系なら分かるけど、普通は入学時点でラインなんて稀よ？

ジャンは将来、どう化けるのかしら？

「で、あの老け顔がどうかしたの？」

「老け・・・君ねえ」

「まだドットだから妬んでるんだよ、ほっとけ」

あー、うん。

確かに歳相応に見えない。

入学式で3年生に間違えられてたわね。

「彼が朝練してるの知ってるかい？」

「ああ、知ってる」

「そんな事してたのか？」

知らなかったわ。

お母様から、毎日やるよう言われてるのかしら？

「昨日、ミス・ヴァリエールの召喚した・・・あ」

「・・・あ」

「お、おはようございます・・・」

「・・・おはよう」

見てるのに気付かれた。

ジャンの朝練とダンケに何があったのかしら？

「何があったか聞かせてくれるかしら？」

「あ・・・はい」

「俺、あっち行くわ」

「うん、後から話聞くから」

性格がキツクて悪かったわね！

あからさまに避けるなんて・・・あの2人、覚えてなさいよ。

「では、お聞かせ願えるかしらミスタ？」

「ええ、実はですね・・・」

革新派のジャンと保守派のギトーが決闘したらしい。
確か、ジャンは革新派の新星として注目されていたわね。

「・・・ダンケがジャンの代わりに!？」

「はい・・・」

あの馬鹿、何を考えてるの!？
いくら王だからって平民なのよ!
・・・いや、王という事すら知らないハズ。
一体、何故ジャンがダンケを？

「僕もサッパリでした。
その場の空気が止まりましたよ」

「当然よ!
まあ、戦ってないから良いけど。
もし戦ったら・・・」

大怪我してたでしょうね。
最悪、水の秘薬を使わないと治せない怪我をしてたわ。

「戦いましたよ？」

「・・・は？」

彼は「何を言ってるのか？」という顔をしている。

私は「何を言ってるの？」という顔をしているだろう。
二人揃って訳がわからない・・・。

「えっと・・・ダンケが戦ったの？」

「はい、勝負にすらなりませんでした」

・・・まあ、当然よね。

メイジ殺しは不意打ちが前提なのに、
向い合っただけの勝負なんて。

怪我をしてなかったのは、すぐ降参したからか。

「まあ、無事でなによりね。

ダンケも降参して正解だわ」

「勝ちましたよ？」

「・・・は？」

彼は「何を言ってるのか？」という顔をしている。

私は「何を言ってるの？」という顔をしているだろう。
二人揃って……って、二度目よコレ。

「ダンケが……勝った？」

平民が、メイジと向い合って？」

「ええ、勝負なんてものじゃありませんでした。

彼は一体、何者なのですか？」

平民と言っていましたか……」

ダンケが……勝った？」

もしかして、カガクという力で？」

「一体、どうやって勝ったの？」

「それが「さあ、皆さん！

席についてお静かに！」

もう……いい所で。

ミスタ・コルベールも間が悪い。

「皆さん、昨日の使い魔召喚の儀式はどうでしたか？
自分の使い魔と仲良く出来そうですかな？」

あ、そういえば教室が使い魔だらけね。
隅にいるから気づかなかったわ。

「使い魔とは一生を共にするパートナーです。
高位幻獣でないからと、無碍にはいきません。
オールドオスマンの使い魔はネズミです。
しかし、彼は使い魔を軽々しく扱いはしないでしょう。
あのネズミは300年近くも共に歩んだ存在なのです」

視覚共有して女性のスカートを覗くんだものね。
それはそれは、重宝するでしょう。
制服のスカートを短くする計画を練ってるという噂を聞いたわね。
・・・せめて私の卒業までは持って頂戴。

「自分の半身と思って接して下さい。
・・・おや？」

何かしら？
教室中を見渡して・・・何か探してる？

「ミス・ヴァリエール？
ダンケ殿がいませんが・・・」

「彼なら遅れて「ガラッ」・・・来ました」

「遅れた・・・か」

「いやいや、とんでもない！

少しぐらい休んでも良いでしょう。

朝から良いものを見させてもらいました」

・・・良いもの？

勝っただけじゃなかった訳？

「では、ミス・ヴァリエールの隣にどうぞ」

「ああ・・・」

ダンケがこっちに近づいてくる。

そして・・・足が滑った？

風が・・・これってエア・ハンマー！？

「あなたは・・・何をしているのですかな？」

「あ・・・」

あいつが撃ったみたい、杖を握ってるわ。

ミスタ・コルベールもキツイ気迫を出しながら睨んでる。
それより、ダンケは？

「・・・」

あの生徒を一瞥しただけで、こっちに来てる。
ダンケは、エア・ハンマーに気付いて避けた・・・？
足が「滑った」んじゃないくて「滑らせた」？

「不意打ちのエア・ハンマーを避けれる者は、そういません。
傷付けるつもりだった・・・そうですね？」

「・・・うう」

講堂内で攻撃魔法を使うなんて・・・。
確か、保守派の、えっと・・・名前が思い出せないわ。

「ダンケ、大丈夫！？
怪我は無い？」

「・・・何がだ？」

たった今、攻撃をされたのに、
何でそんな平然としてられるの！？
しかも、本当に何もなかったような顔をして！

「その・・・今・・・」

それに・・・見てなかったし」

「・・・？。」

・・・見るまでもない」

す・・・凄い。

見えないと避けない攻撃を・・・。

むしろ、見て避ける方がおかしいと言わんばかりに。

「・・・君の家は保守派でしたな？

それが、中立のヴァリエール家の使い魔に攻撃ですか」

「あ！・・・ああああ」

そう言えば・・・そうね。

ウチは革新派と親しいけど、中立を貫いてるわよ？

・・・うん、一応中立よね？

「で、でも、使い魔は革新派の味方をした！」

「彼は巻き込まれただけに過ぎません。

決闘が終わった後に、

初めて派閥の存在を知ったのですからな」

「そ・・・そんなバカな」

「どちらにせよ、今の行いは見過ごせません。
反省室に来てもらいましょう。

更に、追って沙汰があるでしょう」

どうやら、本当に知らなかったらしい。

力が抜けたのか、杖を落として呆然としてるわ。
学び舎で不意打ちとなると、彼の家は保守派から見放されて孤立。
何処から外されるなんて、貴族には致命傷ね。

「この状況では、授業どころではありません。
よって自習とします」

ミスタ・コルベールが彼を『拘束』で縛って出て行く。
何時もは大人しいけど、こういう時は凄いわね。
以前は「炎蛇」の二つ名だったっけ？
そう考えると、相手は蛇に睨まれた蛙か。

「ダンケ。

朝に何があったのか、聞かせてくれる？」

「・・・ああ」

強いのは分かったけど、

一体どうしてジャンが・・・？

まあ、聞いていれば分かる事ね。

ジャンに説教しに行くのは、その後で良いわ。

第二話 寝ぐせ直しのソレ、実は私が広めたの。(後書き)

よくよく考えたら、ワルドも同年代なんですよ。

ギトーの在校についてはオリジナルです。

顔すら知らないから年齢分らない・・・。

この11年前の事で書きたかった事の1つ。

「たった30年でよく意識改革が成功した」という謎です。

この時代はまだ派閥間での争いがあり、不安定です。

※ 1／20 エレオノールのワルドの呼びを「ジャン」に変更

細々とした修正

第三話 その時かい？死んだかと思ったださ。

「280、281、282、283・・・」

き、キツイ。

でも、サボったら、カリヌ様に、どんな目に遭うか。

「297、298、299・・・300！
はぁ・・・はぁ・・・」

ふ、腹筋終わり。

朝のノルマは、全て終わった。

「・・・おや？」

まだ、こんな時間？」

最初の頃は2時間はかかったのに・・・。
知らないうちに慣れてきたんだろうか。

「・・・今度カリヌ様に会ったら、
ノルマ、倍ぐらいに増やされるだろうな」

何でこんな事に・・・。

自領の隣がヴァリエール領だった事？

それとも当家が革新派だった事？

いや、こんな時代に生まれた事だろう。

「『せめて卒業までには身を守れるようになりなさい』・・・か。

このままだと卒業する頃には父上を超えそうだ」

確かに今は乱世だが・・・。

20年程前にあったという経済制裁で、トリステインは3つに割れた。

復興の流れを加速させ、更に豊かさを目指す革新派。

以前の貴族社会を維持しようとする保守派。

そしてどちらにも付かない、大多数の中立・・・。

「ウチが中立だったら？」

ゲルマニアの国境沿いが領地だったので、父上は力を求めている。
ヴァリエールのような力があれば、躍起になる必要はないんだが、
残念ながら、ウチはこれといった売りが無い。

仮想敵のゲルマニアに攻めこまれれば危険だろう。

経済制裁の被害をもっとも受けたのはトリステインだ。

立ち直りが遅い以上、ゲルマニアから攻められる危険は大きい。

「強くないと・・・」

父上母上、共にトライアングル。

僕がスクウェアになるのは、努力次第では可能だろう。
だから家の皆は僕に期待している。

「当家の領主は風のスクウェアです・・・なんてね」

そう言えるようになれば・・・大きな売り文句だ。

ヴァリエール領の隣もスクウェアだったなら、

ゲルマニアが攻めて来る事はないだろう。

風メイジはスクウェアになると、一気に化けるのだから。

「具体的には『偏在』の・・・ん？」

風の流れに何かが当たった？

でも、足音等は聞こえていない・・・。

「魔力も感じないし・・・、
こんな場所に平民が？」

特に殺気も無いが、警戒に越した事はない。

「・・・」

黒い服、黒い髪、黒い眼・・・。

黒尽くめの格好をしているな。

格好からすると暗殺者だが、夜中以外は目立ちそうだ。
そして、何だこの威圧感は？

「・・・」

「・・・ふむ」

興味が湧いてきた。

何時までも見合っていないで、話をしよう。

「・・・」

「やあ、君。

朝から早いね。

こんな所でどうしたんだい？」

平民と話すには壁を作らず、気楽に話しかける。

保守派が平民を見下しているのに対し、革新派は平民を横から見ている。

平民を大切にするだけで、領地は自然と発展するものだ。保守派はそれが出来ないので、消滅も時間の問題だろう。

「迷ってな・・・」

「道に・・・かい？」

ここは魔法学院の裏。

学院の者でもない限り、ここまで迷えないけどね？」

「・・・護衛だ」

「護衛・・・誰の？」

どうやら彼は、エレオノール姉さんの護衛らしい。

学院内での従者は禁じられているんだが・・・。

何か、事件でもあったのだろうか？

「護衛か。」

ふむ・・・僕は貴族だが剣術も嗜んでいてね。

どうだろう、組み手をしてみないかい？」

これでも烈風カリンの弟子。

魔法を使わずともある程度は戦える。

杖もレイピアのような剣杖にしているのだ。

・・・それで、彼の武器は？

「君・・・武器は持って無いのかい？」

「俺には・・・必要ない」

「武器がいらない？」

武器を使わない護衛なんて聞いた事も無い。
きな臭いな・・・。

彼は本当にエレオノール姉さんの護衛なのか？

「・・・本当に護衛なのか？」

「・・・」

今、一瞬だが目を逸らした。

この男、嘘をついている？

奇抜な服装、身元の偽装。

・・・このまま学院に入らせて良いのか？

「・・・いや、待った。

護衛というのなら、戦えるのだろうか？

僕は剣術を嗜んでいてね。

手合わせ願おうか」

「・・・必要ない」

「そう言わずに、頼むよ」

我ながら頭の悪さに泣けてくる。

こんな事にならないよう勉強すべきだった。

しかし、これで彼が正体を明かすなら解決する。

「では、行くよ」

「面白くない・・・冗談だ」

僕が構えたというのに、何の反応も無い。

ポケットに手を入れたままとは、隙だらけだ。

「・・・ッ!？」

いや、違う!

全てが隙だ!

隙しかない!?

何処を攻めれば良いのか分からない!

「・・・」

カリーヌ様は天井の見えない強さだった。
しかし、彼は強さの方向性すら見えない。
上ではない、下でもない、互角で足りない。
得体が知れない・・・。
カリーヌ様は「恐い」だったが、彼は「怖い」。

「・・・」

「・・・」

状況を変えようと思ったが、彼は動こうとしない。
隙を、作ってみるか？

「・・・」

・・・隙を作っても反応しない？
何故だ？

相討ち覚悟の隙なんだぞ？

彼は、この隙に気づかないのか？

「・・・遊ぶな」

「うつ・・・」

いや、見抜かれていた。
僕の間は、彼にとって侮辱だったらしい。
注意されただけなのに、なんて覇気だ。
ドラゴンの雄叫びの方が、まだ易しい。

「・・・」

「・・・フゥ」

彼が溜め息をつき、こっちに歩み寄ってくる。
・・・う、動けない。
ゆっくり歩いてくるのが、更に恐怖感を増す。

「・・・！」

「ッ!？」

幽鬼のように揺らいでいた彼が、一瞬で飛び掛ってきた!？
懐に・・・反応出来ない!
今更、時がゆっくりと流れてだしている!
でも、彼の動きを見る事しか出来ない!

「ぐっ！」

飛び込んでの体当たり！？
ただのタツクルなのに、なんて威力だ！
・・・このままでは彼に押さえ込まれる！
何とか・・・肘を抑えこまれた！？
このまま倒れては・・・関節が！

「あっ・・・がああ！」

右肘にまるで雷が落ちたような痺れが起きる。
一瞬の痛みの後に、感覚が消え失せた。
・・・利き腕が潰された？
クソっ！

「ウイ、ぐっ！」

「・・・」

ウインドが間に合わなかった！
喉が、喉を殴られた！？
声が出ない！体も押さえ込まれて動けない！
このまま、やられる！？

「・・・ッ！」

「・・・済まない」

え・・・彼が謝罪？

そのまま喉に掛けた手を緩めて、起き上がった？

「・・・大丈夫か？」

「ゴホッ、ゴホッ・・・あ、ああ？」

彼に手を引かれ、僕も起き上がる。

何故、彼は止めた？

「遊びで怪我を・・・」

「・・・そ、そうだった」

そういえば、これは手合わせだ。

何時の間に僕は殺し合いと思っていたんだ・・・。

「ただ・・・止めておけ。

遊びでするものでは・・・ない」

「・・・そうだね」

彼に、僕が受けた恐怖は分からないだろう。
彼は遊びのつもりだが、僕は必死だった。
それなのに、子供の遊び扱いされるとは。

「彼女の護衛というのは、本当のようだね。
まったく敵わなかったよ」

「・・・偶然だ」

次は分からないと？

しかし、彼に勝てる気はしないんだが。

「僕は、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。
君の名前を覚えてもらえないか？」

「・・・ダンケ、そう呼ばれている」

ダンケか。

本名は有名なメイジ殺しなのだろうか。
存在すら知れない程の、超一流かもしれない。
エレオノール姉さんの護衛というのも納得いく。

「君は、凄いね・・・」

「・・・いや」

ダンケは、首を横に振るだけ。

天狗にならない事も、強さの秘訣か。

僕は彼ぐらいに強くなれるのだろうか？

・・・いや、強くならなければいけない。

「やあ、ミスタ・ワールド。

朝から平民と会話とは熱心だね」

「・・・ミスタ・ギトー」

面倒な奴に出会った。

「流石、革新派の新星と言った所かな？

訓練しているという噂を聞いたが、

まさか平民と接する訓練とはな！」

「・・・偶然、道に迷った彼を送っていただけです」

この男、癪に障る。

保守派のリーダー以前にだ。

ダンケへの完敗は認めるが、コイツには知られたくない。

「ふん。」

そんな事は貴族ではなく、平民同士にやらせておけ」

「道に迷った民を導くのも、貴族の勤めですよ」

「そんな事、聞いた事もない。」

始祖ブリミルも呆れておられるだろうな」

「おや、ブリミル教典の原本をご存知ないのですか？

『貴族たる物、民を大切にせよ』と書かれているのですよ」

ロマリアが崩壊した際、ブリミル教の裏が流出した。

6000年分の校正資料は当初、物議を呼んだらしい。

「だから改正されていったのだよ」

「いいえ、改竄ですよ」

数百年に一度の間隔で、

ブリミル教に都合が良いように書き換えられていたのだ。

数十回も書き換えられたせいで、もはや別物になっている。

「原本の逆にする事が改正と言いますか？

始祖ではなく、ブリミル教を信じるのですか？」

「ぐ・・・」

改竄前の資料を巡って、改訂か原本かで意見が対立した。
それが現在の革新派と保守派の成り立ちである。

「始祖ブリミルは呆れるどころか、
お嘆きになられているでしょうね」

「革新派は偽りの信仰だろうが！
自分の都合の良い所だけ強調するな！」

まあ確かに、偽りの信仰だろう。
当時こそ信仰故の行動だったらしいが、
今は、原本を盾に領事を行っているのだから。
保守派だって、自分の懐の為だけの為に保守派を名乗っている。

「貴様はゲルマニア人と同じだ！
せいぜい下賤な者同士、いがみ合っている！」

「連中の力に震えているだけの者が何を言う！
内側で怠けている、口だけの者が！」

革新派の多くは国境沿いにある家全てだ。
・・・ヴァリエール家は王家との繋がり故に中立を貫いているが。
保守派と比べると、数は多くないものの個体は大きい。

「・・・貴様！」

「フン！」

本当の事を言っただけだ。

面倒事を押し付けて、権利だけを叫ぶ奴に何が出来る！

「決闘だ！」

ヴェストリの広場に来い！」

「良いでしょう！」

せいぜい恥を掻かないよう気をつけてください」

ギトーは肩を怒らせながらフライで飛んで行った。

「では、僕は先に行くよ。

ああ、あっちに行けば正門だから」

「・・・大丈夫なのか？」

ダンケが心配しているが・・・大丈夫だろう。

奴は3年のトライアングル。

地力は劣るが、僕には剣術もある。

接近戦では僕が有利だ。

「大丈夫だよ。」

では、僕はこれで失礼・・・痛ッ！」

フライの為に腕を振ろうとした所で、腕が上がらない。
さっきの事で、利き手を怪我したんだった。

「・・・」

「いや、君は悪くないよ。」

僕が迂闊だっただけさ・・・」

参ったな・・・どうしよう？

これではまともな勝負すら・・・。

しかし、逃げる訳にはいかない。

「保健室・・・」

「え？」

結構、痛む。

水の秘薬でも・・・明後日辺りの完治かな？

「いや、時間がない。

・・・本当に降参するか？」

「俺が・・・行こう」

ダンケが？

いや、しかし決闘の代理が平民なんて聞いたこともない。
それよりも、反則級の代理人なんだが・・・。

「怪我の原因だ・・・。

代わりに、謝る」

「いや、謝っては・・・？」

平民の言う、お礼参りというやつか？

「よくも今まで！」という意味だったハズだが？

・・・まあ、いい。

「分かった、頼む。

それに、『革新派は平民と支えあう』とでも言えば良いだろう？」

「・・・休んでいろ」

まあ、彼なら余裕で勝てるだろう。

自分の目で見れないのが残念だ・・・。

「そうさせてもらうよ。」

・・・決闘と言ってもただの喧嘩だ。
大きな怪我はさせないようにね」

「奴に言え・・・」

成程、確かにギトーの方が心配だ。
乱心して特攻したら、手加減し難いだろう。

「まあ、大騒ぎにならない程度に頼む」

「善処は・・・しよう」

第三話 その時かい？死んだかと思ったださ。（後書き）

第2章は1年後のガリア大噴火までなのですが、3話の時点で、まだ2日目です。巻いていかないと・・・。

革新派やら保守派やらと物騒な話になってますが、大部分が中立とあるように、彼等は少数です。決して内乱等の騒ぎには発展しません。

革新派は、危険な領地から平民が逃げるのを防ぐ為のパフォーマンス。

領主ではない彼等は、その実態に気付いていません。個人視点の弊害で文章に出来ないので、ここに記しておきます。

第四話 ニホンは良い国なのでしょうな

今日は起きた時から憂鬱だった。

昨夜にミス・ヴァリエールが飛んで来たのも頷ける。

「ロバ・アル・カリイエの、更に東があるとは」

ロバ・アル・カリイエは永遠に地続きと聞いていたが、
実際は違うらしい。

「大魔王・・・か」

それを聞いた時の私は、知的意欲に燃え上がっていただろう。
もつとも、すぐに冷水を浴びせられたが・・・。

ミス・ヴァリエールの話は、とてつもないものだった。

ダンケ君・・・いや、ダンケ殿が東方の最も東の王であった事。
更に1万リーグ以上の東海の果てに大地がある事。

そして・・・そこが魔族の犇めく、大魔王の国である事。

「ハルケギニアは安全だったのですなあ。
魔族なんて現れた事は無い……」

一撃でリーグ単位を滅ぼす魔法なんて想像出来ない。
大魔王が使うというカク魔法……恐ろしい。
しかも、倒しても倒しても次の大魔王が湧いて出るらしい。
数千数百どころか、億の単位で魔族はいるらしい。
なんという繁殖能力だ……絶滅も出来ない。

「ミス・ヴァリエールの聞いた話が本当なら、
ササキ商会の隠蔽も頷ける」

そんな化け物の存在が確認されては、
ハルケギニアは大混乱に陥るだろう。
今までそれが防がれていたのは、エルフのせい。

「皮肉なものだ。
恐怖の象徴だったエルフに守られていたとは」

もしエルフがいなかったら、
我々は魔王との戦争に巻き込まれていただろう。
千年前にロバ・アル・カリイエとの交流が途絶えて良かった。

「……そろそろ、朝食か」

考え事ばかりで腹が減らないが、
食べておかないと・・・。
講義中に腹が鳴ったら大恥だ。

「さて・・・」

フライを唱え、研究室から出る。
今日は暑い・・・もう夏なのか。

「ん？」

ヴェストリの広場に生徒が集まっている。
こんな朝から・・・決闘か？

「まったく、朝から血の気の多い」

元気なのは良いが、連日の決闘は止めて欲しい。
革新派だか保守派だか・・・。
私は研究しながら、静かに暮らしていたい。

「皆さん！

何の騒ぎですかな!？」

いつも通り、決闘のようだ。

内容は子供の喧嘩なのだが、

時々、怪我人が出るから始末に負えない。

「ミスタ・コルベール、決闘ですよ」

「またあなたですか、ミスタ・ギトー」

いい加減にして欲しい。

学院唯一の保守派トライアングルなのは分かったから、
リーダーを気取って喧嘩を売るな。

彼が3年になってから決闘ばかりだ。

「そうだ、先生に立ち会ってもらいましょう。

ここには保守派と革新派しかないのですよ」

「・・・仕方ありませんな」

何時でも止めれるように見ておかなければ。

「それで、あなたの相手は誰ですかな？」

「1年のミスタ・ワールドです。
もうすぐ来ますよ」

1年の・・・彼か。

彼はライン、しかも1年だ。

こいつには恥というものが無いのだろうか？

「あなたはトライアングル。

そして上級生です。

この意味、分かりますよね」

「しかし、挑発されて黙っているのは貴族の名折れです」

・・・どうだか？

どうせコイツから挑発まがいの事をしでかしたのだろう。

「まあ、彼がこの場で謝罪すれば、

許してやらない事ありませんが」

「・・・」

もう、話したくもない。

同格以上の相手からは理由を付けて逃げるのに、
格下相手なら強気になって出るとは。

そっちの方が貴族の名を汚すだろうて。

「ん・・・あれは？」

「・・・ダンケ殿？」

ダンケ殿がこちらへ歩いて来る。

そして、観衆の壁が割れるように彼に道を開ける・・・。
こうして見ると一国の王だったというのも頷ける。

「さっきワルドと一緒にいた平民ではないか？
・・・何だ？」

ワルドは逃げ出したわけか？」

「代わりに・・・来た」

「・・・ダ、ダンケ殿！？」

まさか、ダンケ殿が代理で決闘を！？
ミスタ・ワルドは何をしているんだ！

「ミスタ・ワルドは？」

「保健室だ・・・怪我をさせた」

・・・怪我？

ミスタ・ワルドに、ダンケ殿が怪我を負わせた？

「一体・・・何故、怪我を？」

「遊びに付き合ったら・・・そうなった」

遊び？

ミスタ・ワルドは朝から鍛錬をしていたハズだが？

「・・・何をして、遊ばれたのです？」

「組み手・・・そう言っていた」

組み手で彼が怪我を？

彼は剣術も嗜んでいる武闘派だというのに？

いや、組み手が遊びとは一体？

「ミスタ・ワルドの怪我は、大丈夫なのですか？」

「利き腕を痛めている・・・。
それだけだ」

利き腕！？

ダンケ殿は利き腕だけを攻撃し、無力化させた？
そんな余裕を持たせた戦い、相当な技量差が無ければ不可能だ。

「平民よ。」

お前がワルドの代わりなのは分かった。
本当に良いのか？」

「・・・ああ」

この小童！

ミスタ・ワルドが辞退したというだけで十分だろうが！

・・・いや、もしかしたら？

ミスタ・ワルドとの組み手を遊びと言うのなら？

「・・・分かりました。」

このコルベールが見届けましょう。

ダンケ殿、武器が無いようですが？」

「・・・必要ない」

・・・そういえば、召喚された時から荷物すら持って無い。

ミスタ・ワルドに、無手で勝ったという事か？

東方の王とは、何者なのだろうか？

「おい、平民！

武器も無しに決闘しようと言うのか！
愚弄するな！」

「決闘・・・ではない」

成程、彼にとっては学生の喧嘩等、遊びに過ぎないと。
・・・魔王を相手取る力、見せてもらいましょう。

「ミスタ・ギトー、諦めなさい。
彼を決闘の代行者と認めます」

「クソ！

命があると思うな、平民！」

「何を！？」

開始の合図すらなく魔法を放った！？
もはやこれは決闘ではないぞ！

「ダンケ殿！

・・・おや？」

「な・・・？」

「・・・ん？」

エア・ハンマーを、しゃがんで避けた・・・？
あれを・・・避けた。

しかも、次の攻撃が無い事を不思議がっている。

「・・・」

「おい・・・」

「ああ、避けた」

「なんだよ、今の？」

「えっと・・・？」

「避けた、よな？」

「うん・・・避けたね」

「不意打ちはダメダメ」

「すげえ・・・」

観衆もポカンとしている。

ダンケ殿は第二波が無いのを不思議がって、
立ち上がってギトーを見つめている。

「・・・どうした？」

「へ、平民にしてはやるではないか！」

「ギトー、しっかりしろ！」

「何、外してるんだ！」

「え、今の避けたんじゃない？」

「しっ、黙ってろ」

「良いぞ、黒いの！」

「避けたよオイ！？」

「いける！いけるぞ！」

「スケさん、やっておしまいなさい！」

ギトーの声を皮切りに観衆が騒ぎ出す。

笑っていた保守派はヤジを、

悲観していた革新派は声援を飛ばす。

「ミスタ・ギトー！」

決闘の合図もせずに攻撃とは！

私に何に立ち会えと申したか、お忘れですかな！」

「うっ・・・その、つい・・・」

「・・・コルベール」

ギトーを責めていた私に、ダンケ殿が声をかける。

彼は首を横に振っていた。

「決闘では・・・ない」

「しかし・・・今のは」

「次は・・・最後まで・・・やる」

やる・・・殺る!?

背筋に嫌な汗が流れた。

あの頃、嫌という程嗅いだ死の匂いを思い出す。

「い、いいい、いけませんぞ!

決闘とは言っていますが!

これは! タダの! 喧嘩!

子供の喧嘩なのです!

殺してはいけません!」

「ああ・・・」

彼は呟くように、自然に答えた。

元々、知っている?

では、何故そんな事を言って・・・ああ、成程。

「・・・殺す?」

「今・・・そう言ったよな」

「か、革新派、卑怯だよ!」

「喧嘩だぞ、コレ!」?

「違うぞダンケ!」

「・・・あー、成程ね」

「ダメ! ダメだから!」

「ワルド、帰ってこい！」

観衆が混乱していますな。

魔法の質は精神力に影響する・・・となると。

「・・・え・・・う・・・あ」

観客の混乱に飲まれて恐慌する彼に、

魔法は使えない・・・という訳ですな。

相手を傷付けずに無力化させるとは・・・お見事！

「・・・」

「ひ、ひい！来るなあ！」

ダンケ殿がゆっくり歩み寄ると、ギトーが逃げる。

しかし、それも長くは・・・あ、つまり倒れた。

「ギトー！」

「逃げろ！逃げるんだ！」

「ギトーさん！」

「早く起きろお！」

「止めろ、黒いの！」

「殺すなよ！ 殺すなよ！

絶対に殺すなよ！」

「ワルド、あの野郎！」

「先生、止めて下さい！」

観衆も大混乱ですな。

ダンケ殿はどうするつもりでしょうか？

「・・・」

「あ・・・ああああ！」

「あああああ！！！」

ギトーは叫びながら杖を振り回している。

・・・よく見ると、失禁してますなあ。

ダンケ殿、少しやりすぎなのでは？

「・・・」

「ひゅー・・・！」

「ひゅー・・・！」

もう、呼吸がおかしくなっている。

ダンケ殿、早く終わらせて下され。

もう十分・・・あ、そうか！

「ダンケ殿、勝敗の条件ですが、相手の杖を落とすのも勝ちです。」

「・・・そうか」

やはり、ハルケギニアの決闘をご存知ないようですね。平民だけの国という事を失念していました。

「エア・ハンマー！」

「・・・！」

「ごほお!？」

なっ・・・今のは、観衆から!？
ダンケ殿は、むしろ勢いを付けて体当たり!？
無事だと良いのですが・・・。

「え？」

「え・・・お前!？」

「・・・ご、ごめん」

「ギトー巻き込んだぞ、おい！」

「卑怯だぞ保守派！」

「これは無いだろ！」

「決闘に手出しするな！」

「ギトーくん ふっとばされた！」

どうやら恐怖に耐えられなかった者が放ったようだ。
もっと早く気づいていれば・・・。

「・・・」

ダンケ殿が起き上がり、放った生徒を探している。

・・・怪我はないようすな。

そういえば、ルーンは『硬化』でしたっけ。

ギトーについては・・・まあ、死んでいないでしょう。

「うわ・・・」

「無傷かよ、やべえ」

「何で皆、そっち行くの！？」

「お前、寄るな！」

「黒いの、ソイツだ！」

「そう、今動いた奴！」

「・・・ヤヴァイ、ネタが尽きた」

「やっちまえ！」

さっきから観衆の中におかしな者がいるような？

・・・ああ、メイルスティア家の。
母親の影響でしようかなあ？

あの方の息子です、真相を分かっているのでしょうか。

「わ、悪かったから！
許して！」

「・・・」

不意打ちした彼が土下座する勢いで謝ってますな。
まあ、彼だけが悪いわけでは・・・。
ダンケ殿？
近づいて・・・何を？

「・・・」

「あ・・・あああ」

彼は1年の・・・借金まみれの家でしたね。
確か、苛められてるのをギトーが庇ってましたな。
・・・彼も、悪人ではないのでしょうかなあ。

「・・・何を、した」

「え・・・あ・・・」

エ、エア・ハンマーを・・・」

「・・・」

「・・・あ、あう」

なんというか・・・子供を叱っているように見えますな。
いえ、本当に叱っているのでしょうか？

「悪い事をした・・・のか？」

「は・・・はい」

「・・・そうか」

「う・・・」

もう、そうとしか見えません。

東方の王は、心が広いようですな。

「謝ったのか・・・？」

「え、ううん・・・」

「・・・」

「ご、ごめんなさい！」

父性というやつでしょうか？

ダンケ殿が彼の頭を撫でていますし・・・。

さて、そろそろ終わりとしましょう。

「この決闘！」

ダンケ殿の勝利とします！」

朝から良い物を見れました。

ダンケ殿の国が魔王に狙われ続けても、

幾度と無く戦え続けたのは、彼の人徳によるものでしょう。

第四話 ニホンは良い国なのでしょうな（後書き）

ラリカですが、当然この時代にもいます。

データベースの通り、息子は王に押し付けられた養子です。ダチヨウ倶楽部等のネタは酔ったラリカから聞いた話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6788p/>

ARMORED CORE 0 Moonlight Familiar

2011年1月23日14時34分発行